

辞典史

資料による中日大辞典編纂所の歴史 4

今泉潤太郎

初版の編集と出版

愛知大学における華日辞典刊行事業は、公式には本間喜一学長名による昭和28年7月7日付中華人民共和国政務院科学院院長郭沫若先生宛の辞典カード(東亜同文書院作製)返還を要請する書簡の発送をもって始まる。翌年にカード返還が実現したのを受け大学評議会において華日辞典編纂処の開設が承認され、昭和30年4月から辞典の編纂が始まった。以来12年の歳月をかけ昭和43年2月に愛知大学中日大辞典編纂處編『中日大辞典』が出版されて、事業は一応の完成をみたのである。そもそも鈴木擇郎が昭和8年頃東亜同文書院華語教員で組織する華語研究会で華日辞典の編集を提議し、これを受け同文書院が始めた事業であり、鈴木にとって35年の歳月を重ねた仕事の完成となった。中日大辞典は引き続き昭和61年には第2版、平成22年には第3版とほぼ20年ごとに改訂が行われ、愛知大学における中国語辞典刊行事業は半世紀を越えてなお継続中であるため一応といったまでである。

辞典本文1947ページ、6ポイント活字で総数600万字の規模と内容を持つ中日大辞典はB6判で印刷、出版された。〇〇大辞典と言えば週刊誌大のサイズが一般的であり、B6判の辞典は見劣りするせいか「小さな大辞典」などと揶揄されたこともあった。出版当時、同類の中日辞典で内容と規模において匹敵するものが無いので敢えてこの名が付けられたが、因みにこれを凌

駕する同類の辞典は26年後の平成6年に至り出版されたのである。

鈴木、内山正夫が編集を始めるにあたり立てた計画は先ず返還カードの整理と補充に1、2年、次に新語の収集とカード作製に2、3年、最終的に原稿カードの完成と印刷、校正に2年、計6年を想定したもので大雑把な段取りといったものであり、また編纂處開設時には専任教職員4名の辞典室メンバーによって先ず返還カードの整理、補充を進めるものの、本格的な編集は4、5人程度の新たな編集専従者を加えた後に開始されることを前提としたものである。本間、小岩井浄の同意を得たうえで辞典編集計画案は大学評議会に提案された。大学財政の逼迫のさなか新規採用人事を含む案件にもかかわらず大学評議会はこれを承認し、実際翌々年には増員が実現した。これは全学の絶大な信頼を受けている本間の提案ならばこそ実現できたのである。また愛大の辞典編纂に学内外から関心と期待が寄せられていたことも事実で、編纂處開設直後に出た「世界一の大華日辞典を編集、3年計画で取りかかる」の見出しをつけた毎日新聞の記事は、愛知大学の辞典編纂處が数年計画で華日辞典編集を始めた（大学評議会へ提出された予算は当面3年間であった）ことと中国語新語彙研究を課題とする3年間の文部省科研費の申請をしたことを混同したものであるにせよ、学内外にあった期待と楽観的予測を反映したものであった。

鈴木は後に「最初の見当は6か年程度であったが大幅な見込みちがいであった」とも「完成期がいつなのか全く見当がつかなかった、最初の6年が経過しても漠として確定し難かった」とも述懐しているが、結果的に完成までに予定の倍の期間を要した事実は当初計画が楽観的な予測の上に立ってつくられたことを物語っている。

編集専従者の異同が編集作業の進捗と密接に関連することは言うまでもないが、あらためてこの点から全編集期間を3期に分けて見てみよう。第1期は昭和30年4月～33年3月、鈴木、内山、桑島、張、今泉。返還カードの整理と補充を行う最初の段階。辞典室の整備、資料収集と執筆基準作成など準備に時間を要しカードの整理、補充に遅れがでる。第2期は昭和33年4月～38年3月、鈴木、内山、桑島（半ばまで）、張、今泉と新たに辞典専

従者として杉本、宗内、遠藤、志村、欧陽（短期間）が加わる。主として新語の収集、カード作製の段階。人員は倍増され作業は大いに進捗したが原稿カードの最後部は未完成で出版予定期限を迎える。第3期は昭和38年4月～43年2月、鈴木、内山、張、今泉。原稿カードの最終点検、印刷、校正の段階。原稿カードの完成と並行して原稿カードの先頭 a からの出稿、初校から念校までのゲラの出し戻しを行う。二、三校は外部から数氏の助力を得て行う。

この間の事情を「編者のことば」を借りて要約すれば、「1933年同文書院で開始された中日辞典編纂は1955年4月愛大で業務が再開され編纂委員会が組織された。鈴木がこの事業を発起し推進にあたって来た一人であったので編纂委員長を命ぜられ、専任者として内山、張、今泉、兼務専任委員として桑島によって発足し、1957年にはこれに遠藤、宗内、志村、杉本を加え短期間ながら欧陽も加わり編集陣容は充実した。しかし1963年後半から経費節約のため別途人件費を必要としない鈴木、内山、張、今泉となり（桑島は病気で早い時期に抜けていた）、これは大学財政上やむを得ない措置であったにせよ当初計画を大きく遅らせた一要因」とし、また「完成期を当初6年とした最初の見通しの甘さ」があったと述べている。

体制が整い本格的な作業が始まり編集は大きく進捗したが解決すべき課題も増えた結果、完成予定の昭和37年なっても作業は未だ完了しなかった。鈴木はやむを得ず数年の延長を願い出た。鈴木の説明を了解した本間は、約束違反であること、苦しい大学財政に更なる負担となること等を理由に渉る大学評議会を説得し、出版費は全て辞典刊行会が責任を持ち大学に迷惑をかけることを条件に編纂事業継続の承認をとりつけた。しかし増員枠は取り消されたうえ事務局から予定期限を大きく越えたことを理由に年度内の辞典室の明け渡しと移転を迫られるなど、逆風のなか更に6年を要して最終段階の編集作業は完了した。鈴木は後に「編纂の仕事が楽しいんだろう、いつまで続くか分からんぞとか、編纂室はいつ返してくれるのかとかと毎年の催促、こちらはもう一年という毎年の返事、局外者からはわれわれがのりくらしとやっているように見えたのかも知れない」、「いいものさえ作っておけ

ばなんとかなるという呑気な考えをもって居たものの資金調達能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願いし、お骨折りを願っていた」と当時を振りかえり述べている。

これより辞典の出版について述べてみたい。本間は返還された辞典カードが愛知大学で編集されることに決定した後、直ちに華日辞典刊行会をたちあげた。大学側から本間、小岩井、鈴木らと学外の辞典関係者ら数名で構成された評議員会によって運営される刊行会は、華日辞典を完成し刊行することを目的として設置されたものである。完成については鈴木の本間編纂處に全幅の信頼をよせて居る本間は、編集完成予定を大幅に超過したことから吹いた鈴木と言う逆風が台風とならぬための配慮を怠らず、また鈴木に対する信頼はいささかも揺るがず辞書の完成を温かく見守った。刊行については当初から自分が責任を持って印刷費、出版費を調達する覚悟であった。辞典の完成には巨額の費用が必要であり貧弱な大学財政では負担しきれない、外部からの援助と資金の導入を図って解決する他ない。思案を重ねた本間は編纂處開設に前後して印刷、出版の具体的検討を鈴木らと相談した。(続く)

資料

4-1 編集

- a 文部省調査局国語課との通信
- b 伊藤理事長宛 鈴木教授の書信
- c 福田恒存氏の所論に対して
- d 鈴木教授訪中
- e 本間学長の口上
- f 科研課題協力者へのお願い
- g 文部省研究費による機器購入
- h 科研課題協力者との通信 (1)(2)(3)(4)(5)
- i 朝日新聞社笠信太郎氏の電文
- j 朝日新聞社李家正文氏との通信 (1)(2)(3)(4)(5)

- k 中国現代用語辞典の編集 (1) (2) (3)
- l 関連記事 (1) (2) (3) (4)
- 4-2 出版
 - a 辞典刊行会暫定規約
 - b 辞典刊行会評議員会 (1) (2) (3)
 - c 伊藤武雄氏宛 辞典刊行会の書信
 - d 内山完造氏宛 辞典刊行会の書信
 - e 刊行会趣意書
 - f 本間学長との通信 (1) (2)
 - g 岩波書店の書信
 - h 大学評議会議事録 (1) (2) (3) (4)
 - i 刊行遅延のお詫び
 - j 関連記事 (1) (2)
- 4-3 『中日大辞典』の誕生
 - a 編者のことば
 - b 中日大辞典の編纂①
 - c 関連記事 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13)
 - d 書評他 (1) (2) (3) (4) (5)
 - e 編者 鈴木擇郎 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11)

今泉潤太郎 Imaizumi Juntaro 愛知大学名誉教授 専門：中国語学

拝啓 時下新緑の候貴会におかれましては会務益々御多端のことと拝察いたします
さて早速にて恐縮であります。が弊学におきましてはさきに中国より日本人民宛に寄贈
されました華日辞典原稿カードを完成し刊行するために目下準備を急いでおりますが
本辞典の用字用語につきましては将来これが中国人民にも使用される可能性がある点
などをも考慮しましてすべての注釈は最も正確な日本語・日本文でなされるように努力
致したいものと考えております

坊間には貴会より屢次にわたつて発表されました当用漢字・現代送りがな・かなづかい
などに関する参考書は多々ありますが従来の出版界の状況より考えますにそれら刊行
物の中にもなお誤謬脱落などの弊がないとは保しがたいものと考えます

つきましては弊学としましては国語・国字問題に関する最高の權威であられる貴会御発
表の刊行物を唯一の準拠として辞典編纂を進めたく存じておりますのではなはだ恐縮
であります。が終戦後現在までに御公表になりました国語国字問題に関する一連の刊行
物各二十部を御恵贈賜りますればまことに幸甚に存じます

もしまた刊行物の実費あるいは送料などのために御都合がつかみませんような場合には
なにとぞおろかえし御一報下さいますよう御願ひ申し上げます

はなはだ唐突にて御迷惑のことと存じますが辞典刊行事業に御協力の意味にて何分の
御便宜を賜りますよう宜しく御願ひ致します

敬 具

昭和三十年五月二十五日

豊橋市町畑町

愛知大学内

華 日 辞 典 刊 行 会

国 語 審 議 会 御 中

4-1 a

昭和 30 年 5 月 30 日

華日辞典刊行会 御中

文部省調査局国語課

拝復

5 月 25 日付国語審議会あてのお手紙を拝見いたしました。

お申越しの資料につきましては、文部省編国語シリーズ中の一巻として、「公用文の書き方 資料集」に当用漢字現代かなづかい等の一連の資料を集録いたしましたから、同封広告によっておもとめくださるようお願いいたします。

また、文部省刊行物の表記の基準を「国語の書き表わし方」の書名で発売させておりますので、あわせ御覧くだされば御参考になるかと存じます。

以上簡単ながら御返事のみ申しあげます。

4-1 a

拝復 さきに五月二十五日付をもつて国語国字問題に関する資料の件につきお願い致
しましたところ本日御懇篤なる御教示とともに資料目録の御送付を賜りましたことを
厚く御礼申し上げます
簡単ながら一言御礼申し上げますとともに今後ともなにとぞよろしく御指導御援助い
ただきますようお願い致します

敬
具

昭和三十年六月二日

豊橋市町畑町

愛知大学内

華日辞典刊行会

文部省調査局国語課

御
中

4-1 b

拝啓 時下秋冷の候先生には益々御元氣にて日中友好のため御活躍のことと存じます。華日辞典の編纂につきましては七月九・十日の会議後その会議の結果にもとづく新凡例・新執筆基準のとりまとめならびに印刷およびその発送に至るまでは既によく御承知賜わっておりますことと存じますが、その後の編纂室の活動としましては七・八月の学校の休暇中も引続きカードの整理、新語の蒐集など既定の方針にしたがい極力編纂工作を進めて参りましたがその二ヶ月の工作を通じて既定の凡例・執筆基準をもつてはまだまだ幾多不備の点があることが次第に明らかとなつて来ましたため九月以降はこれら不備の点に対処するための凡例・執筆基準の改正案の作成に努力し最近ようやくその成案を得ましたので、近く学内編纂会議に上程する運びに至っております。

さて、本日御多忙中折入つてお願申上げたいことがございますが、近く東京にて開催される中国商品見本市につきまして当編纂室としてはその発表当初から大いに注目しておりますところ本日「日本と中国」十月一日号第二面にその詳細な紹介がありその記事中に「展覧品リストは見本市委員会事務局で大急ぎ翻訳中であるが・・・」とあるのを読みまして、若しその翻訳の写しが入手出来ますならば辞典工作中商品名に関するかぎり非常に大きなプラスとなることは疑のないところであろうと考えます。

つきましては同見本市開催について緊密な協力関係を有せらるる日中友好協会の先生の御立場から右翻訳の写しの入手について格別の御高配を賜わることが出来ればと考える次第ですが如何でございましょうか。

御多忙の折柄でもあり、またあまり簡単なことでないかもわかりませす恐縮であります。先は右取急ぎ御願まで
敬具

昭和三十年十月三日

鈴木 沢郎

伊藤 武雄 様

〔注〕伊藤武雄日中友好協合理事長宛 鈴木教授の書信。

拝啓

秋冷の候貴方益々御精采の趣、心からお喜び申し上げます。

昨日はわざわざお電話いただき誠に有難うございました。その節お話ししの福田恒存氏のニュースにつきまして、早速図書印刷河野氏に電話し、福田氏の所論は何等の根拠もないこと、これを理由にただでさえ遅れている辞典の印刷をさらに遅らせるようなことは言語道断であること、をきびしく申しつたえておきました。

そこで読売新聞外報部中国関係担当者の釜井卓三君（四十四期）にも電話で問いあわせましたところ文化部担当とはちがうため、この記事は読んでおらず、事実とすればけしからぬ話だから、社外の人たちからいろいろな形で抗議するなり、反論するなりしては如何、ということでした。ところがすでに先月の新聞であるため、余部をいまから入手することができません。もし先生の方に切りぬきでも、おかきとりのメモ（全文）でもお手持があれば、誠にお手数ではございますが、至急拝借できませんでしょうか。福田氏がこういう文章をかいた根拠としてあるいは背景として、

一、 同氏がかねてわが国戦後の当用漢字、新かな使いに対する強力な反対論者である（最近では新憲法を当用憲法とよび、当然旧帝国憲法にかえすべきであると主張している）

二、 したがって新中国の文字改革に対しても敵意をもっている。

三、 中国では最近簡体字の徹底を促進しつつも、一方では文化遺産である主要古典に対する一般常識・教養をたかめるため、学校教育における古代漢語の学習課用を重視している。

四、 今春四月、簡体字の徹底をはかる根本方案のひとつとして、これまでそのままなっていた印刷活字の規格化を文化部と文字改革委員会が共同通達として指示した（当社月報本年五月号掲載記事）

が考えられます。

福田氏はおそらく自己の主観から、事実をよくたしかめずにあるいは故意に歪曲して執筆したものと思われます。同氏独特の論法は俗受けするところ大きく、心理的にあたえる影響は少くありません。私もすでに二、三の人からそれらしい話をきかされましたが、そのニュース・ソースがこの辺にあることが、先生からのお電話ではつきりしたような気がします。

鈴木先生はじめ諸先生方に何卒宜しくお伝え下さいませ。
右取急ぎおしらせ少々お願い申し上げます。

十月七日

自宅にて

大山 茂

敬具

内山 雅夫 先生

4-1 c

○御返事は会社宛にお送り下さって結構です。

〔注〕 大山茂氏は株式会社大安専務（同文書院四十期卒）。読売新聞に福田氏記事
中の事実誤認を指摘する投稿をした。

中國の新字體

(九月十五日)

中共では一九五四年に文字改革委員會といふのが出来、そこで充分検討した結果、二年後の一九五六年に漢字簡化法といふ成案が出来上つた。いはゆる新字體である。しかし、それを直ぐに實施しないで、國民の大衆討議といふ形を採り、三年後に五百七十七の簡略字體が教育、新聞、出版に採用されたのである。

當時、それをわが國の國字改革派は鬼の首でも取つたやうに騒ぎ廻り、彼の地に派遣された視察團は、そのうち中共はローマ字採用になると報告した。日本の大新聞でもそれを第一面に報道し、「將來漢字使用國は日本だけになる」といつた意味の大見出しを附けて、漢字廢止に拍車を掛けるものもあつた。

勿論、私は信じなかつた。そのうち彼等の言ふ事は嘘で、假名の無い日本と異なる中國では讀みを示す振假名としてローマ字教育を施してゐるに過ぎぬ事が解つた。それにして新字體は面白くないと思ひ、今年になつて一寸その事を皮肉つた。中國と日本とは同文同種と言ひながら、日本では漢文教育をおろそかにし、兩國でそれぞれ相談もせず、勝手に新字體を發明して、意思の疎通を妨げるやうな事をしてゐる、幾ら皮膚の色が同じでも「大磯」を「大礮」などと書かれては話を通じない、これでも同文かとかからかつたのである。昨年、友人の大岡昇平が中共へ行つて土産に毛澤東詩集をくれたが、何とそこには舊字體ばかり並んでゐる。詩の巧拙は別にして、毛主席は古典主義者、保守主義者である事だけは確かだ。この調子では五百七十七字の壽命もさう長い事はあるまいと思つてゐたが、ついこの間、ある人から中國大陸では今年の四月に入學した小學校一年生からは新字體を教へずすべて舊字體で行くと決まつたといふ話を聞かされた。理由は古典との斷絶と新舊兩方を覚える二重手間を避ける為だといふ。それにしても新字體がまさかかう短命とは思はなかつたが、それがもし本當なら新聞は前例に倣ひそれを大々的に報道する義務がありはしないか。至急調査して戴きたい。

附記

この最後の噂は誤報らしい。或は一地方の、それも單なる机上案だつたのかも知れぬ。

〔注〕文芸春秋昭和六十三年刊「福田恒存全集6」所載。読売新聞一九六五年九月十五日夕刊「東風西風」初出。附記は、大山氏の投稿により全集に再録された際つけ加えたものと見られる。

鈴木擇郎先生訪中資金募集趣意書

日中両国の親善関係を維持していくことが、きわめてたいせつなことであることはいまま
さら論をまちません。

終戦以来とゞざされてきた中国大陸との関係も、この数年来まず文化・学術関係からしだ
いに交流が行われるようになり、貿易の面でもわずかながら進展のきざしが見られるよ
うになってきました。

中部日本第一の商工業中心地たる名古屋市を有しているわが愛知県は、過去においてそ
の繁栄の一端を対中国貿易に依存しておりましたが、今後もあらゆる面で人的交流を促
進し緊密な関係を使っていくことは、当地方の将来のために重要なことであります。

今回、中国側の招待によって、愛知県訪中平和使節団十氏が大陸に渡られることになり
ましたことは、上述のような意味からもまことに喜ばしいことであります。

この使節団の一員として、従来中国研究の分野において大きな特色と熱意を示してま
いりました愛知大学からも鈴木擇郎先生が参加されることになりました。

御存知のように、同先生は大正九年以来東亜同文書院（のち大学）教授として数千の人
材の養成に努められ、愛知大学創立後もひきつづいて文学部教授として学生の薫陶に当
られているほか、講義の余暇には華日辞典編集委員会委員長として日夜精励され、また
多年学生就職斡旋委員長としても寧日なく御尽力下さっております。

先生は今回の訪中によって、平和使節団の一員としての重責を果されるほか、学術の交
流や華日辞典完成のための連絡の確立などの面で大きな成果を収めて帰来されること
であります。

ここに私どもは、先生が今回の長途の御旅行において真に御満足な活動をされることが
できますように、応分の声援をお送りする意味において、有志相はかつて資金を募り、
先生にお贈りしようということを発起いたしました。

なにとぞ、先生にゆかりのある有志各位の御参加をお願いいたします。

昭和三十三年二月初旬

右発起人代表

小岩 井 淨
小 幡 清 金
山 崎 知 二
胡 麻 本 篤 一
桑 島 信 一

〔注〕鈴木教授は北京に於いて中国側の専門家と会談し、研究機関を訪問した。

口上

二十日頃帰るつもりでしたので帰ってから申し上げるつもりでしたが、具合が悪くて遅れています。

辞書のことで文部省に参り、文部省大学学術局研究助成課長中西勝治（工博）に会ってら二月五日迄に文部省に到着する様に申請書を出せと云ふことであった。好意を持って呉れています。之れは研究費名義で資料買入（新字の研究）や人件費、旅費（研究者の集会〇）等を予算にとり込めるのではないかと思ふ。年額三十万円位、二年間分位申請したら如何かと思ふ。

出版の補助は其上で改めて出すことになる、之れは異なる課の方であり一二年後でよろしかるべし。

次に岩波へ行き、取締役岩波雄二郎氏に会って出版費どの位かかるか援助を受けられるかを聞きました処、これは語数等他詳細のことが判らぬと判断しかねるとの事であったが好意は持っています。之れも急がなくともよろしいと思ひますが何れ担当者が上京したら何らかの教示を願ふ旨申して来ました。

それで、研究助成名義で此際文部省に計画と予算を組み申請したら如何かと思ふ。何分よろしく願ふ。期日ハ二月五日迄に文部省に到着する様にとの事、之れが遅れるとだめとの事（今年ハ、内山君の給料も入れて見たら如何ですか。判つきハ内山君の名前を出して研究に専従することを書いてよいと思ふが。

研究助成の事、毎々やり居り小岩井先生よく知っていますから御相談され度く私の方よく判りません。

本間

小岩井先生

鈴木先生

侍史

一三三日中に帰ります

〔注〕文部省科研究費申請について、鈴木・小岩井教授宛 本間学長の口上。

一九五六年一月二六日のものか。愛大名古屋分校用箋使用。

4-1 f

謹啓 春暖の候益々御清祥の段大慶至極に存じます。

扱先般鈴木教授を代表者として文部省に申請しました科学研究（総合研究）「中国大陸に於て生成されつつある新語彙・新表現形式の総合研究」に關しましては御分担を快諾頂きましたことを厚く御礼申し上げます。該申請につきましては採否は未だ不明であります。が決定の節は直ちに御しらせ申上げることにて致しておりますので何卒宜しく御願致します。

次に、敝大学に於ては右申請と同時に別に機關研究として「中国語標準語彙の蒐集・整理」なる題目にて研究費を申請致しておりますが、最近に至りましてこの機關研究にも外部有力学者の御参加を仰ぐことが規則上可能であるばかりでなくその方が望ましいという關係方面の意向が明らかとなりましたので、申請を一部訂正致し先生の御協力をも仰いでその採扱が是非実現するよう努力致したいと存じます。

つきましては御職務多忙の折柄はなほだ恐縮であります。が華日辞典の編纂とも密接なる關係を有する本研究の性質を御考慮賜わり本研究にも御協力を賜わりますよう何卒宜しく御願申し上げます。

なお幸に御承允を賜わります場合には御面倒ながら同封承諾書に貴大学長職印と先生の御印鑑を御押捺の上小生宛御返送下さいませよう併せて御願致します。

敬具

先は右御依頼迄

昭和三十一年三月十六日

愛知大学学長 小岩井 淨
愛知大学教授 鈴木 択郎

殿

4-1 f

前略

去る十六日付をもつて機関研究「中国語標準語彙の蒐集・整理」申請について御協力頂きたく御承諸書をおねがい致しておりましたところ、早速御高承賜わり御多忙中にもかかわらず御急送頂きましたる段誠に有難く厚く御礼申し上げます。申請の採否は予断を許されませんが幸い若し実現の上は研究推進については改めてまた何分の御協力を賜わりたく存じております。まずは右一言御礼言上まで

草々

昭和三十一年三月〇日

小岩井 浄
鈴木 択郎

殿

4-1 g

謹啓 御研究所に御多忙のことと存じます。
さて早速であります。弊大学において外国語の音声学的研究に資するため、貴研究所
備付の音声の高さと強さを直視する機械について御示教を賜わりたく、当文学部鈴木
郎教授を来る一月十七日午前中に参上させたく存じますので、御多忙中はなほ恐縮な
がらその節は何卒よろしく御教示賜わりますようお願い申し上げます。
先は要用お願いまで

敬具

昭和三十三年一月十三日

愛知大学長 小岩 井 浄

東京大学理工学研究所

五十嵐 寿一 先生

〔注〕 文部省研究費により機器購入に係わる鈴木教授の出張依頼。

4-1 h(1)

拝啓

鬱陶しき日々の打続きます折柄先生におかれましてはお変わりもなく公私とも益々御多忙のことと存じます

扱さきに先生の御協力を頂いて申請中でありました本年度文部省科学研究費交付金につきましてはこのほどようやく全部の結果が判明しましたのでここに御報告申し上げます

総合研究「中国大陸に於て生成されつつある新語彙・新表現形式の総合研究」につきましては遺憾ながら採択されるに至りませんでした。が機関研究として申請しました「中国語標準語彙の蒐集・整理」につきましてはさいわいその重要性が認識せられました結果採択と決定され去る六月二十二日その通知に接した次第であります

交付金の金額は一三〇万円であります

研究の実施方法などにつきましてはいずれ御協力者各位の御意見も承りました上で決定致したいと存じますが先は取急ぎ決定後通知かたがた一言御礼申し上げます

敬具

昭和三十一年六月二十五日

研究担当者 小岩 井 浄

殿

4-1 h (2)

謹啓 盛夏の候益々御健勝のことと推察しております。

扱 さきに先生を研究御協力者のメンバーとして文部省に申請致しました機関研究「中国語標準語彙の蒐集・整理」の採択決定につきましては過日取急ぎ御一報申上げておきましたが、採択されました申請内容は別紙のとおりのものでありますので御一覽を御願ひ致します。

各個研究などと異なり、機関研究の場合は、全額を設備・備品費とすることが建前であり旅費・謝金などへの支出は認められておりませんので、御覽のとおり研究実施の面からは窮屈な使途内訳になっておりますが、御協力頂く先生の御研究費については僅少なから別途に考慮致したく存じておりますので、何卒御諒承賜りますようお願い申し上げます。

つきましては、今年度における本研究の目標は本研究に該当するような語詞を極力蒐集致すこととありますが、その実施につきましては先生方の積極的な御参加によつてはじめて成果が期待されるものでありまして、是非御参加をお願い致したい所存であります。しかしながら、先生方におかれましても、種々御都合もおありかと存じますのではなはだぶしつけないおたずねですが、本年度研究実施に御参加の可能性につきまして同封ハガキにて折返し御回答を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

追而 御参加をお申出頂きました場合には、あらためて御協議の上御担当部門および御担当資料を御決定頂いて御着手頂くことに致したい所存であります。

昭和三十一年七月二十一日

愛知大学長 小岩 井 浄

御協力者各位 殿

4-1 h (3)

拝啓 日増しに秋も深まります折柄益々御清栄の段大慶至極に存じます。

文部省からの補助による「中国語標準語彙の蒐集・整理」につきましては、さきに御快諾を賜りましたままその具体的着手についての御願いが今日まで延引致しましたことにつきまして誠に申訳なく存じております。

はなはだ遅くなりましたが、カード用紙を後日お手許へ郵送申上げる手筈に致しておりますので何卒御着手を御願ひ申し上げます。

はなはだ僅少ではありますが、御着手にあたって研究費に一端として、五千元を御受取り下さいますよう茲許同封致しましたので、御査納御願ひします。

今後の御研究費につきましては、原稿料という形式で、御提出頂きましたカードについて、当編纂処のカードにない新語につきましては、一枚二十円、用例として価値あるものについては十円という計算で差上げるように致したいと存じます。

なお蒐集・整理に関する輪郭をあらかじめ掴んでおきたいと思えますので、先生が引受けて蒐集に当られる資料あるいは部門、たとえば紅樓夢とか、現代商業尺牘とかを具體的に折返し御一報下さるよう御願ひ致します。研究費の受領書も御同送を御願ひ致します。

先は取急ぎ要用御願ひまで

敬具

昭和三十一年十月一日

小岩井 浄

先生

4-1 h (4)

謹啓 寒冷猶厳しい折柄先生にはお変わりもなくご研究に邁進されておられることと存じます。

扱昨年先生ほか大勢の先生方の御協力を得て申請しました文部省科学研究費（機関研究）「中国語標準語彙の蒐集・整理」につきましては、都合よく採択となり一三〇万円の研究費を交付され編纂処の設備・備品・資料などの充実を図ることができましたことは、誠に御同慶に堪えませんでした。

今年も申請書提出の時期が切迫しておりますが、今年は主として担当者各位が語彙蒐集に直接必要とされる資料費・研究費を獲得することを主眼として、昨年度申請して採用にならなかった「中国大陸に形成されつつある新語彙・新表現形式の総合研究」に聊か手を加えて、総合研究費の交付申請を致したいものと考えます。

つきましては先生におかれましても何卒御賛同御協力を賜わりたく若し御承允頂けますならば御面倒ながら別紙承諾書御作成の上至急御返送賜度御願申上げます。

先は要用御願ひ迄。

敬具

昭和三十二年二月一日

鈴木 沢郎

様

追而

別紙には研究題目を記入してありませんが、もし適当な題目名
がありましたら、鉛筆でもお書添おき下さいますれば多数の
御意見にしたがつて決定させて頂きたいと存じますので、併せ
てお願い致します。

4-1 h (5)

前略 御多忙のことと存じます。
さて、今回は文部省総合研究費申請に際し快よく御参加を頂き厚く御礼申し上げます。
標題につきましては、お申出頂きましたものを加えて当処におきまして種々協議致しま
した結果、重ねて先生に御相談申上げる時間的余裕なきまま「現代中国語語彙および表
現形式の総合的研究」と決定の上二月八日文部省に提出致しましたのでなにとぞ御諒承
いただきたく存じます。
先は御礼かたがたおしらせまで

昭和三十二年二月十一日

愛知大学
鈴木 択郎

〔注〕(1)～(5)は文部省科研費申請に関して研究協力者各位に出したものの。

電 報

着信番号
246四三三
八四 トウケウアサヒ 四 三二・二六トヨハシシ
アイチダ イガ クガ クチヨウ
コイワキジ ヨウ電話
番 5006対
者 広 中タイヘンシツレイシテイマスガ ゴ ケイカクノジ テンソノゴ
ノシンチヨクジ ヨウタイトシキンメンノコトナド シキウテガ
ミテオキカセクダ サイ「アサヒ」リウシンタロウ送 信 者
四 時 二 二 分
送 信 者
62
照 会 者
受 信 者
五 月 一 五 日 四 一 二大変失礼していますが、ご計画の辞典其後の進捗状態と資金
面の事など至急手紙にてお聞かせ下さい

朝日(新聞社) 笠 信太郎

4-1 j (1)

昭和三年七月十八日

記

愛知大学長 小岩井浄 殿

朝日新聞社図書編集部長

李家正文

- 一、朝日新聞社は愛知大学編修中の華日大辞典編集の補助費として、毎月（昭和三十三年七月末から）月額一、金拾萬円也をお贈りいたします。
- 一、右補助金支出期間は当社の都合並びに社会情勢の変転を考慮いたしまして、さしあたり向う一箇年を限り、二年め以後の支出継続か打切りかは事業の進行状況などを考慮して、期間満了前に協議、更新の方法といたします。
- 一、華日大辞典編修にあたり、中国現代語辞典（仮題）を、一年後に稿了して頂き出版したく存じます。

以上

4-1 j (2)

昭和三十三年七月二十日

朝日新聞社

愛知大学長 小岩井 浄

先般は御多忙中のところ遠路わざわざ御来学いただきまことにありがとうございます。

七月十八日付御来翰ならびに決定御通知、ありがたく拝見いたしました。華日大辞典編集に対し補助をいただき、一年後の中国現代語辞典出版を実現させるという原案の通りに御決定いただき心から感謝に堪えません。

御通知に接して、さつそく鈴木委員長を中心に再度協議をいたし即日現代語辞典の工作に着手してもらいました。この上は、御期待にそつよう全関係者の総力をあげて努力いたします。

なお、今後の進捗状況につきましては、逐次御報告致します。
取急ぎひと言御礼申し上げます。

4-1 j (3)

昭和〇年六月廿日

愛知大学

小岩井 浄様

玉案下

朝日新聞社

李家正文

梅雨のころ 如何御消光の御事かと御伺ひいたします

さて先日ハ、御来社迄され何かと御期待に添へず、失禮を極めました

折角の御立派な御仕事に御協力完遂出来ず、残念且つ遺憾に存じ重ねておわび

申しあげます

今廿日支払出しを以て第一年目第十二か月分一金拾萬円也、会計部へ支払ひ方とり計ひ

ましたから御査収下さいませ

あと萬事御協力者のうまくいきますやうおいのり申しあげております

御大事切に切に

かしこ

4-1 j (4)

拝啓 六月廿日付御芳書ありがたく拝見いたしました。
先日は、御多忙中のところ、かねて多大の御援助を頂いております華日辞典の件につきまして御訪ねいたしましたところ、種々親身のこもつたお話を頂きましてまことに有難く存じました。

経済的御援助の件につきましては、誠に残念ながら御社の御都合にて継続をお願いすることができませんでしたが、資金募集の面などにつきましてはその後も引続きなにかと御高配をいただきおります段、心から感謝申し上げます。

この上は、今後ますます資金面のあい路打開につとめ辞典内容の充実をはかつて、画期的に立派なものとして世に送るよう致したいものと存じておりますので、なにとぞよろしく御願い申し上げます。

先は、当方一同を代表しまして一言御礼を申し上げます。

敬具

昭和三十三年六月廿四日

愛知大学長 小岩井 浄

李家正文様

4-1 j (5)

昭和〇年七月三十日

小岩井 様

侍史

李家正文

昨日ハ御多忙のなかを御出かけ下され、大層辱くいろいろと失禮を重ねました

さて送金の件につき、学校法人ですが華日辞典の補助金として送った際、人件費支出とあつた際は税金に関係が生じ、大学並びに弊社も困ることとなるので、只今いろいろと協議の結果、資料購入代として御使用と御諒承願ひたく、人件費はあくまで大学から御支出の旨御ふくみおき下されたく

本日会計部を通じ、住友銀行あて送金致しますから何れ銀行から御通知致されると存じます

右要用のみ お大事に

鈴木先生にもよろしく

かしこ

4-1 k (1)

中国現代用語辞典カードの件

表記の件については、かねて、本年四月末までに御提出下さるよう御依頼申し上げておりましたが、その時期もすでに過ぎ、いよいよカード整理の段階に入りましたので、多忙中恐縮ですが、本月末までに御提出下さるようお願い申し上げます。

五月二十日

華日辞典編集委員会

委員長 鈴木 木 澤 郎

4-1 k (2)

評議会議事録 昭和三二年七月八日

華日辞典について

朝日新聞社の協力により現在企画中の大辞典を出す前に小辞典（現代語辞典の如きもの）を中間出版計画について報告あり

4-1 k (3)

昭和三十三年七月二十日

華日辞典編集委員会委員長

鈴木 木 澤 郎

殿

冠省 華日辞典編集事業については、かねて学長から朝日新聞社の笠信太郎氏に対し援助方を要請してありましたところ、七月上旬以来急速に具体化し、まずその第一段階として短期間のうちに「中国現代用語辞典」とも名付けるようなものを刊行する案が採り上げられ、爾来今日まで、当方から計画書を提出したり、東京本社の出版局長・図書編集部長の来訪があるなど連日あわただしい日々を過しましたが、十七日に至つて、原案どおり重役会議でパスした旨の内報に接しました。いずれ、文書による正式の通知があることと思われます。

別紙の計画書は、同社に提出したものの控えでありますので、御高覧願います。今回の参加スタッフは、この辞典の性質上、一応大辞典のメンバーとは別箇のものとして立案させていただきました。計画立案にあたり、皆様に一々御相談申し上げる時間的余裕なきまま、担当者の中に貴名を拝借させて頂いた向もありませんが、なにとぞ御諒承を賜りますとともに、本計画には是非御参加くださいますようお願いいたします。

なお詳細の点につきましては、同社から正式の決定内容に接しました上で全員の御参集をいただいで協議するのが順当であります。七月一杯は出席者の都合で開催不可能のようでありますので、とりあえず、昨十八日辞典室関係者のみで当面の方針を検討いたしました。それにつきましては、辞典室から委員が参上して御説明申し上げますことにいたしました。それにつきまから、ぜひ御参加、御協力くださるようお願い申し上げます。

以上

〔注〕朝日新聞社寄付金に係る「中日現代用語辞典」編集協力者に対しての参
加要請。

研究室めぐり 愛知大学華日辞典編さん所

三十七年には大辞典刊行 最新、完全な編集目指す

○：愛知大学の前身、上海の東亜同文書院大学が、昭和五年以来終戦まで進めてきた華日辞典編集の計画を受け継いで、『最新にして完全』な華日大辞典の完成を目指すのがこの編さん所。

同大学では、この辞典編集事業創始者の一人、鈴木沢郎教授と、新たに迎えられた元同文書院大学予科教授、内山正夫氏、台湾から迎えた婦人講師張祿沢さんの三人が中心になり、各学部教授スタッフを協力メンバーにして、三十年三月から編さん所を開設、本格的な編集を再開した。

○：中国古典から、最新の雑誌まで利用できる完全な辞典——これが華日大辞典編集の目標だが、最初の一年間は送られて来た基本カードの整理。この作業が終ってやっと基本カードの増補工作に移った。つまり、戦後に作られた新語、新用例を、あらゆる資料から見つけ出して、新しい時代に即応する辞典の基礎を作る、根幹的な仕事だ。

○：それにはまず戦後に国内外で刊行された「同音字典」「学文化辞典」「新華字典」など、多くの辞典との比較、対照が行われる。同時に変動を続ける新中国に生れる無数の政治、経済用語、それに新聞用語などを記録する（ロ）の工作も並行して行われる。

「中華人民共和国憲法」「毛沢東選集」「人民日報」「学習」などがこの資料になる。

こうした仕事のためには、学内各学部教授の緊密な協力が必要だが、老舎の翻訳で知られる教養部桑島信一教授や法経学部池上貞一、川崎一郎講師らの努力で、現在まで（イ）の工作が三分の一近く進み（ロ）の工作も順調に滑り出した。

○：同編さん所の計画では（イ）（ロ）の工作は三十五年に終り、三十六年に全カードを整理して、三十七年には大辞典刊行の予定だが、それに先立ち「中国現代語辞典」（仮称）出版の計画が去る四月から進められている。これは中国と関係のある実務字や、研究者の必要に応じて作られるもので、大辞典にはそのまま資料として活用出来るもの。出版の見通しがつき次第、直ちに編集に移る予定だ。

〔注〕朝日新聞 昭和三三年七月二六日所載。

大詰め近い『華日辞典』の編集 — 愛知大学 —

十数万語を収録 資金に悩む 出版は遅れそう

愛知大学では「華日辞典」づくりを続けてきた豊橋市町畑町、同大学内華日辞典編さん(纂) 処Ⅱ主任・鈴木沢郎教授Ⅱを、作業も大体終わる見通しがついたので、今年度末で閉処する。昭和三十年四月から六年計画だったが、途中、中国の文字改革などあつて一年延びた。同辞典はわが国では初めての十数万語を集録する。しかし閉処しても、出版するには、まだ整理事項が相当残り、また一千万円の資金がいるため、二年後になるようだ。

同辞典はアルファベット順に「A」から作り始め、いま「X」の部分まで進んでいる。一語ずつのカードが約三百箱にぎっしり詰まり、既出版の華日辞典には例を見ない一語一語の語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対・同意・参照語などが書き込まれている。『今年度末までに五十箱作らねばならないから大忙しです』と鈴木教授はいっている。

戦前、上海にあつた東亜同文書院大学が華日辞典の作成に着手、カード十四万枚を作つたが、戦後中国政府に接収された。それが政府要人、郭沫若氏らの好意で、日中友好協会を通じて日本政府に返され、愛知大学で完成することになった。国庫補助百二十万円、大学予算二百万円、民間会社などの援助など計五百万円をもとに鈴木教授、内山雅夫助教授、張祿沢講師ら九人で始められた。

十四万枚カードがあるといつても仕事は思いどおり進まなかつた。中国が昭和三十一年から三十三年にかけて、略字化と表音文字(ローマ字)化をし、表音文字などは計三回変わつたりしたので、そのつど書き直しするはめになった。それに専任処員がおらず、各処員とも講義を持ち、合い間合い間の仕事だったので、進行がにぶらざるをえなかつた。九人で出発したが、いまは処員七人。うち初めから続けているのは三人だけだから仕事の打ち合わせ事項も統一しにくい点もあった。しかし処員たちは閉処になつても、あとは現処員がコツコツ整理していけば完成できるまでにおきたい」と苦心をのべている。

なお出版については特殊な辞典なので単価が高くつき、大きっぱに見積もつても十三万語として週刊誌大二千ページで三千部刷り約一千万円かかる。小幡清金同大学学長代理は、仕事が今年度末で終わる見通しなので閉処する。出版は二年後くらいになるうが、大学としてもいままでに一千万円ほどつき込んできたし、早く実現させたい」といっている。

〔注〕中部日本新聞 昭和三十七年九月八日所載。

できた、世界最大の華日辞典

豊橋市町畑町、愛知大学の華日辞典編纂所（鈴木沢郎所長）では、来年春、十五万語のことは取めた世界最大の華日辞典を完成する。また全国各大学の外国語科で使われている中国語教科書の来年度版の改定も進められ注目をあびている。

なんと 15万語も

愛大 32年ぶりに実結ぶ

華日辞典は同編纂所が三十年四月開設されてから九年ぶりに完成するわけだが、この仕事に着手したのは鈴木沢郎教授が上海の旧東亜同文書院にいた昭和六年のことなので、実に三十二年ぶりになる。

編集には所長の鈴木教授はじめ同大学の中国語担当その他関係学科教授、助教、講師など。このなかには中国人女性の歐陽張祿沢講師（四二）もいる。

この仕事は日本にすぐれた華日辞典がないため困難をきわめたが現在ようやく「Z」の項の整理を進めている。

この新辞典は収録したことばの数が十五万語で、現在出版されている辞典で一番多い七万語のものの二倍以上。また現行の辞典に比較して①例文が多い②内容が非常に新しい③現行辞典には間違いがみられるが新辞典では発音、意味その他正確であることなどが特徴となっており、完成すれば世界的にも注目をあつめるとみられている。

一方、同大学の中国語教科書「華語萃編」は毎年学内の学生に使わせるため作製してきたが、全国各大学で使用しているどの教科書よりも内容がすぐれていることがすでに認識され、昨年は五百部印刷したのに不足した。広告もしないのに他の大学からの注文が多く、愛大の学生でこの教科書を買えなかったものもいるほど。

そこで来年は三千部を発行するため、華日辞典編纂所で改訂をはじめた。とくに発音に力を入れ、同編纂所の内山雅夫助教（四六）は映画の録音テープをききながら改訂を進めている。教科書の名も今年度のものから「中文会話教科書」と改めており、古い言葉をはぶき、新しいものにきりかえて完べきを期している。また今年度用のもはまたタイプ印刷だったが、来年度用のもは東京の出版社から活字印刷で刊行する

〔注〕名古屋タイムズ 昭和三十八年八月二十日所載。

完成間近い愛大の「華日辞典」

十三万語を詳細に収録 九年がかりの労苦が実る

豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん（纂） 処Ⅱ主任・鈴木沢郎教授Ⅱで
作成中の「華日辞典」がいよいよ今春、完成する。昭和三十年四月から六年計
画で始まったが、途中、中国の文字改革などあつて九年の歳月を要した。十三
万語を収録し、わが国初めての本格的辞典といわれるが、使用者が限られるた
め、出版の引き受け手はまだなく、出版はおくれるようだ。しかし完成は間近
い。同処員たちは「久しぶりに味わう正月気分だ」と胸をなでおろす半面、仕
上げになお精根を傾けると学者のきびしさを見せている。

辞典はアルファベット順に「A」から着手され、昨年末「Z」まで進んだ。一語ずつ
のカードが四百ほどの整理箱にぎっしり詰まり、これまで出版された華日辞典にはな
いていねいさで、一語ずつ語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対、同意語か
ら参照語まで記されている。収録後はいまの中国語の基本になる近代文学のことば以後
だから約七十年前の元時代以降で、中共政權の文字改革による変化後まで加えてある。
鈴木教授は「作成時期が、ちょうど昭和三十一年から三十三年にあつた文字改革に出っ
くわしたため苦労した」といつている。

文字改革は、略字化と表音文字（ローマ）化をしたわけだが、表音文字などは三回も
変わるなど複雑な中国語に対する中共の苦悩が、そのつど処員らの悩みとなり仕事をふ
やした。

この辞典編さんは昭和三十年に始まったが、もとをただせば、それにより二十数年前
の同六年にさかのぼる。鈴木教授が上海の東亜同文書院教授だつたころ同僚と辞典づく
りを手がけたのが始まり。カード十四万枚ができたところで終戦となり、中共側に全部
接収された。それが中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて日本人民
に贈られ、中国語に強い愛知大学で完成することになった。国庫補助百二十万円、大学
予算二百万円、一般会社の援助など計五百万円をもとに鈴木教授、内山雅夫助教授、張
祿沢講師ら九人で出発した。

「贈られたカードは、その後の中国語の改革で全然役に立たなかつた」と鈴木教授が
いうとおり新規着手と同じだつた。専任処員はわずか三人で、そのほかの処員は講義の
合い間に仕事をした。途中、転任の先生もあつたりして、いまは処員も五人に減つた。
初めから続けているのは鈴木教授とほか二人だけ。華日辞典とひと口にいっても中国に
さへ辞典の決定版がまだ作られていない現状だから、ふつうの辞典づくりのように欧米
の参考文献などあろうはずもない。古い辞典の誤りもすいぶん直したといわれる。

なお出版は特殊辞典なので単価が高くつき、大ざっぱに見積もっても十三万語として週刊誌大二千余^冊、五千部刷り三千万円近くかかる。初めから完成を暖かく見守っている本間喜一前学長が目下、出版先など探している。

鈴木教授の話 やつとここまでこぎつけてホッとした。しかし整理といってもこれがまたたいへんだ。処員とも力を合わせてがんばりたい。長い間かかったがいろいろな人の激励や支援があったから、ここまでたどれた、それに報いるためにも世の批判を耐えうるような辞典にしたい。

〔注〕 中部日本新聞 昭和三九年一月五日所載。

華日辞典刊行会暫定規約

- 第一、愛知大学国際問題研究所に華日辞典刊行会を置く
- 第二、華日辞典刊行会は日中友好協会を通じ中国人民保衛世界和平委員会より日本人に寄贈された華日辞典を完成し刊行する事を目的とする
- 第三、右刊行会に若干名の評議員を置き評議員会を組織する
- 第四、評議員会は辞典寄贈の趣旨に従い刊行会の運営を決定する
- 第五、刊行会に編輯委員を置き辞典編集に当る
- 第六、編集委員を以て委員会を構成し編輯の事を決定する
- 第七、委員の互選によつて編輯委員長を定める
- 第八、評議員の互選によつて評議員会の議長を定める
- 第九、評議員会議長は評議員会の決議に従い刊行会の事務を執行し刊行会を代表する
- 第十、刊行会に幹事若干名を置く、幹事は評議員会議長、編輯委員長の指揮を受け刊行会の事務を行う
- 第十一、刊行会に事務職員若干名を置くことが出来る
- 第十二、評議員、編輯委員を増加するときは評議員会の議を経るものとする
- 第十三、愛知大学長
本間喜一
- 第十四、愛知大学文学部長
小岩井浄
- 第十五、愛知大学文学部長
山崎知二
- 第十六、日中友好協会理事長
伊藤武雄
- 第十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第十九、熊野正平
熊野正平
- 第二十、坂本一郎
坂本一郎
- 第二十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第二十二、熊野正平
熊野正平
- 第二十三、坂本一郎
坂本一郎
- 第二十四、内山正夫
桑島信一
- 第二十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第二十六、内山正夫
内山正夫
- 第二十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第二十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第二十九、内山正夫
内山正夫
- 第三十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第三十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第三十二、内山正夫
内山正夫
- 第三十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第三十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第三十五、内山正夫
内山正夫
- 第三十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第三十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第三十八、内山正夫
内山正夫
- 第三十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第四十、野崎駿平
野崎駿平
- 第四十一、内山正夫
内山正夫
- 第四十二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第四十三、野崎駿平
野崎駿平
- 第四十四、内山正夫
内山正夫
- 第四十五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第四十六、野崎駿平
野崎駿平
- 第四十七、内山正夫
内山正夫
- 第四十八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第四十九、野崎駿平
野崎駿平
- 第五十、内山正夫
内山正夫
- 第五十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第五十二、野崎駿平
野崎駿平
- 第五十三、内山正夫
内山正夫
- 第五十四、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第五十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第五十六、内山正夫
内山正夫
- 第五十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第五十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第五十九、内山正夫
内山正夫
- 第六十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第六十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第六十二、内山正夫
内山正夫
- 第六十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第六十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第六十五、内山正夫
内山正夫
- 第六十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第六十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第六十八、内山正夫
内山正夫
- 第六十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第七十、野崎駿平
野崎駿平
- 第七十一、内山正夫
内山正夫
- 第七十二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第七十三、野崎駿平
野崎駿平
- 第七十四、内山正夫
内山正夫
- 第七十五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第七十六、野崎駿平
野崎駿平
- 第七十七、内山正夫
内山正夫
- 第七十八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第七十九、野崎駿平
野崎駿平
- 第八十、内山正夫
内山正夫
- 第八十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第八十二、野崎駿平
野崎駿平
- 第八十三、内山正夫
内山正夫
- 第八十四、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第八十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第八十六、内山正夫
内山正夫
- 第八十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第八十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第八十九、内山正夫
内山正夫
- 第九十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第九十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第九十二、内山正夫
内山正夫
- 第九十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第九十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第九十五、内山正夫
内山正夫
- 第九十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第九十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第九十八、内山正夫
内山正夫
- 第九十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百零一、内山正夫
内山正夫
- 第一百零二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百零三、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百零四、内山正夫
内山正夫
- 第一百零五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百零六、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百零七、内山正夫
内山正夫
- 第一百零八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百零九、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百一十、内山正夫
内山正夫
- 第一百一十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百一十二、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百一十三、内山正夫
内山正夫
- 第一百一十四、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百一十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百一十六、内山正夫
内山正夫
- 第一百一十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百一十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百一十九、内山正夫
内山正夫
- 第一百二十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百二十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百二十二、内山正夫
内山正夫
- 第一百二十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百二十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百二十五、内山正夫
内山正夫
- 第一百二十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百二十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百二十八、内山正夫
内山正夫
- 第一百二十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百三十、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百三十一、内山正夫
内山正夫
- 第一百三十二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百三十三、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百三十四、内山正夫
内山正夫
- 第一百三十五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百三十六、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百三十七、内山正夫
内山正夫
- 第一百三十八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百三十九、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百四十、内山正夫
内山正夫
- 第一百四十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百四十二、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百四十三、内山正夫
内山正夫
- 第一百四十四、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百四十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百四十六、内山正夫
内山正夫
- 第一百四十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百四十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百四十九、内山正夫
内山正夫
- 第一百五十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百五十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百五十二、内山正夫
内山正夫
- 第一百五十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百五十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百五十五、内山正夫
内山正夫
- 第一百五十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百五十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百五十八、内山正夫
内山正夫
- 第一百五十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百六十、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百六十一、内山正夫
内山正夫
- 第一百六十二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百六十三、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百六十四、内山正夫
内山正夫
- 第一百六十五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百六十六、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百六十七、内山正夫
内山正夫
- 第一百六十八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百六十九、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百七十、内山正夫
内山正夫
- 第一百七十一、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百七十二、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百七十三、内山正夫
内山正夫
- 第一百七十四、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百七十五、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百七十六、内山正夫
内山正夫
- 第一百七十七、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百七十八、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百七十九、内山正夫
内山正夫
- 第一百八十、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百八十一、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百八十二、内山正夫
内山正夫
- 第一百八十三、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百八十四、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百八十五、内山正夫
内山正夫
- 第一百八十六、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百八十七、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百八十八、内山正夫
内山正夫
- 第一百八十九、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百九十、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百九十一、内山正夫
内山正夫
- 第一百九十二、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百九十三、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百九十四、内山正夫
内山正夫
- 第一百九十五、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百九十六、野崎駿平
野崎駿平
- 第一百九十七、内山正夫
内山正夫
- 第一百九十八、鈴木木次郎
鈴木木次郎
- 第一百九十九、野崎駿平
野崎駿平
- 第二百、内山正夫
内山正夫

昭和三十年二月十六日

〔注〕二月十九日の評議会に提案されたもの。実際は辞典編纂所の名称で独立の機構として昭和三十年四月一日に発足した。

4-2 b (1)

拝啓 愈々御清適の段およろこび申上げます。

華日辞典編纂の件については、三月末、内田正夫氏が専任者として来任、編纂工作進行に関し諸般の準備を進めて居りましたが、この程大体これを終つたので、甚だ御足労ながら評議員（暫定規約による）の方々のご来会を願ひ、全般的の審議決定をお願いいたしたいと存じます。期日は七月九、十、両日といたしたいのですが、ご都合如何でしょうか折り返し御返事願ひたく存じます。御返事の次第により日時を確定の上評議員会議長本間喜一氏より改めて招請状を差上げたく存じます。御来豊については、失礼ながら往復汽車賃を差上げ宿舎は学長公館にお泊り願ひ予定です。尚暫定規約および参考資料同封申上げます。

敬 具

昭和 年 月 日

愛知大学 鈴木 振 郎

様

4-2 b (2)

拜啓 愈々御清適の段およろこび申上げます

さて早速であります。華日辞典編纂の全般的審議のために評議員全部の方々の御参集を仰ぐ件につきましては、さきに鈴木沢郎教授より評議員各位の御都合をおうかがい致しておりましたところ、七月九、十日の期日では野崎先生が講義の関係上御都合がわるいことが判りましたので、さらに七月十六、十七両日の線にて各位の御都合をおうかがい致しました結果、只今までに判明しましただけでも坂本先生の御都合がわるく御回答未着が二名となつております。

以上のような次第で期日を後に延期しますと一層御参集に支障を来す懸念がありますので甚だ勝手ながら会期は最初の案のごとく七月九、十日両日と決定させて頂くことに致しましたので何卒事情御諒承の上、七月九日午前の審議開始に間に合いますようなるべく七月八日中に御着豊賜りますようお願い申し上げます。

尚、乍恐縮御来豊の汽車賃につきましては一時お立替おき下さいますよう併而御願致します。

先は右取急ぎ御願ひ迄

昭和三十年七月五日

愛知大学長 本間喜一

殿

〔注〕辞典刊行会評議員会開催通知。

4-2 b (3)

華日辞典刊行会生る

贈られたカードを活用

中国から日本国民への贈物としても東亜同文書院大学の関係者の手ですめられたきた華日辞典編さんのカードが、本協会に贈られてきたことはすでに知られているとおりだが、その後カードは愛知大学に保管されていたが、このほど同大学学長本間喜一氏などの世話で「華日辞典刊行会」が結成され、さる六月九日第一回評議員会が開かれ、編さんに着手することとなった。

なお評議員にはつぎの諸氏が就任している（敬称略）

本間喜一（愛大学長）、小岩井浄（愛大法経学部長）、山崎知二（愛大文学部長）、鈴木擇郎（愛大教授）、熊野正平（一橋大教授）、野崎駿平（東北大学講師）、伊藤武雄（日中友好協会理事長）

〔注〕「日本と中国」第一一九号（一九五五年七月二十一日）所載。

4-2 c

拝啓 秋色日増しに深まります折柄、先生には益々御清栄のことと存じます。

さて、先生にはかねがね日本中国友好協会理事長・事務総長として日中友好の第一線に立って御活躍頂き同時にまた本刊行会の評議員としましても多大の御尽力を賜りましたことにつきまして心から感謝に堪えないところであります。

「日本と中国」紙上にて承りますと、先生には今般・バトンを内山完造氏に御引継ぎになりました由、長い間誠に御苦勞さまでございました。今後とも日中友好のため益々御尽力御自愛のほどを御願ひ申し上げます。

本会のその後の状況につきましては、さきに文部省より一三〇万円の補助金交付決定の際に御報告申上げまして以来御無沙汰申上げておりますが、実は昨年の会合以来、編纂工作は決定の線に沿って進行を続けており、格別新しい事情の発生もありませんため本年は全評議員各位の御参集を仰ぐということを取止めました次第でありまして、此点何卒御諒承頂きたく存じます。

次に、先生には過去一年半にわたって評議員として長い間一方ならぬ御尽力を賜りましたが御就任の際に「日中友好協会の常任理事会の決定として刊行会の評議員は、理事長という身分で引受けることになったので、理事長交替の際は、自動的に交替するものと諒承された」という御申入れがありましたことを考慮致しますとき、本会の評議員としての厄介な仕事も、内山氏の方へ御引継ぎを御願ひしなければならないのではないかと存ぜられるのですが如何でございましょうか。

つきましては、本会としましては、辞典の編纂・刊行に関しまして、今後とも先生に何彼と御力添えを頂きたく存じ、旁々先生が愛大の同人でもあられます点から、まげて引続き、御参加・御協力を賜わりたいと存じ、本会の協力委員を是非御引受け下さるよう御願ひ致します。

公私とも御多忙のことと存じはなはだ恐縮ですが、是非御承允を賜わりたく御考慮を御願ひ致します。

先は御礼並に御願ひまで

昭和三十一年十月四日

敬具

華日辞典刊行会

評議員会議長

小岩井 浄

伊藤 藤 武 雄 先生

拝啓 秋色日増しに深まります折柄、先生には日中友好のため益々御多忙のことと拝察致します。

「日本と中国」紙上で拝見致しますと、先生には今般日本中国友好協会の理事長に御任になり、日中友好のため一層の御尽力を頂くことになりました由、会の発展のため、誠に喜びに堪えません。今後の御奮闘を切に御祈り致します。

さて、先生の最初の御斡旋から実が結んで現在愛知大学を本拠として編纂が進められております華日辞典につきましては、本会発足当時、貴会の理事長であられました伊藤武雄氏が日中友好協合理事長として本会の評議員に御参加頂いておりました。このことにつきましては、当時伊藤氏から「自分の参加は理事長としての参加である。したがって理事長交替の場合には評議員の方も自動的に交替するものと承知願いたい」という御申出がありました。

この様な事情がありますので、今回先生が理事長に御就任になりましたにつきましては、本会に対しても何卒評議員を御引受賜わり、日中友好に意義ある本事業をして有終の美あらしめるために、御尽力下さいますよう切に御願ひ申上げる次第であります。

御参考までに、昨年発足当時の規約一部と最近の新聞記事による編纂の状況を同封申し上げますので御一覽を御願ひ致します。

先は右御願ひ迄

敬具

昭和三十一年十月四日

華日辞典刊行会

評議員会議長

小岩井 浄

日本中国友好協合理事長

内山 完造 先生

趣意書

わが国と中国との関係は有史以来きわめて密接なものがあります。両国の相互理解を深め、文化交流を盛んにし、政治・経済などあらゆる分野にいたるまで、緊密かつ友好的関係をもりたててゆくことは、ひとり日中両国にとって必要であるばかりでなく、世界の平和にとってもきわめて望ましいことであります。

不幸にして現在、両国間の国交は杜絶しており、相互の密接な提携は非常に困難な状況にあります。それにもかかわらず双方の国民の努力によって文化および経済の分野では、ある程度の交流が実現しております。

両国の円満な交流を促進するにあたって、双方の認識を深めることが、きわめて重要であります。このためにはまずお互いの言語を知ることがその前提になります。

本刊行会が近く刊行を企図いたしております中日大辞典は、中国語研究において不可欠なものであるばかりでなく、この辞典の刊行はまさに日中両国民の友誼と好意の賜物であると存じます。

旧東亜同文書院大学はつとに中国語教育の重要性を考え、昭和の初めから鋭意、中日辞典の編集につとめ、敗戦当時には十四万枚に上る資料カードが蓄積されておりましたが、終戦とともに中国側の接収するところとなりました。

このため、この事業の完遂はもはや不可能かと考えられたのであります。その後日中両国各界有力者の尽力、特に中国側の好意ある斡旋によって、一九五四年九月中国保衛和平委員会から日本中国友好協会あてに「中日文化交流のために日本人民に贈る」との手紙とともに上述の資料カードが送り届けられました。同協会は各方面の関係者と協議の結果、この辞典編纂にあたって、もとの関係者を多数擁し、かつその完成に熱意をもつ愛知大学にこれを委ねることとなり、本刊行会が設立されたのであります。

その後十余年この辞典完成のため、中国の社会、政治体制の変革にともなう言語の変化に即応した新語彙を数多く収録編集して、ついにこれを世に問うことになったことは誠に喜びに堪えないところであり、この間、朝日新聞社・中部日本新聞社をはじめとする各方面の篤志家の御厚情御協力によって、この事業が支えられましたことに對し厚くお礼申し上げる次第であります。

時あたかも中国に文字改革が進行中であつたため、編纂刊行ともに多くの日時を費しましたが、いよいよ目捷の間はその出版を見ることになりました。

この中日大辞典完成のあかつきには、前述のような中国各方面の御好意に對し感謝の意を表すため、辞典三千冊を左記の如く中国に贈りたいと存じます。

このころのみは中国関係機関に対する謝意のみに止らず、必ずや日中両国の友好と文化交流に資すること大なるものがあろうかと確信いたしました。

4-2 e

本計画刊行の意義をお汲みとりいただき、御好意ある御協力を賜わらば幸これに過ぎるものはないと存じます。

記

贈呈先 中国保衛和平委員会・中国科学院・中国国際貿易促進委員会・中日友好協会
贈呈方法 御協力下さった方の称号を贈呈本に記して一括発送

東京都千代田区神田神保町二ノ一四
株式会社大安内

中日大辞典刊行会

電話(二六五)一〇二二

〔注〕初版刊行趣意書。(一九六五年)

4-2 f (1)

謹賀新年 今年、華語辞典の発刊のめどをつけたく一所懸命やりたいと存じます。其れ付いて、次の件至急御一報御願申上げます。

- (1) 同文書院時代「八年」何年位調査にかかつていましたか、多分八年（二十年前）かかったと思いますが
 - (2) 何時 年月日 中共文化部から日本人民に寄贈されたのであったか？寄贈者名 義宛名 中日友好協会と思うが
 - (3) 愛大で調査始の年月（その従業者数）調査終了の見込、日
 - (4) 現在まで（愛大が引受けてから）どの位費用がかかったか 大体の額
- 右至急御一報くだされ度御願申上げます。

不
一

一月三日

本間喜一

鈴木先生

侍史

辞典刊行の趣意書等も

あつたら同封して送riくだされ度

〔注〕一九六一年か。

4-2 f (2)

拜復 華日辞典刊行については毎々御配慮をいただき、今回新年早々この件のため御奔走下さる由まことに有難く御礼申し上げます。

御来示の件左の通り御返事申し上げます。

(1) 東亜同文書院時代、戦時末期時代は停頓していたが、その時期をふくめて約十年。

(2) 中華人民共和国から寄贈を受けた年月

昭和二十九年九月

寄贈者名 中国保衛世界和平委員会 劉貫一

受贈者名 日中友好協会

(3) 愛大で編纂開始の年月

昭和三十年四月

編纂完了見込

昭和三十六年年度末

(4) 愛大がひきうけてから現在までに要した費用

備品、雑品、人件費(内山正夫、宗内鴻、遠藤秀造)、志村良治、杉本晃、石場俊、その他学生アルバイト等を含む)、原稿依頼費、計八、四三七、一五二

右総費用の内訳は次の通りである。

物件費

三、二六四、一五二円

人件費

五、一七三、〇〇〇円

合計

八、四三七、一五二円

〔注〕本問学長宛の返信。

4-2 g

拝啓 いよいよ御清勝にてお喜び申上げます。さて、さきに小社布川あて貴大学内華日辞典刊行会編華日辞典の出版について、小社に御相談くださいましてまことにありがたく存じました。ただちに御計画の概要書によって、種々研究をさせていただきます、このために再三会合を重ねて参りました。しかしながら内部のいろいろの事情は華日辞典の事業に与らせていただくことが困難であるとの結論になりました。とくに、目下小社において進行させております企画、とりわけ辞典関係のものがすくなく、予定どおり進捗せず難渋をきわめているものもありますので、残念ながら見送らせていただくことになりました。多数の出版社のうち、とくに小社へ御話を御かけ下さいまして、まことにありがたく感謝を深くしておりますが、右のような事情にて、なにとぞ悪しからず御諒承いただきたくお願いいたします。

延引ながら右御返事まで申上げます。

十二月十日

岩波書店編集部
波木居 斉二

愛知 大学
小岩 井 浄 先生
御侍史

〔注〕辞典出版依頼に対する岩波書店編集部からの断り状。

4-2 h(1)

評議会議事録 昭和四十年一月二十九日

華日辞典編纂出版の件

中国より日中友好協会を通じて本学に寄贈され、本学で編纂中の華日辞典は図書印刷出版株式会社の見積によると印刷費一、五一一万円とのことであるが、之に対する援助として某民間団体より五〇〇万円の寄付申出のある旨、本間前学長より連絡あり。之に関連し、華日辞典の印刷、出版について討議されたが、具体的な資料に乏しいため、結論に至らず、早急に事業計画書の作成、資料の提出をまつて出版について審議検討することとし、寄付金は受入れることに意見の一致をみた。

4-2 h (2)

評議会議事録 昭和四十年二月六日

華日辞典出版の件

本間喜一教授より、華日辞典編纂の経緯、出版に対する資金面の後援者並びに発売引受書店等につき説明あり、更に出版する場合の資金調達についても試案の説明あり、討議の結果左の通り決定す。

華日辞典は出版する。但し更に精密な計画の下に慎重に事を運び、大学の負担額は八〇〇万円を限度とする。

備考

華日辞典出版概要

頁数 二〇〇〇頁〜二二〇〇頁（日本語索引）

印刷費概算 一、五一一万〜一、六六〇万円

（索引をつける場合）

頒布価格 三五〇〇円（予定）

出版社 愛知大学華日辞典編纂処

発行所

発売元 大安書店

発行部数 一〇、〇〇〇冊

第一回印刷に要する費用五〇〇万円は日通社長の厚意による前渡金（二〇〇〇部購入の前渡金）をあてる。第二回印刷の五〇〇万円は購入予約金で賄う。第三回印刷の五〇〇万円と校正費用、日本語索引二〇〇頁増、其の他の雑費を含め五〇〇万円乃至八〇〇万円は予約金で不足の場合、大学で一時立替え、三、四年の中に頒布代金で償還する。但し最悪の場合八〇〇万円を限度として大学が負担する。以上

4-2 h (3)

評議会議事録 昭和四十年四月三日

華日辞典の件（報告）

鈴木擇郎委員より華日辞典の出版に関し先回評議会で報告した協力者（日通社長）とその後の交渉経緯と又、教養部佐々木講師の紹介で国際親善クラブ（中国との文化交流を目的とした団体）の協力者が得られる様交渉中の旨報告あり

4-2 h (4)

開学二十周年記念事業について

日時Ⅱ九月二十一日午後三時

場所Ⅱ豊橋校舎大会議室

出席者

大学側 脇坂学長他

同窓会側Ⅱ伊藤会長、大野副会長他

◇法人の目的及び事業について

(前略)

脇坂学長Ⅱ大学も徐々に研究施設の整備を進めているので法人としても積極的な御協力をお願いする。今日の評議会で決定した開学20周年記念事業を披露する。①は華日辞典の出版は41年5月の予定である。②は図書館の設立(六〇〇坪、二階建)である。財団法人の事業計画にある奨学金制度も充分活用して行きたいと思う。

(後略)

[注] 愛大同窓会会報第十二号(昭和四十年十一月一日)所載による本学評議会(九月二二日)の決定。

拝啓

本年もいよいよおしせまりましたが、貴方には御健勝のこととお喜び申し上げます。かねて愛知大学辞典編纂処編《中日大辞典》の刊行につきまして、各方面から絶大の御声援と御協助をいただき、その一日も早い実現を期待されておりましたにもかかわらず、もともと当方の微力にくわえ、編集出版過程における予期せぬ障碍のために、当初の進行計画をはるかに超過し、御予約者にはたいして多大の御迷惑をかけたことを心からお詫び申し上げます。現在関係者一同最後の努力を傾注し、ようやく印刷完了とともに製本段階に入りましたが、年末を目前にひかえての発行は、とりわけ業務の輻輳にともなうて、何かと手違いを生じやすく、万全を期するために新年一月末日発行に最終決定をいたしました。過去何回かにわたる発行情日の延期に、当然御不満のむきも多いことは存じますが、これ以上遅延することは絶対にございませぬので、何卒御寛恕たまわりたく、ここに謹んで陳謝とともに、お願い申し上げます。

敬具

昭和四十二年十二月十五日

愛知大学中日大辞典刊行会
函書印刷株式会社
株式会社大安

なお、前金予約（定価三千五百円のところ特価三千円）は、本年末までくりのべるにといたしましたので、この点もあわせておふくみおき下さい。

〔注〕刊行遅延の詫状（葉書）

4-2 j (1)

出版を待つ 華日辞典

本学の研究機関の一つである華日辞典編纂処は、鈴木沢郎教授を中心として、十年にわたる中国語の編纂にとりくみ、ようやく今春一応の完成をみた。これは語数十三万有余で、かつて例のない画期的な成果だとして、関係各方面から注目をあびている。

今までに二、三の出版業者に出版費を見積らせたところこの辞典は、語数が普通の辞典より二倍以上もあり、中国語の活字が出版所にないため、繁体文字、簡体文字の活字を造るためには莫大な費用がかかり採算がとれないという返事があつた。そこで、本間前学長が、現在出版を願って骨折っているが、不可能な場合は個人とか、中国関係社等の団体から援助をおおぎ、刊行会を結成するか、または中国関係の出版社に請負を要請する以外には方法はなさそうである。一方、鈴木教授は、縮版の辞典を出して学生や一般人が手軽に使用できるように、準備する意向である。

同辞典の編纂の沿革をみると、昭和八年、愛大の前身である上海の同文書院大学で、学生や研究者が中国語を勉強する際に満足できない状況から、同大学華語研究会のリーダーであつた鈴木教授を中心に、中国語を発展させるためには内容の充実した辞典が必要であるとして、華日辞典の編纂に着手したのである。そして、原稿カード十四万枚余りの編纂をしたが、完成間際に敗戦となり、カードは中国に没収された。戦後になって日中友好協会を通じ再三返還を要求したところ、昭和二十九年迎還要求が実現した。その後、中国に文字改革があつたので戦前編纂したカードの大部分を再整理して、発音、語意、略語、方言、用語例など、さらに學術語、古文が解説できるように編纂されていることは特筆すべきことである。

なお、現在市販されている華日辞典は二冊ほどで、いずれも五万語前後であるが、同辞典が出版されることになれば、その存在価値は貴重なものとならう。

〔注〕愛知大学新聞 昭和三十九年六月十五日所載。

中日辞典の刊行計画

この辞典の編纂は上海東亜同文書院大学において昭和六年頃に計画されたもので、当時中国語担当の日中両国の教授連に委嘱して推進され、敗戦時既に十四万枚に上る資料カードが作成されていた。敗戦の結果このカードが全部中国側に接収されてしまったので、この事業を日本人の手で完成することは不可能と考えられていたところ、その後、日中両国有志の運動と中国側の好意によって昭和二十九年「日本中国友好協会」に送り届けられて来た。そこで同協会では各方面の関係者と協議の結果、この辞典の元の編纂者で辞典完成に情熱を持っている愛知大学の本間喜一元学長、小岩井浄元教授にその編纂を委せることになった。愛知大学はこの光栄ある歴史的事業の完遂のために万難を排し喜んでその衝に当ることになり、鈴木沢郎元中国語主任教授が編集委員長、内山雅夫元教授が専従者となり、更に北京中国大学文科卒業の張録沢女士を招聘し編集委員十数名の手で資料カードの整理に当たって来た。しかるに中国においては政治社会体制の変革による多数の新語の発生、文字改革による標音新ローマ字方式、簡化漢字の採用、読音整理の取り入れ等目まぐるしい変革が行われたので、これに順応しつつ編纂を進めて来たが、一方日本においても当用漢字が制定され、単にカードの増補のみならず殆んど総てのカードが書き替えられねばならない状況で、このような事情の下で満十年を費やして一応脱稿の域にこぎつけることが出来た。この結果親字約一万字、語彙約十三万語を収録した大辞典となった。この辞典の出版されることにより、中国側の好意に応え得ると共に日中文化の交流に大いに役立つものと期待されている。なおこの間の経費については愛知大学、文部省科学研究補助、朝日新聞社、中日新聞社、日本通運株式会社等篤志家の援助により出版に踏み切ったものであると云う。

出版内容

装 禎 A5版二、〇〇〇〜二、二〇〇頁

定価予定 三、五〇〇円

出版元 愛知大学

出版予定 昭和四十一年中

なおこの出版計画に対しご質問等ありましたら満蒙援まで御連絡下さい。

〔注〕満蒙通信 第二二四号（昭和四十年四月十五日）所載。

編者のことば

発端：昭和初期以前に中国語を学んだ人にとって最大の悩みは教科書・参考書・辞書がすこぶる不備だったことである。中国にりっぱな辞典“辞源”“辞海”のあらわれたのはそれぞれ 1915 年・1937 年であった。それとても両者とも文語を対象としたものであって、中国語辞典としてはおそらく最初のものであった周銘三編“国語辞典”（総ページ 281 の小型のもの）は 1922 年、“王雲五大辞典”は 1930 年、“標準語大辞典”は 1935 年であり、本格的な中国語辞典“国語辞典”の出現は 1936 年であった。

中国語辞典が出版されたのは、むしろ日本の方がはやく、大正のはじめごろすでに石山福治氏の中国語辞典があった。しかし、それは学生のわたくしが使ってもはなはだ不満を覚えたものであった。（1935 年同氏は本文 1750 頁におよぶものを出版された）。その後、昭和年代になってからは、1928 年に“井上支那語辞典”、1945 年に宮島・矢野氏“ポケット中国語辞典”、1941 年に竹田復氏“支那語辞典”など近代的な中国語辞典があらわれて、一応需要にこたえてくれたのであったが、それとても時勢の推移と要求の増大高度化に応じ難くなっていた。

外国語の辞書をつくることは、もとより容易なことではない。明治中葉以来、すでにわが国における西洋諸国語、特に英・独・仏語の辞典がほぼ完備していたのは、わが国におけるそれらの外国語の研究が進んでいたからであるが、実はそれらの諸国ではそれぞれの国語の研究が進んでおり、りっぱな辞典ができていたからだともいえる。

しかし、中国においては従来学者は古文を重んじ、口語を軽んずる風があったので、中国語に対する中国の学者の研究はじゅうぶんではなかった。このような状況の下で石山氏や宮島氏・井上翠氏・竹田復氏らの辞典がよし多くの不備の点があったにせよ、中国語の辞典を編んだということは容易ではなかったことと思う。さはいえ、このような不備不完全な状態は克服されねばならないことを痛感したのであった。

従来、東亜同文書院は常時十数名の日中両国人の中国語教師を擁していたので、中国語辞典をわれわれの手で編むことは可能であり、またその責任もあると感じていた。そこでわたくしはわれわれの手で中国語辞典を編纂することを発起し推進した。編纂方針は井上辞典を出発点とし、これに必要な語彙を補充して現実の要請に応じ得る中国語辞典を作ろうというのであった。編纂業務は教学の余暇全員によって進められた。後に中日事変・太平洋戦争のために業務は停頓したが、敗戦後、敵産として中華民国へ接収されたときは、粗資料カード約 14 万枚あり、語数としては 7～8 万語であったろうか。当時の語彙蒐集は次の諸氏によって進められていた。次に記してその労を謝する。

鈴木沢郎 熊野正平 野崎駿平 坂本一郎 影山巍 岩尾正利 内山雅夫 山口左熊
木田弥三旺 金丸一夫 尾坂徳司 外に中国人講師八名（特に姓名を略す）

原稿カードの返還:戦後やおちついた 1953 年 7 月愛知大学長(元東亜同文書院大学長)本間喜一氏から、辞典原稿をかえしてもらおう願出ようと熱心に説かれた。わたしは原稿カード引渡しの際、接収委員鄭振鐸氏に対し「もし事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させてもらいたい」と口頭ながら申し入れてあったことを思い出し、願出で見ることにした。願書は日本中国友好協会理事長内山造氏に依頼し中国科学院院長郭沫若氏に送られた。同氏の斡旋により原稿カードは中国人民保衛世界和平委員会劉貫一氏から「日中文化交流のため改めて日本人民に贈る」という主旨で、1954 年 9 月引揚船興安丸に託して送りとどけられた。受入れの窓口であった日本中国友好協会は、この事業のもとの関係者を招致して協議した結果、もとの関係者が多く、かつ完成に熱意をもつ愛知大学にこれを委ねることになった。愛知大学では、この意義ある歴史的な事業を完成するため、その任にあたることを決意し、付託にこたえることとなった。

編纂業務の再開:本格的に中日辞典編纂業務が再開されたのは 1955 年 4 月であった。再開に当っては編纂委員会が組織され、わたくしが 1933 年以来この事業を発起し推進にあたって来た一人であったので編纂委員長を命ぜられ、専任者として元東亜同文書院大学予科教授内山雅夫氏、北京中国大学卒業張祿沢女史、愛知大学中国文学科卒業今泉潤太郎氏らを聘し、兼務専門委員として愛知大学教授桑島信一氏およびわたくしを加え、さらに学内外に協力委員数氏を委嘱し、一応の陣容をととのえた。1957 年にはさらに専任者として元外務省通訳官遠藤秀造氏、元 NHK 海外局宗内鴻氏、東北大学中国文学科特別研究生終了の志村良治氏、愛知大学経済学士杉本晃氏らを加え、その後さらに欧陽可亮氏も短期間であったがこれに加わり、編集陣容は充実された。この事業の完成はすべて上述の人人の御尽力によるもので深くその労を謝する次第である。特に内山雅夫氏のこの業務全般にわたっての綿密な企画運営と 13 年間 1 日の如きたゆまぬ精進、張祿沢女史、欧陽可亮氏によって多くの疑問が解決され語彙の採否が決定されたこと、今泉氏は途中 2 年間研究のためこの業務から離れたが、その後の長年月にわたり自発的に協力され、原稿カードおよびゲラの整理・漢字索引の研究作成や印刷全般にわたっての注意深い処理などに対して重ねて謝意を表したい。

なお、本学内外の下記諸氏から語彙蒐集の援助を受けたことを記して謝意を表する。

前神戸外国語大学教授(現関西大学教授)坂本一郎氏・前一橋大学教授熊野正平氏・前東北大学教授故野崎駿平氏・松山市西石井渡辺美登里氏・NHK 国際局佐藤堅一氏・中国研究所米沢秀夫氏・欧陽可亮氏

以上のうち坂本氏・佐藤氏は数年にわたり多数の新語を寄せられ、渡辺夫人はこの事業を新聞で知られ、年来中国において収録された中国料理に関する語彙多数を送って下さった。中国研究所からは御好意により資料カードを拝借することができた。本学内においては浅井敦・杉本出雲・向山寛夫(現国学院大教授)諸氏から援助を受けたことに対し謝意を表する。

本学学生諸君からも多大の援助を受けた。その人数も多数にのぼるので、一一姓名を記

さず、一括してここに謝意を表す。なお、伊藤克子氏には本辞典印刷段階の1966・67年の間根気のいるゲラの整理などを極めて正確に処理していただいたことを記して謝意を表す。

このようにして編集は順調にすすめられたものの、事業の大きさに比し編集陣容ははなはだ貧弱といわざるを得なかった。従って語彙の蒐集・選択においても所期の目標に達し得なかったことは残念に思っている。

一方においては幸なことに、五四運動以後大いに進んだ中国における中国語研究は、中華人民共和国成立後は、文字改革の気運が高まり、中国語の研究が急速に発展し、多くの出版物もあらわれ、辞典は“学文化字典”“同音字典”“新華字典”など小字典ながらすぐれたものがあらわれた。この外“機工辞典”その他の多数の専門辞書もあらわれて、豊富な資料が自由に入手することができた。わが国においても香坂・太田氏の“現代中日辞典”・鐘ヶ江氏の“中国語辞典”・倉石氏の“岩波中国語辞典”などが相ついで出版された。われわれのこの“中日大辞典”も以上のものから多大の恩恵を受けたことを記して日中両国の多くの学者諸氏に感謝の意を表す。

上述の如く、内外の事情はこの事業に有利に推移したようであるが、その反対に完成期をさきへ押しやるような事情も少なくはなかった。それは先ず完成期を1961年とした最初の見とおしが甘すぎたこと・中国における文字改革を全面的にとり入れたため多くの手なおし、書き改めを必要としたこと・3千字以上の新旧活字を鋳造したこと・桑島氏が病気のため早い時期にこの陣容から離脱したこと・1963年後半からは経費節約のため編さん陣容を縮小して別途人件費を必要としない鈴木・内山・張・今泉の4名としたことなどで当初予定の二倍以上、すなわち13年を経た今日ようやく完成を見るに至った。

中国からの援助：中国方面からは、1956年2月北京の中国人民対外文化協会より同音字典・簡明字典・中国語文その他の資料の寄贈を受けた。1955年12月中国學術視察団副団長馮乃超氏が愛知大学を訪問され、「為中日両国文化交流打好堅實的基礎」という題字を下された。1958年4月には中国法律家代表团、1964年6月には中国經濟友好訪日代表团、同12月には中国法律家代表团韓幽桐氏らがいずれも中日大辞典編纂室を訪れて激励して下さった。また1966年豊橋市長河合陸郎氏の訪中にあたっては、郭沫若氏は同氏に託して雄渾な墨跡「激濁揚清」を下さって激励して下さった。またわたくしが1958年に訪中した時には呂叔湘教授・文字改革委員会荏棟氏らから文字改革に関し多くの御教示をいただいた。何れも感激に堪えない。

編纂印刷資金に対する本学内外の援助：商業的採算に乗りにくいこの事業は、財政上の困難は免れ得なかった。幸にしてこの間1956年7月には文部省科学助成金機関研究費が交付され、1957年には朝日新聞社・中日新聞社および某氏（本人の希望により特に名を秘す）から多額の助成金が交付され、他にある二名の方から貧者の一灯なりと称して小額ながら交付されて編集を援助して下さった。この日中文化交流に理解ある御好意はまことに有難いことであった。

編纂は以上の如くして1966年4月には一応完了したのであるが、出版は資金の関係で目途が立たなかったが、本間名誉学長の数年にわたる奔走は稔り、4月に日本通運社長福島敏行氏の御好意により多数の予約をいただき、また時あたかも愛知大学創立二十周年に当るので記念事業の一環としてこの辞典出版を採用することになり、評議会の決議により出版費の大半が保障されたので印刷出版に踏み切った。その後、朝日新聞社・毎日新聞社からもそれぞれ多数の予約をいただいた。この両新聞社の予約はそれぞれ予約者の名義で中国へ寄贈して中国の好意を謝する予定である。

印刷出版：出版計画はすべて株式会社大安に委託し、印刷は図書印刷株式会社に依頼した。両者ともこの事業の日中文化交流・日中友好的性格に賛同し誠心誠意この辞典の完成に尽力された。株式会社大安は印刷所との交渉・印刷進行に関する計画・校正・予約・販売に関する計画・実施など一切をひき受け、図書印刷株式会社では中国の簡化漢字およびわが国では常用しない旧漢字など3千字以上の活字を新鑄するなど多大の犠牲を惜しまれず、大安・図書印刷・編纂者は常に緊密な連絡をとって円滑な進行をはかった。

校正は二三校を志村良治・荘司格一・長谷川良一・立間祥介・平田敏子・西山敏雄・井沢忠夫氏らのご協力を願った。

本間喜一氏は原稿カードを贈って下さった中国に対して、東亜同文書院大学の最後の学長として、また愛知大学の事業としての出版に対する責任を感じられてもろもろ配慮され、ついにこの事業を完成され、その責任を全うされた。すなわちこの事業は全く本間先生の熱意によってはじまり、御配慮によって完成したものであることを痛感し、茲にあらためて敬意と謝意を表するものである。

なお、その間1955年11月に学長に就任し、1959年2月物故された小岩井浄氏も愛知大学の窮屈な財政の中から編纂費を支出するため配慮され、また終始われわれ編纂員を激励し、その完成を期待して種々御尽力下さった。茲に謹んで感謝の意を表し、御冥福を祈る。

1967年11月

愛知大学中日大辞典編纂処
編纂委員長 鈴木 択 郎

〔注〕初版の序。

『中日大辞典』の編纂 ①

今泉潤太郎

一 『中日大辞典』の誕生まで

『辞典原稿カードの返還』 本学創立二十周年記念事業の一つとして始められ十三年の歳月を費やした『中日大辞典』は、一九六八（昭和四十三）年二月刊行された。

愛知大学における中国語日本語対訳辞典の編纂は、本学の前身ともいえるべき東亜同文書院（のち大学）における二十余年間の華日辞典編纂事業を受け継ぎ完成させたものである。

東亜同文書院（大学）における学術研究は全教員から組織された支那研究部によって推進されていた。その中に設けられた華語研究室では中国語教員の手で一九三三年頃から華日辞典の編集が始められ、敗戦時には約十四万枚（七、八万語）の未整理原稿カードが作成されていた。¹

一九四五年八月、敗戦によりこのカードも同文書院財産の一部として国民政府教育部京滬区特派員辦公処（委員長蔣復璁・委員鄭振鐸ら）によって敵産として接収された。²

東亜同文書院大学の最後の学長であった本間喜一（本学第二代学長は、一九四九年の新中国の成立をみるに及び小岩井浄法経学部長と相談し、同文書院の中国語教員として華日辞典編纂事業を進めてきた鈴木擇郎教授に対し、カード返還を中国側に要望してみてもどうかと熱心に説いた。

中華人民共和国の出現にともなう言語環境の激変により原稿カードが利用に堪えぬものとなったこと、辞典編集は長期にわたる困難な仕事であること等から、逡巡する気持ちが強かった鈴木教授も本間学長の熱意におされ、またカード接収に立ち会っていた際に接収委員の鄭振鐸氏（著名な文学者）に対し、もし将来事情が許すようになったら、われわれの手でこの辞典を完成させて欲しいと述べたことを思い出し、賛意を表した。

本間学長の指示により一九五〇年末、鈴木教授は中国側にこの要望を伝えるべく、同年一月に発足した日本中国友好協会に協力を求めた。同会は本間学長も理事をつとめ、日中間に正式の国交のない間、唯一民間外交を担った組織として中国側にも認知されていた。

また、本学国際問題研究所内に豊橋支部事務所を置き、支部役員・会員も大半は本学教職員学生であった。同会は快く協力を約し、ただちに島田政雄本部長から中国側の康大川氏に愛知大学の要望は伝えられた。島田氏は同会の文化教育担当者、康氏は中国新聞総署国際新聞局日語科長であり、当時両氏は、日中両国間の出版物に関する業務責任者の立場にあった。

さらに、一九五三年春、折から始まった中国在留邦人の帰国問題を話し合うため訪中し

た日本中国友好協会内山完造理事長からも、直接、郭沫若中国科学院院長に伝えられた。やがて中国側から『人民中国』編集部宛てに要望書を出すようにとの助言を受け、同年七月、あらためて本問学長名で原稿カード返還要望書が郭沫若・鄭振鐸両氏宛てに内山理事長を経て提出される運びとなったのである。

翌一九五四年四月十日、中国人民保健世界和平委員会劉寧一秘書長名で内山理事長宛てに返事が届いた。

貴方が本会郭沫若主席に出された手紙をうけとりました。貴方が過去上海において編集された「華日辞典」のカードの件について私たちは各方面をさがしましたがすでに関係部門の協力によりさがしだすことができました。

この「華日辞典」のカードは日本が投降したとき国民党の国立編訳館に接收され、當時すでに一部が遺失していましたがなお十四万枚が保存されており、解放後わが国の人民政府に接收されたものであります。

この辞典カードは敵産として没収したものであり、本来ならば、おかえしできないものであります。中日両国人民の友誼と文化交流促進の見地から、今はわが会がうけとり、文化交流の賜物として日本の方々にわが会からお送りするものです。

私たち相互の協力により中日両国人民間の文化交流が日ましに発展し、両国人民間の友誼の日ましに強固なることを信じております。かなりの数にのぼるこのカードを郵送することは不便でもあり、万一遺失するがごときことになればきわめておしいことでもありますので、どのようにしてお送りしたらよろしいか、なにとぞご返事ください。

この返信は日本中国友好協会本部機関紙『日本と中国』一九五四年六月十一日号に、「講和もまだ成立していない交戦状態継続中の国の国民に対し、このような措置がとられたことは歴史上稀有なことである」との編集部のコメントをつけ報じられている。

辞典カード所在を探索した経緯は島田政雄氏によれば次のようである。

島田氏の依頼により康大川氏は国際新聞局秘書長に調査を依頼した。その結果辞典カードは鄭振鐸氏のもとにあることが判明したので、この旨を上司の喬冠華・新聞総署国際新聞局長（のち外交部長）に報告した。しばらくして辞典カードは返還することになり、あとはこちらですということ、本件は康氏の手から離れた。⁴

原稿カード返還までに至る過程で、中国側でどのようないきさつがあったか調べずべもない。しかし、これは民間の小事であり、ものは経済価値ゼロに等しくとも、中華民国政府が敵産として接收した日本人の在華資産を、中華人民共和国政府がその持主である日本人の要望により返還するか否かという、高度な政治的判断が求められる性質の問題である。おそらく党・政府首脳のもとにあげられ、その指示を仰いで上述の如き措置となったものと推定される。

これをうけて日本中国友好協会は在華邦人の引揚船の興安丸を利用して引き取ることと

し、受取り使節として伊藤武雄日本中国友好協会理事長・鈴木樺郎教授らを派遣することとしたが、外務省から旅券が発給されず、やむなく乗船代表の島田政雄理事が代理して受け取ることとなった。九月下旬、興安丸に搭載された辞典カードは大型木箱二個に収められ、舞鶴港に到着後、東京の日本中国友好協会本部へ運ばれた。

日本中国友好協会は、この原稿カードは新たに日本人民に贈られたものであるとの確認のもとに本間学長ら愛大関係者および、このカード作成に従事した元東亜同文書院大学中国語教員らを招致し、受け取った原稿カードの処置をめぐって協議した。その結果、もとの関係者が多く、かつ辞典完成に熱意と実行力のある愛知大学にこれを委ねることに参加者全員の意見の一致をみたのである。

この結論を得て、本間学長は本学の手で日本人民を代理して、華日辞典を編纂することを正式に大学評議会に提案することとした。かくして十二月八日、原稿カードは愛知大学に到着した。なお後日この措置をめぐり、一部から非難がましい動きもできたが、それは辞典完成の責を担っている愛知大学として認められるはずもなかった。

初版の編纂 一九五五(昭和三十)年二月の評議会によってこの華日辞典編纂という意義ある歴史的事業を完成するため、本学がその任にあたるのが正式決定された。

戦後、無一物から出発した本学はようやく十年目に入り、あらゆる面において基盤の整備が緊急課題とされ、特に財政面では慢性的な収支のアンバランス状態にあり、長期にわたり多くの経費を要する辞典編纂の事業化に対して強い危機の念をいだく向きもあった。

このため、本間学長は辞典編纂の意義を学内に対して大いに説得することにとめるとともに、大学財政に負担をかけぬように辞典刊行を遂行させるべく、「華日辞典刊行会」を設立させた。これはこの辞典に対して広く外部の意見を仰ぐとともに、辞典出版上の情報を広く集め、さらに将来の出版に備えて外部資金の導入を意図して設けられたものである。

一九五五年六月正式に発足した華日辞典刊行会は、本間学長・小岩井法経学部長・山崎知二文学部長・鈴木教授ら学内関係者および、学外から伊藤武雄氏と東亜同文書院大学中国語教授であった熊野正平一橋大教授・野崎駿平東北大学教授・坂本一郎神戸外国語大教授らを評議員として構成された。

刊行会設立に先立つ同年四月、華日辞典編集委員会が組織され、正式に「華日辞典編纂處」の門札が現在の大学記念館西側、豊橋鉄道渥美線治いの建物(旧陸軍養生舎、現教職員組合事務所)に掛けられた。委員長に鈴木樺郎教授、専任者として編集主任内山雅夫教授(東亜同文書院大中国語教授)・張祿澤講師・今泉潤太郎嘱託を聘し、同時に兼務専門委員として桑島信一教授(東亜同文書院卒)、協力委員として学内外の中国語専門家若干名を委嘱し、一応の陣容が整った。当初は東亜同文書院大学の中国語教員を極力招聘する方向で折衝が行われたが、結局、発足当初は前記メンバーということになった。この後、編集が進捗するに従い、一九五七年には東亜同文書院卒の遠藤秀造・宗内鴻両氏、志村良治・杉本晃ら各氏を委嘱し、編集陣も強化された。おくれて東亜同文書院中国人講師の欧陽可

亮氏も短期間加わった。

編集にあたってこの辞典を、中国語を通して現代中国を多面的に深く理解するための工
具書(編注 中国語で参考書のこと)と位置づけた。このために語彙面では現代漢語を
中心とし、中古白話・古漢語も最低必要範囲内で収録し、重点的に中華人民共和国の新事
象を反映する政経用語から科学技術用語・動植物用語に至るまで広範囲に、可能な限り一
次資料から語を採ることとし、用例と解説に当たっては中国小百科辞典の如き性格をもた
せ、漢字・発音表記その他、できるだけ規範化され、かつ実用性に富む中日辞典をつくる
こととした。この編集スタイルは他の追隨を許さぬ『中日大辞典』の特徴となり、今日に
及んでいる。

また、使用する漢字は可能な限り簡化字を採用することとし、発音表記や文法用語、さ
らに解説など内容全般についても、中華人民共和国において制定された言語規範化の方向
に沿うことを心掛けた。しかし、日本人のための中国語辞典であるという観点から、見出
し語として掲げる単語認定の規準をゆるくし、できるだけ広く多くの語を見出し語として
出したことや、解説に当たっては客観・中正を保つ姿勢を貫いたことなどは、編者として
は当然のことであつたとはいへ、後々議論をよぶこととなつた。

開始に当たって編集に四、五年、印刷に二年、計五、六年はかかると大雑把に見込み、
編集の進捗によって計画を修正していくこととした。返還された原稿カードの点検を終え
てみると、このまま使用できるものは皆無に近かつた。カードは必要に応じて用例その他
に利用することとなるであろうとは編集前から予想されていたが、二十七年の歳月は中国
語をとりまく環境を変えたばかりか、中国語そのものをも一変させてしまっていたのであ
る。⁷

歳月の経過と社会の変動によって姿を消した語の整理、新たに現れた語や用例の採録の
ほか、次々と発表され実施される一連の言語改革、すなわち簡化字の発表、印刷通用漢字
の制定、異体字の廃止、拼音(中国式ローマ字発音記号)の採用、異読音の整理、標準音
の制定など、辞書作りの根幹にあたるものの採入れに追われるなかで時間は過ぎていった。

編集の過程では内外からの援助があり、中国側からも多くの援助をうけた。華日辞典編
纂処開設後は中国人民対外文化協会から各種図書資料が多種送られてきたが、中国図書の
入手が困難な当時にあつて、まことに得がたい貴重なものであつた。これは特に一九五五
年十二月、郭沫若氏を団長とする戦後初の訪日団である中国學術視察団の副団長馮乃超中
山大学副学長が本学を訪問して辞典編集処を激励し、帰国後関係方面に報告した結果であ
つた。

一九五八年五月には愛知県平和代表団副団長として鈴木教授が訪中して、郭沫若氏と会
見したほか、中国科学院語言研究所や文字改革委員会を訪問し、辞典編纂上有益な教示を
得て帰国した。また一九六六年豊橋市長河合陸郎氏が訪中する際、脇坂雄治学長は河合市
長に「中日大辞典に対し寄せられた郭沫若氏の好意と協力を深く感謝する。おかげで近く
辞典は出版される」との謝辞と近況報告を託した。これに対して郭氏から同市長に託して

雄渾な筆跡「激濁揚清」が贈られ、本大学の辞典編纂事業を励ました。⁸

学外からも資料提供や単語蒐集などの協力があつた。なかでも華日辞典刊行会理事の坂本一郎神戸外国語大学教授や、NHK国際局の佐藤堅一氏からは数年にわたり多数の新語カードの提供をうけ、また渡辺美登里女史は中国料理に関する専門語を多数寄せてきた。さらに中国研究所の好意により資料カードを借用することもできた。学内の中国関係教員や学生らの協力・援助も少なくなかつた。

この他、外部からは財政面でも援助もあつた。とくに一九五六（昭和三十一年）七月、文部省科学助成金機関研究費の交付をうけ、翌五七年には朝日新聞社・中日新聞社・蒲郡市在住の匿名氏などから総額五百万円にのぼる助成金の提供をうけた。また二名の方から「貧者の一灯」といって少額の寄付がよせられたことも辞典関係者を感激させた。

このようななかで編集は進捗していったが、この事業の大きさに比し編集陣容ははなはだ貧弱と言わざるをえなかつた。当初たてた一九六一年頃という完成目標が大幅にずれこむ見通しとなつてからも、さらに予定を延ばさざるをえない編集上の問題も出て、そのついで大学当局や、当初より編集出版上の助言を得てきた株式会社大安の関係者に迷惑をかける始末となり、結果的に期間は予定の二倍となつた。このため大学財政のひつぱりもあつた。一九六三年後半以降は経費節約のため編集陣容を半減し、別途人件費を必要としない鈴木・内山・張・今泉の四氏のみとなつた。事務局からは辞典編纂処の建物の明け渡し、完成時期の明示を求められるなど、編集開始以来ずっと夏休み・冬休み返上で努力してきた編集メンバーにとつて気の重い時期もあつた。本間氏はすでに名誉学長になつていたが、来学時には必ず編集メンバーを励まし、辞典の進捗に常に関心をもつた。

一九六五年、辞典原稿はようやく一応の脱稿をみた。組版をすれば優に二千ページを越す規模となると推定される。国内外を問わず中国語各国語対訳辞典は戦後も何種類か出版され、中国語日本語対訳辞典だけでも三、四種類出ていたが、当時最大の規模となると予想されたので敢えて愛知大学『中日大辞典』と命名することとした。

辞典出版のため組織されていた華日辞典刊行会では当初から本間学長が、平凡社・岩波書店・三省堂など大手出版社に対し打診をしてきたが、いずれも成約には至らなかつた。

一九六六年、本学創立二十周年記念事業の一つとして『中日大辞典』刊行の補助が決定され、予想印刷費の約半額程度が約束されたので、辞典刊行会は自力で残額を調達して自費出版することに踏み切つた。辞典出版計画には以前から憚大安の小林実弥社長から助言を得てきたが、正式にこの辞典の出版発売が同社に委託された。小林社長及び小池洋一専務とともに東亜同文書院の卒業生で、同社は当時、日本における中国書籍文物輸出入販売専門店であり、日中学术交流の裏方として大きな役割を果たしていた。小林社長らは本間・鈴木両氏からの要請に応え全面的に協力したのである。

辞典刊行会は本間氏を中心に、外部からの支援で残額分を得るべく懸命の努力をした。いくつつかあつた財団や個人からの助成金の話も実らなかつたが、同年四月、本間氏の奔走の結果、日本通運(株)福島敏行社長から『中日大辞典』の予約金として多額の資金援助の申

し出を受けた。刊行会は中国へ一定部数の辞典を贈呈することを条件としての資金援助、すなわち辞典予約金方式を募ることにして、これを広くマスコミに呼びかけることとした。その結果、日本通運に引きつづき朝日新聞社・毎日新聞社から大口の予約を得ることができ、さらに貿易商社や個人などからも多数の予約が得られた¹⁾。それでもなお若干の不足が生じたが、この部分は初版売り上げ金から返済することを条件に、大学より貸付けを受けることとなり、ようやく印刷費の目処が立つに至った。

印刷は大安を通して二、三の印刷会社に打診の結果、図書印刷側に依頼された。同社は日本で未使用の簡化字二千数百字の母型を新鑄することに踏み切ったので、一九五六年中国務院が公布した簡化字は全て採り入れることができたが、簡化偏旁をもつ約四〇〇〇の漢字については作成費用の負担ができず断念せざるを得なかった。この分は後に、増訂版発行の際に初めて可能となった。印刷は従来の活版印刷によるもので、静岡県沼津市の同社原町工場で行なわれ、工程の後半にしばしば同工場で出張校正を行なった。

なお校正は学外からの専門家の応援や、こまごました点検には本学学部生多数の協力を得た。印刷にかかってから二年十ヵ月後の一九六八(昭和四十三)年一月末、ついに『中日大辞典』が誕生した。編纂開始から数えて十三年間かかったことになる。

二 『中日大辞典』の出版・評価

初版の出版 『中日大辞典』B6版、八ポイント活字横二段(各段二十三字×七十行)組み、頁当り字数三三三〇字である。日本語索引六十八頁、漢字部首索引八十八頁、付録十一種二十頁、本文一九四七頁で総頁数二二三頁となった。採録した見出し字(親字)は簡化字二二三八字を含む七八七八字と、簡化字に対応する繁体字・異体字三三二七字を併記し、総計一万一九五字である。日本語索引には約一万八〇〇〇語を載せ、例文中からも引くことができるよう工夫を加えた。辞典見出し語は約十二万語に及んだ。

黒に近い濃紺の表紙に、曹全碑(漢隸の代表作)から採録した「中、日、大、辞、典」の六字の金文字がよく映えた。日中文化交流のための愛知大学の事業として作られたものであるという観点から、華日辞典刊行会では利用者の負担を考慮し、定価三〇〇〇円と破格の値段に設定した。

一九六八年二月一日、『中日大辞典』は初刷一万冊、大安を総発売元として売り出された。四月十二日、豊橋校舎四十番教室(現4号館情報処理センター実習室)において中日大辞典出版記念講演会が行なわれた。挨拶を玉城肇学長・本間名誉学長・坂本一郎関西大学教授の三氏が行ない、ひきつづき編集に当たった三名、すなわち鈴木擇郎教授が「中国の文字改革」、今泉潤太郎助教授が「日中漢字の異同」、内山雅夫教授が「中日大辞典の編纂を顧みて」と題し記念講演を行なった。同日夜、豊橋市内陽華楼において本学教職員主催祝賀会が催された。

同年六月、辞典予約分二二〇〇部を一括して予約者の名義で、中華人民共和国貿易部駐

日代表事務所（国交正常化以前の中国政府の出先機関）を通して中国日本友好協会へ贈呈し、これまでの好意に感謝するとともに、この辞典に対する中国各方面の批評を請うた。六月二十一日付で同協会から大安を経由して、辞典刊行会に礼状が届いた（原文横書き。中国文は以下同）。

貴会贈给我会的《中日大辞典》一二〇册如数收到。对此隆重的赠品，谨致谢意。

贵会经过多年的努力，编纂出版了《中日大辞典》，它对于日本人民学习毛泽东思想，了解中国社会主义革命和社会主义建设，特别是史无前例的无产阶级文化大革命，从而发展中日友好和文化交流将起积极作用。对贵会为此而辛勤劳动所取得成果，谨致祝贺。

我会将不辜负贵会的厚志，拟将这批辞典分送给各有关单位和个人参考、使用，以资中日两国人民的相互理解，进一步发展两国人民的战斗友谊。

文化大革命の渦中を物語る言葉でいろどられてはいるが、辞典は必ず中国各地へ送られ広く利用されるものと期待され、事実その期待は裏切られなかった。

辞典は中国以外の世界各国の、アジア研究で著名な大学図書館へも愛知大学の名で贈呈されたが、なかには受領通知の来ないものもあった。

辞典への評価

『中日大辞典』は一定の中国語の学力をもつ日本人が中国の新聞・雑誌・一般書を読む場合に直接役立つ辞書、いわば『広辞苑』の中国語版の如きものを目指した。刊行後、世評は概して好意的であった。前記の辞典出版記念講演会で坂本一郎氏は「予想以上に立派な出来ばえで世界のトップの中国語辞典だ。中国語学界の一人としてお礼を述べたい」と述べている。

『朝日ジャーナル』は書評欄で実藤恵秀早稲田大学教授が「語彙は政治、科学用語から方言、成語、諺、古語におよび（…）読者に親切な編集である」と評した。毎日新聞は記事の中で「この辞典の出版によって、日本は中国に関しては世界の学界に誇りうる金字塔を建てたと言っても過言ではあるまい」と賛辞を呈した。中国語学界では、『三省堂言語大辞典』（一九八九年）中の中国語の項目での「外国人の編んだ二言語対照辞典もかなりの数にのぼるが、主要言語の中から今日の用にたえるものを一種類ずつあげておく」と、日本では愛知大学中日大辞典が「これまで日本語で出たものとも広範な辞典。語彙の選択には首をかしげるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにした辞典にない確かさをもっている。一九八六年に大修館から新版がでた」との橋本萬太郎氏の評に要約されよう。

中日新聞社は一九六八年度の中日文化賞候補五十九件、四十三人を審査の結果、四件に對して第二十一回中日文化賞を贈ることとし、『中日大辞典』編集グループもこれに入り、正賞・副賞・賞状額が贈られた。

辞典編纂処の解散 『中日大辞典』出版を機に鈴木・内山・今泉の編集メンバー各氏は協議した結果、所期の目的を達成したとして編集委員会・華日辞典編纂処を解散することに意見の一致を見、大学当局に申し出てその了承を得た。十数年にわたる苦勞がやっと実を結んだという充実感と解放感にひたっているメンバーにとっては、辞典改訂などといった問題意識は稀薄であり、したがって、この辞典編纂処の解散ということのもつ重大性は当事者によって看過され、後日改訂版編集の際に大問題として浮上することになったのである。

辞典編纂処所蔵図書・各種器材・備品などはそれぞれ学内の関係各部署に引きとられた。十数年間にわたり作成された、三十数万枚にのぼる辞典カード（少数の返還されたカードを整理したものを含む）は学内のどこにも保存する場所がなく、一部分の辞典未収録分カードのみ三氏の個人研究室にとりあえず分散保管して、残りは全て破棄された。

これより以降、『中日大辞典』にかかわる一切の業務は、華日辞典刊行会を改組した中日大辞典刊行会により処理されることとなり、その事務は庶務課所管と定められた。中日大辞典刊行会規約は、

目的 中日大辞典の刊行、日中文化交流への貢献

役員 評議員若干名、評議員は学長、法経学部長、文学部長、教養部長、中国語担当教員および中国関係学科担当教員より選任された者、『中日大辞典』の編纂刊行に貢献した者中より委嘱。監事二名。幹事若干名。

その他 本出版による利益を以って（一）日中文化交流に貢献する学術出版、（二）日本中国間の留学その他を補助する。

ことを骨子とするものである。

中国における辞典座談会 辞典編纂期間中、中国における言語政策の決定や変更など、直接編集上に影響を及ぼす問題を処理するなかで、文字改革委員会・言語研究所などに対して中国側の見解を求め、質問状を出したこともたびたびあり（ほとんど返事は来なかった）、また本学を訪問する中国代表団との接触の折に教示を受けたりしてきたが、辞典の完成を機に何としても訪中して直に『中日大辞典』に対する批評を受けたいとの編集メンバーの思いを、辞典贈呈の際に郭沫若氏に申し伝えてあった。また、辞典印刷中の一九六六年に始まった文化大革命のなかで生まれた新事象を反映する新語については、そのたびにカードの作製をしており、新事象についても実際に見聞きしたい思いがあった。しかし中国における文化大革命の進行を見れば到底この希望がかなえられるはずもなく、訪中の実現はますます遠ざかるばかりであった。

一九七一年（昭和四十六）年九月、細迫朝夫学長は辞典関係者の訪中への熱意をうけ、折から日本中国友好協会代表団員として訪中する穂積七郎前代議士に、増刷されたばかりの

4-3 b

辞典第二刷版に添えて愛知大学学術代表团派遣要望書を託し、郭沫若氏へ届けてもらった。

¹₂

翌七二年一月、学長宛てに中国日本友好協会から手紙が届いた。

細迫朝夫先生

您给郭沫若先生的信，郭先生已经读过并表示感谢。铃木择郎教授等访华事，已托有关部门研究。

新年之际，敬祝身体健康。

中国日本友好协会 一九七二年一月三日

公箋・公印も使用せず、市販の便箋に走り書きしたもので、文化大革命中の緊迫感が伝わってくる手紙であった。しかも内容から見て訪中の可能性はそう高くないと判断された。この間中国をとりまく国際情勢は急変した。前年七月のニクソン米国大統領の訪中予告の発表は、米国に追隨して中国封じ込め政策に忠実であった日本政府に衝撃を与え、さらにこの年二月、米中共同声明の発表に至ると、日本は急遽、九月に田中角栄首相・太平正芳外相が訪中、ここに日中国交正常化が実現し、両国関係は新しい段階に入ったのである。

一九七三年五月、折からの大学紛争の中で就任したばかりの久曾神昇学長宛てに、南開大学から電報が入った。これによると國務院科教組（文化大革命中の教育科学技術に関する主管機関で、従来の教育部にかわるもの）から南開・北京・復旦三大学の教育科学技術に関する主管機関で、従来の教育部にかわるもの）から南開・北京・復旦三大学の教育科学技術に関する代表団受入れの要請があり、南開大学が責任校として世話にあたるという内容の招聘状であった。辞典関係者は朗報に喜び、あわただしく協議した結果、愛知大学学術訪中団として鈴木擇郎教授（団長）・今泉潤太郎助教授（秘書長）・池上貞一教授・中島敏夫助教授の四名を派遣することが、辞典刊行会により決定された。この代表団をもって本学の海外派遣代表団の嚆矢とするが、同時に八〇年代から始まる本学の本格的な国際交流の幕開けを告げる出来事でもあった。

一九七三年六月の『愛大通信』創刊号は、「ついに訪中実現し中国南開大学から招待電報届く、六月上旬に本学学術訪中団出発」として紹介され、同年十一月の同通信第2号は、「本学と中国の『きずな』復活、中国訪問で大きな成果、高く評価された中日大辞典」の見出しでこれを詳しく報じた。それによれば、一行は六月十五日香港着、翌日、香港側の羅湖より歩いて橋を渡り中国側の深圳に入り、出迎の旅行社通訳に案内され広州に着くと南開大学李何林教授らが駅頭に出迎えた。李教授は著名な中国文学者であり、この後、一行が中国を離れるまでの三週間、高齢にもかかわらず常に同行した李教授の誠実な態度に全員が感銘をうけ、国際交流における応待について貴重な示唆をうけた。

天津の南開大学での『中日大辞典』座談会はまる二日間おこなわれた。同大学の関係分野の専門家が事前に整理検討した問題点を歴史学の呉廷璆教授、中国語学の邢公畹教授などが代表して発表する形で進められた。座談会は具体的直接的かつ建設的な討論の場とな

った。『中日大辞典』に対する評価とともに、さらに充実した内容とするための共同作業を通してえたこの貴重な体験が、辞典改訂の起爆剤となったのである。北京大学では時間などの関係(当時の同校固有の事情もあつたようである)から『中日大辞典』に関する座談会は開かれず、言語学の周祖莫教授、文学の林庚教授、日本語学の卡立強教授らと懇談した。上海の復旦大学では日本語学の蘇徳昌助教が中心となり、『中日大辞典』の語釈・用例など具体例を挙げ熱の入ったやりとりの座談会がもたれた。三校の対応ぶりは、のちに本学が中国との交流を始めるにあたり、大きな役割を果たすことになる。

また、辞典カード返還の恩人ともいふべき郭沫若氏を表敬訪問し謝意を述べることも代表団の任務であつたが、幸い人民大会堂「北京庁」で対面し謝辞を述べ機会を与えられた。残念ながら鄭振鐸氏はすでに物故していた。この会見は六月二十四日、人民日報の国際面に「友好深める日本学者」として写真入りで大きく報道された。北京では、現地で新聞記者や商社員として活躍中の本学卒業生数人と会食した。

なお、南開大学では四名が研究報告を求められ、同校の階段教室において多数の教職員・院生を前に講演し、学術交流を行なつた。報告終了後、この席上で、鈴木教授は久曾伸学長より付託された「愛知大学の南開大学に対する学術交流¹⁾」の提案を行なつた。これが十年後に日中の大学間協定の第一号となる、両校の学術教育交流に関する協定として実現するのである。七月六日、三週間に及ぶ訪中を終え、一行は帰校後、記者会見を行い、翌日の中央紙・地方紙で『中日大辞典』と愛大の学術交流について大きく報じられた。

(後略)

註

¹ 『中日大辞典』(初版、愛知大学中日大辞典編集部、一九六八年「編者のことば」による)。

² 「日立上海東亜同文書院大学交接書」(霞山会『東亜同文会史論考』、一九九八年、東亜同文書院(大学)については第一章第一節参照、三二〇頁)によれば同年十一月十三日から十二月十五日までに接収が行なわれた。ただしこの中には辞典カードは見あたらない。

³ 陳福康『鄭振鐸年譜』(一九八八年、三五九頁)に「九月二十日、展出、至办公处、至同文書院接收、经过情形甚好、惟资料室已空、大是可惜」とある。

⁴ 一九九四年九月十五日付、島田政雄氏から中日大辞典編集部所長宛ての書簡「華日辞典原稿カード返還までの経緯御問合せの件について」による。

⁵ 元東亜同文書院中国語教員とは鈴木擇郎・熊野正平・野崎駿平・坂本一郎・内山雅夫の各氏。

⁶ 鈴木擇郎「中日大辞典の思い出」(『滬友』三三二号、一九七二年、三十七頁)。

⁷ 返還されたカード中に「新華辭書社資料卡」と印刷されたカード数枚がまぎれ込んでいた(同社『新華字典』は一九五三年初版発行以来、今日まで版を重ね、億単位の出版部数をもつポケット判の辞書である)。このことは同文書院で作られた辞典原稿カードが利用価値ありとされ、いったんは新華辭書社の管理下におかれていたことを物語る。

⁸ 豊橋校舎道徳館外壁の「愛知大学」の四文字は、これ(原文は縦書き)から採つたも

- の。
- ⁹ 鈴木擇郎・熊野正平・野崎駿平・坂本一郎・内山雅夫各氏の「新中国に形成されつつある新語彙の総合研究」に対するもの。
- ¹⁰ 大山茂「歴史的意義をもつ『中日大辞典』ついに公刊」『大安社史』、一九九八年、一七二頁。
- ¹¹ 小林実弥「中日大辞典の出版」『日中の架け橋―中国事情紹介の四〇年』、一九九五年、五十九頁。
- ¹² 一九七一年九月二十六日朝日新聞名古屋本社版第一面トップに「日中親善へ新風、初の大学交流 愛大が視察団計画 将来は留学生も」の見出しで報道された。
- ¹³ ①南開大学教授の訪日を歓迎する。②双方は教授の留学を援助する。③双方は学生の交流を援助する。④研究資料図書出版物の交流を行なう。(第三章第五節(1)参照)

注 『愛知大学五十年史 通史編』より抜粋。

『中日大辞典』を脱稿 鈴木愛大教授ら

三十四年がかりの労作 改革文字ふくめ十五万語

【豊橋】愛知大学鈴木沢郎教授（六六）らの手で、進められてきた「中日大辞典」が、このほど三十四年ぶりに脱稿、出版の目途もついて、今月末までには一万部の印刷にかかることになった。この辞典は、約二千三百ページ。特色は中共政権後の文字改革でできた漢字の「簡化字」二千三百八十字がほとんどはいる、約十五万語がおさめられており、本格的な現代中国語辞典であることだ。

鈴木教授がこの辞典の編さんを手がけたのは、上海の私立専門学校東亜同文書院（昭和十三年に大学に昇格）時代。ちょうど昭和六年の満州事変の起ったころだった。当時も中日辞典らしいものはあるにはあったが、どれにも不満を感じた鈴木教授が、当時の同僚の神戸外大坂本一郎教授、元東北大教授の故野崎駿平氏らと話し合い、本格的な中日辞典を目ざし、カードの作成にとりかかった。

こうして鈴木教授を中心にした同書院の編集グループで、脱稿寸前までこぎつけたが終戦となり、約十四万枚の資料カードは中国に接収され、鈴木教授らも内地に引揚げて来た。

昭和二十九年五月、中国側の好意と作家郭沫若氏らのとりはからいで、カードはそっくり日本に戻ったが、革命後の新中国では、ことばも大きな変化があり、返ってきたカードは、もうほとんど使いものにならなかった。たとえば「絲」という字をとると、この十年間に二度も字体を変えた。最初は、「階級的」な言葉も生れたりしていた。

そこで旧同文書院時代の教授の多い愛大で、鈴木教授を中心に一から出直して、新しい完全な中日大辞典を編集することになった。鈴木教授を編集委員長に、鈴木教授の同文書院時代からの愛弟子内山雅夫教授（四八）、それに元同文書院講師で現外務省研究所講師歐陽可亮さんの夫人張祿沢女士（四五）の三人を推進者に、およそ十人の手でこの事業がはじめられた。

この十年間の事業には、人件費もふくめ二千余万円かかった。文部省からの助成金もふくめ、そのうち約五百万円が民間など外部からの援助だった。

二十七日、訪中地方自治友好団の一員として中国を訪れる河合豊橋市長も、本間喜一前学長らから「このうれしいニュースを郭沫若氏らお世話になった人たちにぜひ伝えて下さい」と頼まれており、同市長も何よりのおみやげだとその日を楽しみにしている。

鈴木沢郎教授の語

わたしたちは学究で金の心配その他は一切せず、ひたすら原稿の作

4-3 c (1)

成に専念しましたが、大学全体の協力があったればこそここまでこぎつけられたので
す。

吉川幸次郎京大教授の語

戦後も中国語辞典は数多く発行されているが、東亜同文書院
の優秀なスタッフが長年月を費やして編さんしただけに特色ある辞典だと期待して
いる。

〔注〕朝日新聞 昭和四十年四月二二日所載。

世に問う「華日辞典」

来年六月までに出版のメド

十年間の労苦が実る

喜びの愛大、鈴木教授ら

愛知大学華日辞典編さん所（豊橋市町畑町・鈴木沢郎所長）は、このほど華日辞典の出版メドがついたので、近く印刷にかかり来年六月ごろを目標に発刊できるよう準備を進める。これまでには出版資金、発行所などの関係で出版が遅れていたが、ようやく同編さん所十年間の努力が実ると共に、りっぱな業績を世に問うことになった。

同辞典の出版元は同編さん所とし、発行所は東京千代田区神田神保町、株式会社大安に決まった。印刷所はいま東京の図書出版社と契約中であるが、一週間以内には契約完了の見通し。

同所では六月から原稿を印刷会社に送り、さっそく印刷に入り、来年六月には一般に発売されることになっている。初版は一万部で定価は三千五百円を予定している。

辞典はB6版で二千ページ以上表紙はグリーン色のビニールで表装する。収語は現代語から文献にある清時代の古いことば、それに方言など約十三万語にのぼる。これをABCの順序にし、発音は北京語を中心に使っており、注釈文や例文なども多く記されている。

とくに中国の文字改革で「簡化字」（略字）ができたので、辞典にも簡化字を使うことになっているほか、付録に文字年表、中国の歴史、日本語の索引も入れられる。いずれにしても収語の数、簡化字の採用など内容的にこれまでにない立派なもので、これだけの辞典は日本では初めての刊行といわれている。

印刷費用は千六百万円。これは大学から五百万円、日通社長の辞典前納金五百万円、残り六百万円は一般注文の予約金でまかなうことになっている。辞典の出版が遅れていたのはこうした資金のメドがたたないためで、このほどやっとメドがつき、出版のはこびとなったわけである。

同編さんは昭和三十年四月から鈴木沢郎同大教授が中心となり、十年間の歳月をかけている。しかし実際にはそれ以前の昭和六年、鈴木教授が上海の東亜同文書院教授だったころ同僚と辞典づくりを手がけたのが始まりで資料カードが十四万枚できたところで終戦となり、中共側に全部接収された。その後中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて愛大に返還された。しかし中国の文字改革で「ボーイ」ということばが「服務員」と変ったり、簡化字ができたりしてカードは全然役立たなくなっていたので、改めて改訂するという苦労を重ね、このたびの発刊にこぎつけたもの

4-3 c (2)

〔注〕東海日日新聞 昭和四十年四月二日所載。

最新の資料で 13万語

愛大鈴木教授ら 苦心の『中日辞典』出版

【豊橋】豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん(纂 処Ⅱ主任・鈴木枳郎教授Ⅱでこのほど完成した『中日辞典』がいよいよ出版されることになった。今週中に出版元の株式会社大安発売所Ⅱ東京都神田神保町、小林実弥社長Ⅱとの間に正式に調印されしだい、印刷に取りかかり、早ければ来春には出版するという。

この『中日辞典』は収録したことばがアルファベット順に『A』から『Z』まで十三万語で、現在出版されている辞典で七万語のものの二倍以上といわれる。

現在の華日辞典に比べると、一語ずつ語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対語、同意語から参照語までしるされている。とくに中共政権の文字改革によって五回にわたる漢字二千三百八十字の略字化と四回にわたる発音の変化がはいっており、わが国初めての本格的辞典。

出版本は縦十八センチ、横十三センチで二千六、一万部を刷る。印刷元は図書出版社沼津工場の手元。

この辞典編纂は昭和三十年から本格的に始まったが、戦前、鈴木教授が上海の東亜国文書院教授だったころ「知りたいことがでていない」と不満を持ち、神戸外大の坂本一郎教授、元東北大の故野崎駿平教授らとすでに辞典づくりを手がけていた。ところが終戦と同時に資料を中共側に接収された。それが中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて返され、中国語に強い愛知大学で十年の歳月をかけ完成した。

編集には鈴木教授はじめ同大学の中国語担当、その他関係の助教授、講師ら九人で始め、その中には中国人女性の張祿沢講師もいる。中国にも辞典の決定版がまだ作られていない現状だから、参考文献なども少なく、処員らを悩ましたという。

出版の費用千五百万円のうち、同大学で五百万円を負担し、残りは予約注文や本間喜一前学長らが中心になって篤志家から寄付金を集めていくという。

処員の苦勞が実る

鈴木教授の話 やつと出版の見通しがつき、処員の苦勞が実つてうれしい。

本間前学長の話 大口の寄付者との話し合いもほとんどついた。出版したら、中共の好意もあり、約千部は贈りたい。

〔注〕中日新聞 昭和四十年四月二三日所載。

4-3 c (4)

日の目みる “大中国語辞典” 喜びの愛大・鈴木教授ら

十年の努力みのる 日通本社がかげの助力

豊橋市町畑町の愛知大学華日辞典編纂所（鈴木沢郎所長）で十年間にわたって中国語カードをつくってきた努力がやっと実り、このほど二千六、十三万語収録の大中国語辞典の刊行が本決まりとなった。鈴木所長以下、五人の編纂委員の索引カードを整理する手つきも軽い。

この日本一の大辞典を出版するには約三千万円の費用がかかるため、早くから索引カードまでできていたのに長い間、辞典実現の運びとならなかった、だが、ことし三月初め本間喜一前愛大学長が日本通運東京本社の社員教養大学開設に骨折ったことから、同社が二千冊同辞典の予約注文をして、二百五十万円を前金として支払ったことが辞典刊行に明るいきざしを与えた。

この金と大学側の出版費合わせて五百万円で東京・図書出版社に印刷を依頼、今週中に印刷契約をとりかわすところまで来た。同時に発売は東京千代田区神保町の中国書籍専門の「大安」が引き受けることになった。

印刷にかかるのがことし六月ごろで、発刊は来年六月になる見込みという。

昭和八年、同大の前身、上海の東亜同文書院時代に鈴木さんらがこれまでの中国語辞典に不満を感じて中国語カードの編集、整理を始めたのがこの辞典ができる最初のきっかけ。当時のカードのほとんどは戦後中共に没収されたものの、日中友好協会の好意で再び愛大の鈴木さんのところへ帰ってきた。

昭和三十年四月、これらのカードをもとに華日辞典編纂所を開設、きょうまでずっと整理にあたってきた。約三十年越しに実現した辞典というわけ。

それだけに古代中国語や現代中国語の国語文「白話文」もふんだんにのっており、多くの例文が織り込まれている。六十四年八月中共の文字改革によって生まれた「簡化字」二千二百三十八字も新しく活字をつくらせて、収録するなど、完べきな大辞典になるといい、関係者から発刊が期待されている。

鈴木教授の話 長年の苦勞がやっと実って、ホッとしています。一冊二千五百百程度で一万冊出版の予定です。現在日本で出版されている中国語辞典は七万語収録が最高といますから、この大辞典ができれば、これまでの辞典で物足らなかった人にも十分満足してもらえるでしょう。

〔注〕毎日新聞 昭和四十年四月二二日所載。

華日辞典の編纂終わる

華日辞典編纂処による華日辞典の編集が、このほど完成し、出版を待つだけとなった。華日辞典編纂処は鈴木沢郎教授を委員長とし、内山雅夫教授・張祿沢女史など約十名により構成されており、坂本一郎神戸大教授・故野崎駿平元東北大教授らの協力によって完成された。

この事業は本学の前身東亜同文書院の頃から始められ、戦後一時中断されていたのが、昭和二十九年より再び始められたものである。この間中国に文字改革があり漢字の「簡化字」が行なわれた。完成された辞典の中には簡化された文字約二千三百八十字が含まれ語数十五万余が収められ、頁数二千三百という立派な辞書である。このように本格的な中国語の辞典は他に見られないのでこの辞典は各界から注目されている。

なお、この辞典の完成に対して中国からの若干の援助もあり、この辞典を日中友好協会を通じて、約五百部中国へ寄贈される予定である。

〔注〕愛知大学新聞 昭和四十年五月二十日所載。

華日辭典將刊行

愛知大学教授鈴木擇郎編纂的華日大辭典最近已經脫稿附印，將在明年六月完成。

這部華日辭典是鈴木擇郎一九三三年在上海同文書院執教時，便開始搜集資料，進行編纂華日辭典，在日本投降後，這些資料便留在中國。新中國成立後，鈴木擇郎通過日中友好協會的內山完造先生，向中國方面表示願意利用這些資料，繼續進行編纂工作，一九五五年，中國方面以中國人民贈送給日本人民方式，把這批資料贈送給愛知大學。鈴木擇郎教授由一九五五年四月在愛知大學開始了編纂工作，同時由於內山正夫、遠藤透造，宗內鴻和歐陽張祿澤（歐陽可亮的夫人）的協助，編纂工作有了迅速進展。

這部華日辭典已在今年夏天開始附印，一年之內可能印製完了，兩千萬元的印製費用已經辦妥，預計明年六月可以完成。

〔注〕大地報——大陸系華僑新聞——一九六五年一月二日一五頁所載。

『中日大辞典』完成近づく

十三万語を収録 愛大鈴木教授 苦節十年実る

【豊橋】豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん（纂）処Ⅱ主任・鈴木振郎教授Ⅱが十年の歳月をかけて十三万語をそろえた、わが国初の本格的な中国語辞典「中日大辞典」はいよいよ完成に近づき、新年早々から出版元が予約注文を始めることになった。

この中日大辞典は、戦前鈴木教授が上海の東亜同文書院にいたころ神戸外大の坂本一郎教授、元東北大の故野崎駿平教授らと手がけていたもので、終戦と同時に資料を中共側に接収され、中断のかたちになっていた。ところが二十九年暮れ、中共の郭沫若科学院長らの好意で日中友好協会を通じて日本に返され、愛知大学の鈴木教授の手に戻された。

本格的に編集が始まったのは昭和三十年からで、鈴木教授を中心に同大学の中国語担当、その他の関係の助教授、講師ら九人が編集に参加した。中国にもまだ辞典の決定版は完成していないといわれ、参考文献も少ないうえ、中共政権になって数回にわたる漢字略字化と発音の変化があつて処員らは苦労したという。

辞典はアルファベット順にAからZまで十三万語が収録され、一語一語に語源、ニュアンス、用語例、方言、略語、反対語、同意語、参考語などが記されている。

今春、東京都千代田区神田神保町、株式会社大安と出版契約がまとまり、図書印刷株式会社で印刷元になって静岡県原町工場で植字が始まった。現在同編さん処へは校正刷りが工場から順次届き、鈴木教授をはじめ内山雅夫教授ら四人は、大きな拡大鏡を通して目を充血させながら校正に励んでいる。校正は五校まで行われるはずで、二校後は東北大の志村良治助教授ら数人にも依頼して完全なものにする。

予約注文は出版元が年内に内容見本二万枚をつくり、各大学、研究室、図書館などへ送り正月すぎから予約受け付けを始める。

〔注〕朝日新聞 昭和四十年十二月十八日所載。

4-3 c (8)

愛知大学 — 中国への情熱

永井道雄

(前略)

しかし、教育よりも研究の面でとくに注目する必要があるのは、東亜同文書院時代から続けられている華日辞典の編纂である。この事業がはじめられたのは、ちょうど三〇年前、昭和八年のことであるが、一四万枚のカードができたところで、同文書院大学は解散し、カードは昭和二〇年中国側に接収された。ところが、越えて昭和二九年の秋、日中の交渉がしだいに復活してきたとき十四万枚のカードは、ほとんど原型のまま、中国政府から日本人に寄贈された。

しかし、この間には、歴史が変わっただけでなく、文字も、言葉の意味もいちじるしく変化している。大学は昭和三〇年から、ふたたび編纂事業にとりかかり、昭和八年以来、この仕事にたずさわってきた鈴木沢郎教授を中心に、根気よく努力をつづけ、ようやく三八年中に完結した。

戦火の時期をさきで三〇年、この大事業が進行したことは何を物語るのか。中国語について素人であるわたしに判断はむずかしいが、日中間にあれほど深い関係がありながら、これまでの辞典は比較的初歩的なものにとどまり、包括的な基本的辞典が、ようやく、この段階にできあがるという事実には深い問題がふくまれているように感じられる。

それにしても、最近、東京外大教授・鐘ヶ江信光氏の『華日辞典』が刊行され、また東大名誉教授・倉石武四郎氏の辞典の刊行も予定されている。こうした最近の中国研究者のエネルギーにこんな一つの方向がひそんでいるようにも思われる。

(後略)

〔注〕「朝日ジャーナル 大学の庭」一九六三年五月十二日号所載。永井道雄「愛知大学・中国への情熱」より抜粋。

華日辞典刊行のことについて

愛知大学鈴木沢郎教授（十五期）説明

予て上海同文書院において昭和八年頃から辞書作成のため資料作成中のところ終戦に際し、中国政府に接収されてしまいました。これを返却して欲しい旨中国政府に申請していたところ、昭和三十年に日本人民に寄贈するという形で返つて来た。これを三十年四月頃から愛知大学において継続編纂することになり、鈴木沢郎（十五期）内山正夫（三十五期）遠藤秀造（十九期）宗内鴻（十五期）張先生（歐陽可亮先生の夫人）等の諸氏の努力により刊行の段階まで至った次第である。刊行には莫大な資金を要しますが、偶々よいスポンサーが出て来まして刊行費の三分の一を寄付して下さることに成り、印刷には約一年を要しますが、明年六月頃までには出来あがる予定となっております。同華日辞書の特徴としては、収録語数が約十三万語で普通の従来辞書の五万余語の倍以上であり、新中の語句は勿論、古代文を読むための語句も採り入れています。

右のような説明があり、発売の際は協力してほしい旨の挨拶あり。以上で総会々場における諸事項を終り、懇親会場に席を遷して、懇親会食す。

〔注〕「滬友」十九号（一九六六年十一月）所載。

「中日大辞典」について

十六期 大 矢 信 彦

「滬友」第二十四号所載、石川会長の巻頭言「侵略的語学」を読んで、僕も若干の感あるを免れないが、しかし僕はかかる議論に反発したり、かかずらう興味を持ち合わせない。僕も同文書院に入学して以来、永年の支那生活の結果、支那語、支那文は僕の中から沁み入って、今さら忘れ去り、洗い落とすことはできない間柄で、それをとやかく言われたって、何とも致し方ないことである。ただ僕は喋る支那語にはいかにも弱く、いろいろ欠点を持つていることもよく承知している。かかる弱点、欠点を指摘して「だから同文書院の支那語はつまらぬ」と言われたら、僕としてはまことに一言もなく、母校および師兄に對してまことに申訳なく、只管恐縮せざるを得ない。しかし一方では、我等の同学諸君によつて「中日大辞典」が完成されたことによつて「同文書院の支那語だつてバカにしたものでないぞ」と氣を吐いているように思えて、意を強くさせてくれているのである。

今年春間、僕神田へ行つたついでに、神保町の「大安」に寄つてみた。僕は先年この「大安」が複製した中国共産党初期の機関紙「嚮導」の合本五冊を買つたことがあるので、又何か目ぼしきものがなと思いつつ立ち寄つたところ、忽ち愛知大学編纂の「中日大辞典」なるものが目についた。開巻劈頭「編者のことば」を鈴木沢郎氏（十五期）が書いているので、有無を言わず、真ちに一本を購うて帰つた。

僕は同文書院へ入学するときに買った「岡本…支那声音字彙」以外に、支那語の字書というものは持ち合わせなかつた。書院時代に、当時日本で出版された何とかいう支那語の字書を見たことがあるがつまらぬものだと思つた。僕は支那語にはまことに弱い、読み書きにはさまで不自由しないまま、支那語の字書には比較的関心が薄く、「商務院書館…辞源」一本槍で押し通して来た。しかし「辞源」は口語、俗語にはテンデ役立たぬので、僕も時に内心然るべき支那語の字書がないものかと思わぬでもなかつた。戦時中、上海で国語辞典が出版されていると聞いたが、当時北京、天津には上海の書物があまり来ぬようになつていたので、買わずじまいだった。

ところが戦後大分以前のことだが、同文書院の支那語の教師諸君が支那語字書編纂のため作つておいた膨大な資料カードが中共当局の好意によつて日本に返還され、それを基礎に愛知大学で旧同人諸君が支那語字書を編纂することになつたと新聞で知つて、窃かにその完成を心待ちしていたのだつた。

さてその「中日大辞典」を僕如きが兎や角あげつらうのは烏語がましい沙汰だが、一本を買つて家に持ち帰るや、早速薄暮の縁側で繰り展げてべつ見したところ、その編纂ぶり

のただ事にあらざることを感得して驚嘆を禁じ得なかった。先づその精細、緻密、懇篤、鄭重なことに驚いた。久しく会わぬが、鈴木氏の人柄が彷彿躍如として浮んで来る思いがした。僕はまだこの「中日大辞典」をあまり使っていないから「中日大辞典」の真価のほどを具体的に紹介することはできないが、この「大辞典」があれば何かのときにも困らぬだろうと、安心感を与えてくれている。

* * * * *

この「中日大辞典」を繰っていきよつと違和感を持たされるのは、中共式漢字略字と中共式ローマ字標音である。僕はむかし国共分裂後の中共のガリ版文書を読んでいたことがあるから、略字には頗る慣れてる。当時共産党が使っていた漢字略字と今の中共の略字とは必ずしも同一でないし、今は数も多くなっているが、略字のモテ方の幾つかをかめば、大よその見当をつけて不自由なく読める。読めぬような略字だったら、略字の意味はない。なおこの「大辞典」は略字のみではなく、繁体というか、本字でも引けるから、旧弊人にも使用できる。

漢字略字よりも、僕にとつて苦手は漢字の中共式ローマ字標音である。永年トマス・ウエード式で育つて来た僕にとつてあれは困る。なるほど所謂有気、無気と云うか、清濁音の区別をつけたら、その他より正確な標音ができる長所はあるが、老碌この歳になつては、せいぜい当て推量で読むことが精一杯で、あれを完全に覚えろと云われても、もうその気力もなければ脳力もない。そのためこの「大辞典」をローマ字で引くときは、相当面倒を感じることが少くない。そう云う点でも僕の如きは甚だ時代遅れだし、支那語の字書をさまで必要とせぬ僕にこの「中日大辞典」を批評する資格がないことは前にも述べたとおりだが、その僕でもこれは「大した字引きだ」と断言し、推奨して憚らぬ自信があることを申し添えて置く。

* * * * *

尚余談に亘るが、今から七、八年も前のこと―当時東大の教授で、国語審議会委員倉石武四郎氏の中共からの帰來談があるからと日比谷の新聞協会から案内を受けて、聞きに行つたことがある。彼は国語審議会で漢字制限と略字作りの首謀者と聞いていたが、その時の話では、中共では略字とローマ字標記が盛行していて、ローマ字標記で漢字の音を全国的に統一したのみならず、漢字の代りにローマ字が相当広汎に行われているとのことで、それにつけても、日本でも漢字をもつと制限し、略字に置き換えたり、ローマ字或は仮名文字をもつと使うようにしたらといった論旨だったように記憶する。老頭兄の僕には、今更そんな改革には興味なく、ただ、中共のローマ字とはどんなものかについて知りたいと思つたが、具体的な説明はなかつた。僕は「漢字の代りにローマ字を用いるようになれば『音』は全国的に統一されようが、『声』はどうして現わすのか」と質問した。すると氏は「支那人は『声』は自然に体得しているから特に声を表明しなくとも良い」という返事だつた。僕は「そんなバカなことが」とその返答には納得いかず、今日に至つていたが、こんど「中日大辞典」を見るに及んで、中共式ローマ字標音には「声」を現わす記号がち

4-3 c (10)

やんとついているのを知って納得した。

* * * * *

「むかし僕が上海で鈴木辰郎氏のところへ厄介になつていたとき、彼のところへ「嚮導」が来ていたのを、僕も読んだことがあつた。僕は北へ移つたので一時杜絶えたが、その後バックナムバーから揃えて、「嚮導」を翻訳することが永年続いた。日本へ引揚げてからは「嚮導」が手許にないので、何とか手に入らぬものかと思つていたところ、先年その原本と寸分違わぬ複写本が「大安」によつて刊行されたのを知つて、早速買ひ求めた。そしてこんどはその大安が「中日大辞典」を発行したのである。鈴木氏―嚮導―中日大辞典―大安と並べて来ると、僕は一種の因縁を感じさせられる。

* * * * *

過日僕は同期生の会合においてこの「中日大辞典」について一言推奨の語を述べたところ、誰かの話ではこの「中日大辞典」編纂をめぐつて、滬友同窓会と愛知大学との間に何かいざこざがあつて、未だその解決を聞いていないとのことだつた。僕は左様なことは頓と知らず、今更に驚き入つた次第だが、もし果して何かいざこざがあつたのなら、その真相を「滬友」誌上でも明かしてもらいたい。或は既に何事か発表されているが、それを僕が読んでおらずに知らぬのかも知れないが……

しかし何事があつたにせよ、この「中日大辞典」が完成出版されたのは慶賀すべきことだ。そしてこの「中日大辞典」編纂に献身された同人諸君の努力と労苦に感謝し、その功績を讃えようではないか。

* * * * *

現今世間では日通事件に驚き、福島前日通社長に非難の声を浴びせているが、「中日大辞典」編者のことばによると、福島社長は昨年四月、多数予約して、この辞典の出版を助けてくれたのである。日通社長と「中日大辞典」とは奇妙且つ意外な取り合わせのようだが、その経緯の仔細を知らぬ僕がとやかく申すことはない。しかのみならず、編者のことばを読んで知らなかつたとは申せ、僕はその困難な出版に対して何等助力しなかつたことに忸怩たるものがある。この「中日大辞典」は今後僕の案頭にあつて、恐らく僕の終生の伴侶の一つとなるであろうが、僕のこの慚愧の念と同時に、福島という日通社長がこの出版を助けたことが永く僕の記憶に残るであろう。

〔注〕滬友 二五号（一九六九年二月）所載。

『中日大辞典』の編纂と刊行

昭和四十三年二月、愛知大学から刊行された『中日大辞典』は日中両国の学者、研究者に多大な感銘を与えた大著作である。その基盤となった原稿カードは書院の中国語関係教授（鈴木・熊野・野崎・坂本・影山・岩尾・内山・木田・金丸・尾坂各教授・講師・助手のほか中国人講師八名）が多年にわたり集積整理したもので粗資料カード十四万枚、語数八万語に及んだ。戦後奇しき運命を経て、この原稿が日本側へ無事返還されたのを契機に、発刊にまで漕ぎつけたものである。この間の事情について編纂委員長となった鈴木沢郎教授は、その遺稿の中で次のように述懐している。

「私の学生時代、中国語学習でお世話になった書物は、『華語茶編初集』、『官話指南』、『談論新編』などの教科書と岡本正文氏の『支那声音字彙』以外には何もなかった。ジャイルスの『中国語辞書』の話は聞いていたが、われわれの目には触れなかった。

その後、母校に奉職した私は大胆にも中国語辞典の編纂を提議して同僚諸君と書院当局の賛成をえ、「支那研究部」の事業として辞典の編纂にとりかかったのが、昭和八年のことであった。

敗戦となり、同文書院大学のすべての財産が中国政府側に没収され、中国辞典カードも同じ運命になったが、この原稿カードを接收委員鄭振鐸氏（著名な中国文学者）に引きわたすとき「将来もし事情が許すようになったら、われわれに辞典を完成させてもらいたい」旨を要望しておいた。

戦後約十年、愛知大学学長本間喜一氏（元書院大学長）の熱心な奨めがあり、同氏名義で日中友好協会理事長内山完造氏に依頼し、中国科学院院長郭沫若氏を通じて中華人民共和国政府へ原稿カードの返還を願い出た。書院諸教授によって集められたカードは幸いにして完全に保管されており、「中日文化交流のため改めて日本人民に贈与する」との主旨で日中友好協会をおして返還されてきた。

さて、この編纂事業は、どれだけの人員で何年かかるか、編纂費や印刷費はどれほどかかるのか、まるで見当もつかなかった。また大陸では文字改革が行われるなど、辞典の完成期は推定すらも困難になった。

愛知大学は創立後日なお浅く、苦しい大学財政から編纂費や専従者の人件費などを捻出することはまことに大変なことであったが、こうした苦境を救ってくれたのは朝日新聞・毎日新聞・中日新聞・地元の実業家石原氏など各方面からの支持・応援であった。編纂業務の進行には前述のような中国の変革があり、それを知る資料の入手に困難があり、問題解決に時間を要することが多く、簡化漢字の母型二千余の制作も必要になるなど、ついに十三年間を要して脱稿にこぎつけた。

さて印刷に回す段になると、中国文に慣れた印刷所は少なく、中国語の簡化漢字を活字にするにも多くの困難があり、旧繁体字、異体字、標音、声調符号など、大変な面倒

4-3 c (11)

があった」（鈴木沢郎遺稿より）。

しかし出版社大安（現在、療原書店・社長小林実弥（1915））の献身的な協力で、昭和四十二年（一九六七）ようやく出版することができた。五十六年六月現在、この大辞典は第七刷を出し、通計六万部に及んでいる。

〔注〕『東亜同文書院大学史』（一九八二年五月 滬友会編）所載。

(前略)

主要得意先—全国各大学と愛知大学

なかでも一際目立った存在は愛知大学であろう。戦時中いわゆる外地にあった上海の東亜同文書院大学・京城帝国大学・台北帝国大学・満州建国大学などは、敗戦の結果として当然維持することができなくなった。終戦時に同文書院の学長であった本間喜一氏の唱導で豊橋市に創設され、上記各大学の教師・学生を優先的に吸収することとなったのである。当然のことながら東亜同文書院時代在任中の教職員と在学中の学生が多数を占めている。そのキャンパスで他大学では見られない独特の存在は、ほかならぬ中日大辞典編纂処である。鈴木教授とほぼ同じ時代に同文書院を卒業し、戦後日本国内各大学の教授を歴任した人々の中には、熊野正平（一橋大学）・野崎駿平（東北大学）・小竹文夫（東京教育大学）・坂本一郎（神戸外国語大学）各氏など、新しい日中関係の中で学術・文化交流の架け橋として特異な存在であったことは、大安の事業発展に大きな励ましともなった。

(中略)

歴史的意義をもつ『中日大辞典』ついに刊行

この年なんと言っても最大の出版は、当社出版史上内外に注目された愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』である。当社があえて微力を省みることなく、刊行を引き受けたことについては、重視すべき歴史的経緯があった。

一九四五年八月十五日の敗戦によって、当時上海市徐家匯にあった東亜同文書院大学も廃校の憂目を見ることとなった。同大学は当初日中両国の民間経済・文化社会交流の人材を養成する専門学校として、東亜同文会（近衛篤麿会長）の理念に基づく大事業として発足し、敗戦当時四十五年の歴史を有していた。しかし一方歴史的事情により上海では最高学府とされた交通大学のキャンパスを占有していたことから、上海市政府より直ちに返還するよう要求されたのも当然であった。校舎・関連諸施設すべて接収の際、所蔵図書・文献類も貴重な文化財として、接収委員の一員である鄭振鐸氏（作家・文学史家・蔵書家として内外に有名）立ち会いの上、目録と照合して直接引き渡された。その際大華語部諸教授が永年努力作製した歴大な華語辞典カードもすべて没収されたのである。

しかし間もなく曙光が見えてきた。日中友好協会の成立（一九五〇年）とともにその理事長に就任した内山完造氏（魯迅と親交のあった内山書店社長）を通して、「改めて日本人に贈る」とこの歴大な辞典カードが中国から日本に返還され、愛知大学に帰属することとなったのである。

4-3 c (12)

愛知大学は一九四六年十一月十五日、豊橋市に創立された。東亜同文書院大学の学長であった本間喜一氏が中心となり、敗戦当時外地の教職員・在学生をできるだけ吸収することを念頭に誕生した。戦後各地の大学に分散していた旧東亜同文書院大学華語部の教師達、鈴木擇郎（愛知大学）・熊野正平（一橋大学）・野崎駿平（東北大学）・坂本一郎（神戸大学）各教授（何れも東亜同文書院卒）が協議の末、愛知大学に中日大辞典編纂処を新設し、これを根拠として一時頓挫せざるを得なかった作業を継続することになった。本間新学長の陣頭指揮で編纂体制はようやく確立したものの、これを支える隘路は資金面にあった。朝日・毎日・NHKなどマスコミ関係や対中貿易商社などの資金援助を得ながら、一九五六年に鈴木教授から初めて出版刊行に関する依頼を受けた。そこで当社としては戦後日中両国の友好関係を回復し、そのための架け橋となることを改めて決意し、この大事業を快く引き受けた次第である。紆余曲折を経ながら再三出版予定も延期せざるを得ず、ようやく一九六八年一月末に刊行されたが、それだけに需要者の期待も大きかった。その内容は簡体字・異体字・繁体字を含む一万一九五字を収録、漢語拼音字母（新ローマ字）による字音のアルファベット順に排列した十三万余の語彙は、まさに最新・最大・最高の内容を誇るものとなった。その一部（二〇〇冊）は中日友好協会を経て中国の教育・研究機関にも贈呈された。

（後略）

〔注〕「大安社史」（一九九八年五月）所載。

中日大辞典の出版

本間―中日大辞典の時にはお世話になった。あれを出す時郭沫若さんに手紙を出して、カードを返してくれと言ったら、返してきたんだ。それで中日文化協会（日中友好協会の誤り）でも、誰に頼んでこの仕事をやるうか、ということになったが誰も引きうけ手がなく、愛大としてはこちらへ返してくれと言った手前もある。これは随分と金のかかる仕事だった。調査費も毎年二〇〇万かかる、文部省から一〇〇万、朝日新聞やその他から金をもらった。新しい活字なんかのこともあった。いよいよ出そうという段階で、平凡社のオヤジが調査費まで出せないが、出版の時には相談に来いと言っておつたので、平凡社へ出かけてみたところ、平凡社のオヤジは死んでいる。昔こうこうだつた話をしたところ、今中国語をやる学生はどれくらい居るだろうと、こんなことを言い出した。売れないものは引きうけないといった頭だから、とてもだめだった。それから安部能成氏の紹介で岩波書店へも行った。岩波も小さい薄い中国語の辞書を出していたので、別の大型辞典を出すことに難色を示した。それでは自己出版しなくてはならんとなり（公）「療原書店」をやっている小林実弥君（42）期が来てくれた。

それで毎日新聞の田中さんの所へも行き、出版費千部分を引きうけてもらった。その他に朝日が千部、中日、日通などが千部、特に毎日是中国へ千部寄付してもらったので、二重に有意義になった。それで一千万近くの金が集まった、学校でも自費出版となると予算会議で問題があった、鈴木君なんか一生懸命やつてるのだが、毎年それに予算をくうし、十年かけても出来るかどうかからんと言うもんだから予算会議の空気は必ずしも良いとは言えなかった。

大学としては八〇〇万円しかとれないよということになった。これ以上は出せんよということにした。いや八〇〇万はお返しするということだった。出版は大変だ、新しい活字を使わねばならぬので、大日本印刷ではイヤだと言う。小林君が印刷会社と交渉してうまくやってくれたので大助かりだったヨ。印刷も順調にいき、去年は七〇〇〇部刷った。この売上金は別会計にして印刷費を払い、のれば日中文化交流に全部使うことに決定している。カードを返してもらう時にも中国の郭沫若さんに対し、文化交流のために使うから返して欲しいと言ってある。従って、売上金は別会計にしてあり、去年はこの売上金を使って学生を中国旅行に出している。今回は売上剰余金でもって、中国地誌のうち欠本になっているもの、中国にはなくて日本にあるものを復刊して、それを寄附しようかという案も出ている。

稲川―この前の三十周年のお祝いの時、私学連盟の会長が開口一番、愛大は中日大辞典という立派なものを出しておられると挨拶していたですね！。

〔注〕 滙友四一号（一九七八年一月）所載、「書院廃校・愛大創立当時の回想」の本間先生の談話。稲川は滙友会副会長稲川三郎氏。愛大創立三十周年記念式典に出席し祝辞を述べると共に、鈴木擇郎教授を通じて滙友会と愛大との関係改善を図った結果、一九七六年五月霞山ビルに於いて滙友会側田中香会長以下役員と本間先生との話し合いが実現した。

書評

十三万語の中国語辞典

愛知大学編『中日大辞典』

日本で、北京語を中心とする中国語を研究・教育しだしたのは、明治九年からである。明治時代の中国語教育は、まる暗記式であったためか、辞書らしい辞書が出るようになったのは大正からである。よく使われたものをあげると、(A) 石山福治『支那語大辞彙』(一九一四)(B) 井上翠『井上支那語辞典』(一九二八)(C) 宮島吉敏・矢野藤助『ボケツト中国語辞典』(一九四五)(D) 旺文社『華日大辞典』(一九五〇)(E) 鐘ヶ江信光『中国語辞典』(一九六〇)(F) 香坂順一・太田辰夫『現代中国語辞典』(一九六三)(G) 倉石武四郎『岩波中国語辞典』(一九六三)などである。それにこんど愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』が出た。『中日大辞典』は上海の東亜同文書院で一九三三年に全学の教授によつてはじめられ、敗戦のさい、十四万枚のカード(七く八万語)は敵産として接収された。

教奇ないきざう

一九五三年、愛知大学学長(元東亜同文書院大学学長)本間喜一氏は、辞典の完成をねがひ、中国科学院長郭沫若氏にカードの返還を願ひ出たところ、郭氏のあつせんで、五年、引揚船興安丸に託して、おくりとどけられた。

愛知大学では、さいしょから編集委員であつた鈴木沢郎氏を中心に一〇人にちかい委員をつくり、一九六一年を完成目標として編集をつづけてきたが、中国の文字改革の進展につれて、簡体字(略字)の制定、拼音 *Pinyin* という中国公定のローマ字の出現、それに日本・中国の中国語研究の発展などにつれ、これらを全面的にとりいれるため、大きく手をおしをする必要にせまられた。それがため、六一年完成の予定が、とうとう本年二月まで延びのびになった。かねて予告を知つていた読者からいへば「千呼万喚はじめて出て来れり!」というところであろう。

中国語辞典の編成は二種類にわけられる。ひとつは発音によるもの(いまのところはGだけ)。もうひとつは、漢字の親字をひき、その字をかしらにもつ語彙をひくようにしたので、『中日大辞典』は後者である。

漢字の親字は簡体字(げんざい常用)、繁体字(もとの複雑な字)、異体字(いまは使用されなくなつた字)をならべてあるから、その数一万一千余字もある。異体字までいれてあるのはほかにないから、文献をよむためには、たいへん重宝である。語彙は政治・科学用語から、方言・成語・諺・古語におよび、十三万余があつめられている。

ほかの辞典には収録語数がかいてない(どの辞典でも、それを正確に記すべきだとおも

4-3 d (I)

う)ので、一〇〇ページ、二〇〇ページ……の語数の平均を出し、ページ数にかけてみた。すると(E)はおよそ六万余語、(G)はおよそ五万余語と出た。(D)は大辞典とあるけれども、およそ八万未満である。「三宝」だの「三鞭酒」(シヤンベン)のように「三」のついた語彙が、どのくらいあるかとおもい、各辞典をしらべてみると、(A)は七一語、(B)は九五語、(C)は二三語、(D)は二〇二語、(E)は三三語、(F)は九三語、(G)は五六語、そして『中日大辞典』は四八〇語である。げんざいのところ、最も多くあつめられている。

読者に親切的な編集

どうしてこんなに格段の差があるかといえは、「三大紀律」だの「三査」(思想・工作・指導をしらべる)だの「三結合」(幹部と労働者と大衆との結合)といったような政治用語が、新中国では次々に出てくる。この辞典は、それらを念入りにあつめているからである。このような語彙は、あまりに多くて、専門家でもつい内容を忘れがちであるから、これは誰にもよろこばれよう。なお、今後も中国ではたえずこのような新語が出るにちがいないから、年に一度ぐらい、この辞典の補遺のパンフレットを発行してもらいたいとおもう。わたしは、読者(使用者)として希望する、つぎのことが、この辞典では、どうなっているかに興味をもっていた。

(一) 中国語では、一枚の紙を「一張紙」といい、一つの爆弾を「一枚」(または「一顆」、炸弾)というように、数につけた量詞(助数詞)が日本とちがうのが多い。だから、名詞には、その語につく量詞を示してもらいたい、というのが、わたしのねがいであった。これまでの辞書には、そうした親切がなかつたが、この辞書で、はじめてそれがおこなわれている。そのうえ、二百余種の主要量詞を付録してあつて、便利である。

(二) 語学の習得には、反対語を、いっしょにおぼえると便利だ。これも辞書にかいてあるとよい。この辞書はそれを示していると、凡例でうたつてある。なるほど、多と少、好(よい)と壞(わるい)、進と退などはある。ところが、出と進(はいる)、上と下、左と右、新と旧などは、でていない。わかっているだろう、というのかもしれないが、発音も日本とはちがうのだし、書いておいてもらいたかつた。

斯大林(スターリン)、赫魯曉夫(フルシチョフ)があるからには、コスイギン、ジョンソン、ホー・チ・ミンなどもほしかつた。中国の新聞には、毎日のようにでるのだから。辞書は買ったなら一生つかいたい。だから、堅牢で美しいことが望ましい。本書は、両方の条件をそなえている。とくに隷書の題字がうつくしい。(B6判 本文一九四七ページ 三五〇〇円 大安)

《早大教授・さねとう けいしゅう》

〔注〕朝日ジャーナル一九六八年三月十七日所載。

書評

「中日大辞典」の完成

愛知大学で努力をつづけていた「中日大辞典」(発売は株式会社・大安から、三、五〇〇円)が完成した。昭和六年に上海東亜同文書院で企画がたてられてから三十七年ぶりである。

この辞典の資料カードは、終戦の時にすでに十四万枚に達していた。しかし、敗戦の結果、そのカードは中国側に接収されてしまった。その後、中国科学院長・郭沫若氏のはからいで全部のカードが返還され、昭和三十年四月から編さん業務が再開された。

ところが、中国自体の変化や文字改革、それに日本の当用漢字、新カナなどの関係で、原稿の書直しも非常に多く、さらに最近の文化大革命による新語の続出もあって、編集、印刷には大変な苦勞がつづけられ、校正も五校でなお赤字がはいるほどだったという。

こうして出来上がった中日大辞典は、B6、本文一九四七^{ページ}、検字表八五^{ページ}、日本語による索引六八^{ページ}、その他付録など合計二二四四^{ページ}の大冊になった。親字は簡化字二二三八^{文字}を含めて七八七^{文字}、ほかに繁体字・異体字三三二七^{文字}をも併載してある。語数は約十二万語で、従来日本にある中国語辞典の二倍であり、とくに日本語による一万七千語の索引がついていることは、日中辞典を兼ねたものとして、利用価値が非常に大きい。

この辞典の出版によって、日本は中国語に関しては、世界の学界に誇りうる金字塔を建てた、といっても過言ではあるまい。

〔注〕 毎日新聞 一九六八年三月三日「出版展望」所載。

《中日大辞典》の刊行を祝して

太田辰夫

語彙 13 万、B6 版 2100 頁に蠅頭の文字でぎっしり詰まった、本格的な中国語辞典が、ようやく発刊された。これだけの辞典は、わが国で最初のものであるばかりでなく、世界でも最初のものであるといっても、決していいすぎではない。おめでたい。なんとしても、おめでたい。それにしても東亜同文書院時代から今日にいたるまで、30 余年におよぶ関係者一同のご苦労は、筆舌につくせぬものがあったであろうと、推察される。

この辞典をめぐる話題が新聞紙上などにあらわれたのは、もう十数年もまえのことであった。それゆえ、いやしくも中国語に関心をもつものはだれでも、それこそ、首を長くして、本書の出版を期待していたであろう。編集に関係あるかたの謙虚な言葉は別として、一般は、ジャーナリズムが書きたてるから、どえらい辞典が出るそうだ、これで中国語も楽に読めるようになるだろう、という漠然とした期待をもったのではあるまいか。わたくし自身の関心は、尋常一様のもではなかった。むろん編さんの過程で、カードや原稿などを見たわけではないから、内容についての推測は漠然たらざるを得なかったけれども、わたくしの関心の持ちようは、一般の人々とは異なった、おそらくわたくし独特のものであったといえるであろう。

昭和初期でやや信用のできる中国語辞典といえば井上翠のものぐらいで、石山福治の大辞典もあったが、いたずらにぼう大なだけであまり役には立たなかった。そのころ、わたくしは北京語を深く学ぶことを志していたがこれらの辞典では解決できない語が多いのに驚き、いくつかの本を中国人に読んでもらうこととした。その中の一つが同文書院の教科書《華語萃編》四巻である。この教科書を日本人向きとしては程度が高すぎるようであるが、わたくしはその中から、辞典に収められていない語を多数、学ぶことができた。なお同文書院では《華語月刊》という学習雑誌を発行し 119 号（昭和 18 年 11 月）まで続いたがこれには北京人教師の書いた流麗な文章が多くのもせられており、その注釈とともに、北京語学習の好い参考となった。わたくしはこれを講読して、多くの語彙を集めることができた。当時、国内にもこのような雑誌があったが取るに足りなかった。また大連には中谷鹿二の《善鄰》という雑誌があったが、これには《華語月刊》からの無断借用が目立った。辞典未収の北京語を記したわたくしのノートは、《華語萃編》と《華語月刊》によって大幅に充実した。

終戦前にこのような方法で語彙を収集していたわたくしが、終戦後、十年近くたって、あの「日華辞典の原稿返る」という記事を見たときから、今年 2 月にいよいよ発刊となるまで、どれほどの期待と関心を、この辞典に持ちつづけていたかは、ご想像にまかせよう。わたしの関心は次の二点に要約できた。その一は、北京語をどの程度まで記録し得た

かということ、その二は、北京語以外のものについてはどうであろうか、ということである。

第一の点、すなわち北京語語彙はきわめて豊富に収められており、解釈は詳しく用例も多くあげられ、従来の辞典はとうてい打ちできない。もっとも北京語とはいっても、ここでは現代（主として民国時代）のものを指す。民国期の北京語の記録としては、この辞典は完璧に近い。これは、この辞典の原カードが、解放前に、多くの北京人の協力によって作られたという事実によって、決定づけられているようである。しかしながら、逆にわたくしのノートと対照すると、なお漏れたものが少なくない。試みにノート「小」のところを対照してみると、この辞典未収の語に「小兵」「小根儿」「小櫃儿」「小歡龍儿」「小可憐儿」「小礼帽」「小麻雀」「小毛羔」「小毛驢」「小廟子鬼」「小屏儿」「小取」「小燒」「小攤儿」「小鷹爪」がある、これらの語の多くは《華語月刊》の語積に見え、一部は《華語萃編》にもある。もちろん、これらが収められていなければならないというものではなく、「掛万漏一」なのであって、このためにこの辞典の価値が1ミリも低くなるわけではない。次に見化がノートに合致しないものが若干ある。例えば、この辞典では「小叶茶」とあるがこれは「小叶儿茶」がよいのではあるまいか。そして反対語としての「大叶子茶」の注記が落ちている。もっとも茶をこのようにいうのは北京語ではないと教えてくれた北京人もあった。次に解釈が不十分あるいは不適当な疑いのあるものとして「小綢子」「小鋪儿」「小市儿」などがある。「小綢子」はこの辞典では“ごく薄い粗末な絹織物”とあるのは奇異に感じた。この「小」とは「小幅」のことだと、わたくしは中国人から教わった。そしてその反対語として「大緞子」をあげられ、これは広幅で2尺2寸ぐらいあると説明してくれた。「小鋪儿」「小市儿」もこの辞典の訳は字面をなでただけで、もうひとつ適当ではない。しかしこのようなことはこの辞典では例外なのであって、大部分については、まことに適切な、あるいは親切にいいいな、場合によっては煩雑ともいえそうな、解釈が付されている。要するに、中国語の辞典は従来も北京語が中心であったが本書はこの点にいつそう重点をおいたものと考えられる。

次に第二の点、すなわち北京語以外について簡単に考えてみたい。中国語の辞典は、文言語彙には重点をおかないのが通例であり、他に漢和字典の類が、併行して用いられている。本書の方針は明示されていないが、文言中の比較的浅近なもの、すなわち現代文にも時として用いられるようなものに限定しているのではあるまいか。次に古白話も漢和辞典には収めないで、中国語の大辞典には必要である。本書では、この一斑を収めるにとどめ、語数は多くない。いま試みに「阿」の項をみると、古白話とはいいながらまた方言でも用いるものが多く、純然たる古白話は「阿屠」と「阿者」だけである。ところでこの「阿屠」は「阿堵」の誤で、文字ばかりでなく発音までも誤っている。「阿者」は《拜月亭》を引用して“発語の詞”とするが、最も手近かなところでは朱居易の《元劇俗語方言例積》でも調べればこのような誤は犯さなかつたはずである。「阿者」は女真語で“母親”の意、《元人雜劇全集》とか《関漢卿戯曲選》とか、とにかく《拜月亭》を収めているものには

たいいて注記がある。満州語にもあり、北京の同様などには「阿家」「阿姐」などと当て字を用いた例がある。古白話は専門辞書に譲る（《大安》本年 2 月号、《中日大辞典》出版にあたって）と声明されていることだし、詳しくは論じないが、疑問に思うことが少くない。方言については、普通話化しつつあるもの及び文章に見えるものを採るという原則は、妥当である。《漢語方言詞彙》を中心としたらしいが、この方針も承認されよう。ところが北京語と字面を同じくするものについていえば、案外、見過ごしてしまったものが多い。例えば「人」は長江流域などでは“からだ”“からだのぐあい”という意味に用い、巴金などのものにも見える。趙元任の《鍾祥方言記》などに記録されている。「隨便」というのは「無論」「不管」の意で、「隨便什麼時候…」などというの、普通話化しつつあるといってもよいのではないか。すくなくとも文章には常用する。このような常用語が収められていない。「説話」に“はなし”という意味があることはこの辞典にもあるが、《国語辞典》そのまま《朱子全書》を引く。しかし「説話」を“はなし”“ことば”の意味に使うのは巴金にも見えるし、江成の《北方話江南話語辭辨異》にも指摘がある。「肚皮」に“腹”とあるのはよいが、これを転用とするのは不適當かと思われる。転用とは「肺肝」を“真情”に用いるようなものに限定すべきで、“腹”の場合は方言と注するが正しい。

人名は若干、収められている。試みに二三を引いてみると、毛沢東・劉少奇はともに収められ、孫文・魯迅は無視されてしまった。「岳墳」「岳廟」はありながら岳飛の説明はない。この辞典の特色として、小説などの登場人物をいくらか収めたことである。これは、歇後語などを理解するのに必要なためらしいが、充実する必要がある。武松とか魯智深とか林黛玉とかいうのは、歴史上の人物以上に人民の脳裏に焼きつけられている。「維特」「ウエルテル」（ゲーテ、若きウエルテルの悩み）など外国作品中のものについても考慮を要する。

成語・ことわざ・歇後語の類はよく収められている。これらはすべて、普通の語彙の間に割りこませてあるが、このほうが引きやすくよい。

近年流行の特殊名詞やスローガンのたぐいも、最近のものは別として、かなりよく収録されているようだ。これらは社会の動きを鋭敏に反映するものであるから、欲をいえば、それが盛んに用いられるようになった契機や時期を併記すべきである。わが国では、例えば“ヤミ”は昭和 14 年から、“斜陽族”は、23 年から流行したということがわかる本がある。

この辞典の語彙収録の方針の重要な特徴は日本語と漢字面で一致し、意味は同じかあるいは類似しているものも、収めるといふ点にある。完全に同じであるなら実際に辞書を引くことはないであろうが、それでも「行書」の「行」は *xing* か *hang* か、「品行」の「行」は 2 声か 4 声か、調べたい人もあろう。まして意味の間に距離のあるもの、あるいは似て非なるものは、看過されやすいだけに、かえって重要である。字面は同じでもすべて収録するという方針を最初に採用したのは岩波の辞典であるが、どちらも検討が行届いていない。例えば「散文」に“隨筆”という訳を与えたのは光生館の増訂版だけで、両書とも《漢

語詞典》の解釈を墨守している。《中国新文学大系》に《散文一集》というのがあるのをご存じないのだろうか。最近、話題となった「信仰」という語も、この語の振幅に感付いたのは光生館増訂版だけで（ただしなお適訳を与えていないのも申せない）、両書とも日本語に全く同じとしている。「古代」「近代」「現代」「当代」というにしても、具体的な説明が必要である。単にそのまま日本語に同じとするのでは解釈にならない。この辞典では料理は菓子の作り方や特殊な物品について、微に入り細を穿って説く。例えば「五毒餅」は7行、「薩其馬」は6行、「五鬼開判儿」という花火は7行、「焗窠」というワラ製の保温器は7行を費して説く。むしろ、このように記録しておくのも悪くはないが、このような知識が実用上どのくらい役に立つかは疑わしい。この辞典の処々から後向きの姿勢を感じるの、わたしの誤解であろうか。

そこで最後に現代の普通話で、この辞典でどの程度、解決できるか試してみよう。使用したのは大安版《中国語中級上級読本》で、原書は《小学語文朗読文選》といい、小学の国語の教科書からの抜粋である。その21頁まで、しかも本文のみを対象としたから、量的には僅少なものである。そこに見える語でこの辞典未収の語には次のようなものがある（原書に出てくる順）。

牢底 坐穿 囚歌 活棺材 毒刑 王朝 飛行軍 緑漣漣 湖霸
 烏蓬船 漁歌 魚簍 漁船 漁民 說不完 浪濤 鉄枷 摸桩（原書に注あり）
 白匪 嚴禁 英雄郎 一条心 鉄牆 記工員 今晚上
 撥亮 比得上 洗補 忘懷 五次戦役（原書に注あり） 敵機 打糕
 炮火 硝烟 流下 狙撃戦 昏倒 背進 炸平 你說 唱不起来
 敵占区 首長 混進 敵戦区 志願軍 山路 双拐 金達萊花 開滿
 山野 前沿 減低

以上の中には結合のしかたがなお不安定で、見方によっては辞典に収めるには及ばないと思われるものもいくらか含まれている。しかしこの辞典の採詞の範囲から見ると、これらは当然、収めるべきであろうと思われる。その中でも、「白匪」「一条心」「記工員」「忘懷」「首長」「双拐」などは、小型の辞典にも欠くべからざるものではあるまいか。ついでながら「金達萊花」はつつじの花（朝鮮語）、「前沿」は最前線（《歐陽海之歌》にもある）のことである。

次に語彙としてはこの辞典に出ているが、解釈が不十分なものを記す。

打翻 免除 湖水 天網 阻擋 眼光 溫暖 傷員 狼狽地
 架（架着双拐） 野菜（挖野菜） 走路 造成 偵察員

例えば「眼光」はこの辞典では①眼光、見識。②目のつけどころ、眼識、着眼。③意志趣味。とあるが、実際に多く見えるものは“視線”“まなざし”の意である。「野菜」はこの辞典では“野生の菜（な）”とある。菜（な）を掘るのだろうか。「免除」は“免除する”とある。「免除する」という日本語は“授業料を免除する”というように用いるが中国語では、“まぬかれしめる”“除く”のような意味。「偵察員」は“刑事”とあるが、“斥候”のこ

とらしい。

話がこまかくなったが、要するに現代の普通話に関しては、このような最新の大辞典でも非常に不十分であるということが、おわかりとおもう。

およそ辞典の性格を決定するものは、なによりもまず、語彙選択の方針である。この辞典には、これが述べられていず、わずかに前述《大安》2月号や広告などから、これを推測するに過ぎない。中国語の語彙は無限である。もし範囲を限り、重点を定めなければ、どのような大辞典でも、収めきれぬものではない。ある古書（白話ではない）を訳した人が、《大漢和辞典》に出ていない語が余りにも多いと嘆息していた。全13巻を以てしても、なおかつそのようであるから、この程度の大辞典で収録もれの語が多いのは、むしろ当然である。

以上、この辞典の語彙収録の範囲について考えてみた。結論的には、この辞典が最も重点をおいているのは、民国期の北京語であるということがわかった。さて次には、文字・注音・解釈・用例その他、記述の具体相を考察しなければならない。しかし、もはや紙数もかなり超過したので、すべて後日の機会に譲りたいと思う。

本書は紙数を制約せず、必要なことはどれほど紙面を費してもものせるという、ぜいたくな辞書のようなものである。それだけに世人の期待も大きいであろうし、わたくしの点もからくなった。「吹毛求疵」の意図は決してない。以上に指摘したようなことは、白玉の微瑕なのである。記述が詳しく、読んで楽しくなる辞典、博識な中国人のおしゃべりを聞いているような辞典である。ひとりでも多くの人にこの楽しみをわけたいため発刊を祝し、あえて紹介の筆を執った。最後に辞典編纂処はじめ関係者一同の長年にわたるご苦勞を心からねぎらう次第である。

〔注〕「大安」1968年6月号所載。

4-3 d (4)

Hamburg , September 11 , 1971

Dear Professor Suzuki ,

On July 21,1971 I sent you a letter in which I confirmed that I received with many thanks two copies of the second edition of your dictionary. To-day I am glad to send you a separatum of the review I wrote on the Chu-Nichi Daijiten. The article will appear in this years' edition of the journal "Oriens Extremus" which is being published by the Chinese and Japanese Institutes Hamburg University.

With the very best wishes I am

Yours truly,

W.lippert

[注] Wolfgang Lippert ハンブルグ大学教授による同大学中国日本研究所発行の“Oriens Extremus” に中日大辞典の詳しい書評を掲載した。

Besprechungen ostasiatischer Neuerscheinungen

Chu-Nichi daijiten. Kompiliert vom Redaktionsstab für das Chu-Nichi dai-jiten der Aichi-Universität ⁱ, Toyohashi, Präfektur Aichi, Aktiengesellschaft Daian, Tokyo 1968, 2135 Seiten, Yen 3500, —.

Läßt man einmal die Wörterbücher Revue passieren, die dem chinakundlich Interessierten zur Erschließung der modernen chinesischen Sprache zur Verfügung stehen, so zeigt sich rasch, daß darunter nur wenige Werke zu finden sind, denen man den Rang eines wirklich brauchbaren Nachschlagewerkes für das Chinesisch der Gegenwart zuerkennen kann. Unter den in der Nachkriegszeit erschienenen Werken dieser Art sind vor allem zu nennen das Chinesisch-Russische Wörterbuch von I.M.OSANIN(3.Aufl.1959), in dem zwar auch der Wortbestand der chinesischen Schriftsprache in gewissem Maße berücksichtigt ist, der Nachdruck aber auf der Erfassung der chinesischen Gegenwartssprache liegt, sowie das 1959 von der Deutschen Abteilung des Pekinger Fremdspracheninstituts herausgegebene Chinesisch-Deutsche Wörterbuch (Han-Te tz'u-tien). Die in den USA herausgebrachte englische Fassung dieses Wörterbuchs ist das Chinese-English Dictionary . . . of Modern Communist Chinese Usage, das in der Reihe der Veröffentlichungen des Joint Publication Research Service erschien und das gegenüber dem Han-Te tz'u-tien den Vorzug hat, daß die sehr zahlreichen sprachlichen Mängel der deutschen Worterklärungen im letzteren in der englischen Übersetzung bereinigt sind.

Begrenzter in Intention und Umfang sind solche Wörterbücher wie das *Chinese-English Current Political Phrases and Terms Dictionary*, verfaßt von der Kaderschule für Ausbildung in Fremdsprachen der Nachrichtenagentur Hsin-hua, Peking 1964, das *Dictionary of Chinese Current Terminology*, das unter der Leitung von Albert A. DIEN im East-West-Center der University of Hawaii abgefaßt wurde und 1962 erschien, sowie das *Dictionary of Spoken Chinese* des Institute of Far Eastern Languages, Yale University ⁱⁱ, um nur einige zu nennen.

Auch die im Anfang der 60er Jahre in Japan erschienenen Nachschlagewerke für das moderne Chinesisch — es seien erwähnt die Wörterbücher von KOSAKA und TADA (Gendai Chu-Nichi jiten), KANEGA, N.(Chugokugo jiten), das phonetische Wörterbuch von KURAISHI, T (Iwanami Chugokugo Jiten)ⁱⁱⁱ sind zwar zum Teil

umfangreicher als die genannten chinesisch-westlichen Werke, verdienen aber als Hilfsmittel zur Lektüre neuchinesischer Texte noch längst nicht das Prädikat „ausreichend“.

Von allen diesen chinesisch-fremdsprachigen Wörterbüchern kann sich keines mit solchen umfassenden Nachschlagewerken messen, wie sie für eine andere fernöstliche Sprache, das Japanische, vorliegen. Werke wie

Wolfgang Lippert (Hamburg)

ⁱ 中日大辞典。愛知大学中日大辞典編纂処編

ⁱⁱ Siehe die Besprechung von Klaus KADEN in *OLZ* 64. Jahrgang 1969, Nr. 7/8, S. 394/395.

ⁱⁱⁱ S. die Besprechung von Wolfgang FRANKE *OE* 12, 1965, S. 255/256.

書評

愛知大学中日大辞典編纂処編（1968）、『中日大辞典』（大安、東京）—これまで日本語で出たもっとも広範な辞典。語彙の選択には少し首をかしげるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにした辞典にない確かさをもっている。1986年に、大修館書店から新版が出た。

[注] 「言語学大辞典」第2巻 世界言語編 三省堂（1989年） 「中国語」の項で、日本で出版された中国語の二言語対照辞典中、今日の用にたえるものとして唯一「中日大辞典」が挙げられている（執筆者 橋本萬太郎）

《中日大辞典》の出版にあたって

鈴木 擇 郎

—

「中日文化交流のため改めて日本人民に贈る」という中国の好意ある特別なとりはからいで、中日辞典資料カードがとどけられ、愛知大学で編纂がはじめられたのは昭和30年4月であった。

その後、愛知大学では中国語担当教授の外に、さらに中国人1名を含む数名の中国語専門家を専従者として聘して編纂業務を進めていたが、13年を経た現在（43年1月末日）ようやく出版のはこびに至った。

この辞典の規模はB6版、本文1,947頁、検字表85頁、日本語による索引68頁、その他付録など合計2,144頁となった。親字は簡化字2,238字を含めて計7,876字であり、繁体字・異体字3,317字をも併載してある。語数は約12万語となった。

本辞典では語彙は漢語拼音方案によってアルファベット順に排列してある。親字・見出し語はなるべく説明を詳しくし、事典的のものも多くし、例文もなるべく多くとり入れてある。

1995年以後の文字改革による一連の変革は全部とり入れられている。すなわち、①漢語拼音方案は勿論全部とり入れ、分かち書きがしてある。②簡化漢字は全部とり入れてあり、同時に繁体字・異体字も併載してある。③異読字は“普通話異読詞三次審音総表初稿”を完全にとり入れ、従来の異読音は親字のところに審定音とならべて“一”で区切って細字で示し、対照してある。

方言は普通話への過渡段階にあると思われるものは勿論、新聞や文芸作品などにあらわれるものも採録されている。使用地域の明らかなものには 京 東北 西北 広 などの符号をつけて、それぞれ北京・東北・西北・広東地方の方言であることを示し、通用地域の判定しがたいものは単に 方 とした。元・明の古白話はその専門辞書にゆずることとし、ごく少数を収録するにとどめた。

地名は原則として中国地名はとらない。外国地名はアフリカの新興国に至るまで全世界の国名・首都名、さらに若干の主要都市名を収録した。人名は歴史的な人物をごく少数収録した。国際的新聞社・通信社名は収録した。それらはいずれも本文中にとり入れてある。

軽声は3段階に分け、①場合により軽声となる程度の軽声音節には、そのつづりの前に「●」を付し、〔摆脱〕 bā i●tuō、〔成就〕 chéng●jiù、〔推辞〕 tuī●cí の如くした。②常に軽声に発せられるが、その漢字本来の意義を失っておらず、話し手もきき手も、意識の中で声調が失われていないと思われるものには、そのつづりの前に「・」をつけて〔錯

誤] cuò · wù、[打听] dǎ · tīng、[预备] yù · bèi とし、③常に軽声に発せられる音節のうち、よく用いられる少数特定のものについては、そのつづりの前に「・」を付し、声調符号はつけない。すなわち語気詞・接尾詞や重畳詞の第二字・複音単純詞の軽声字などで、[了] · le、[的] · de、[呢] ne ·、[们] · men、[儿] · er、[子] · zi、[头] · tou、[衣裳] yī · shang、[葡萄] pú · tao の如くした。

二

検字表は、①旧来の 214 種の部首とその約束ごととにこだわらず、なるべく見た感じによって検字できるように、243 種の部首を設定した。②部首はあたらしい字体にもとづき 5 起筆、すなわち、てん 丿、よこ 一、たて 丨、はらい ノ、折れ 冂 の筆順で画数別に排列してある。

この二つの原則によって、次のような配慮がなされて、検索がたやすくなった。①見た感じで二つ以上の部首に入れておく方が検字に便利であると思われる字は、できるだけそれぞれの部首に重出させた。たとえば、反は 又、ノ、一 の 3 部首に、克は 十、儿の 2 部首に重出させてある。②画数のまぎらわしい字は、多少まちがっても引けるように、できるだけ重出してある。たとえば、肺は月の 4 画、5 画に、極は木の 3 画、4 画に重出させてある。③比較的画数の少ない字で、どの部首に属するか判断のつきかねるような字や、習慣上 2 通り以上の筆順がある字は、できるだけ 冂 丨 ノ の各部に重出させてある。たとえば、为は 冂 力 の 3 部首に、凹は 冂 丨 凵 の 3 部首に重出させてある。④日本当用漢字字体には△を付して重出させてある。たとえば、反は 又 冂 の 3 部首に重出させ、辞典本文の〔反〕に導いてある。

日本語による索引 68 ページ、約 1 万 7 千語を巻末に加え、正面からひく「中日」の用法と逆の方からひく「日中」の用法とを兼ねたものとし、この辞典を効率的のものとした。

附録としては日本語索引以外、次のものが掲載されている。

部首名一覧 日中字形対照表 偏旁簡化表 主要量詞一覧 中国政治機構一覧表 中国重要記念日・二十四節気・旧暦主要節日一覧表 親族関係表 北京傳統住宅図解 度量衡比較表 化学元素表 中国略図

三

当初発足の際は、完成期は大体 6 年後の昭和 36 年 3 月をめやすとしていたが、これはたいへんあまい考えであった。なんせ、取組んだ相手は外国語である。一語を採るにも捨てるにも、その判断は容易ではなかった。親字一字、見出し語一語を解説するにも多くの時間を費やすこともあり、一植物名の中日文獻の不一致を追及して予期しなかった多くの時間を費やしたり、また専従者も授業の負担を負わされたり、もろもろの原因のため、当初

の見込みは大きくはずれてしまった。

完成期の見込みが大きくはずれて長びくと、中国で「夜長夢多」という如く、いろいろな雑音が入って来る。世間では「あの辞典はどうしてしまった」というし、学内からも「いつできるのか」といわれるし、甚だしきは、「とてもできないからやめてしまえ」という声さえ出たらしい。愛知大学名誉学長本間喜一氏はこの事業を愛知大学の事業とするまでにとり運んだ人であるが、毎年の予算会議にも姿勢を低くしなければならなかったらしい。一方、そろばんに合わないこの事業は出版社からは敬遠され、愛知大学が出版費を出してくれるかどうか未定であった。この一時期は、われわれにとっては雪もよいの空のような時期であった。しかし、われわれ編纂員の責任はよい辞典の原稿を早く仕上げることであった。暗い気持ちをひきたてて、作業開始以来やって来たように、夏休みも冬休みも返上してカードと首引きであった。

39年になるといよいよ完成のめどがついた。あたかも41年11月は愛知大学創立20周年になるので、愛知大学は記念事業の一環としてこれをとり上げることになり、印刷費の半分あまりを保証してくれることになり、日通社長福島氏、朝日新聞社、毎日新聞社が大部数の前金予約をしてこの事業を援助して下さったので、この辞典は陽の目を見ることとなった。雪もよいの空はたちまち快晴となった心地であった。中日大辞典刊行会は印刷・出版に関する一切の業務を株式会社大安に依頼した。

以上のような曲折を経て、印刷に2年6ヶ月を費やし、この辞典は世に出ることになったのであるが、果たして世間の期待に副うことができたかどうか、中国のご好意に報い得たかどうか、自らかえり見て不安なきを得ない。

〔注〕「大安」1968年2月号 所載。「大安」は中国書専門店株式会社大安発行の月刊書籍目録。

中日大辞典の思い出

鈴木 栞 郎 (愛知大学教授十五期)

中日大辞典はいつ頃、どうして完成し出版するかというはつきりした見とおしはなく、ただ、できるだけのことをやっておきさえすれば、必ず何とかなる、という漠とした自信だけであった。仕事は各自井上中辞典一冊を持ち、中国人にはそれに出ていない語いを補ってもらい、われわれ日本人は文献から語いをとるというところで始った。いかに中国人でも「憑空想」ということでは、そうたくさん思い出せるものではないので、いずれは遠からず行き詰るはずであった。この仕事をはじめたのは昭和八年頃であったと思うが、時局は日中戦争の泥沼へ踏みこんだところで、中日合作に基盤を置いたこの仕事は大影響を受けざるを得なかった。中国人講師は漸次姿を消し、日本人教員も若い人達は召集を受け、この仕事は長い間、断続し停顿せざるを得なかった。それでもこの仕事に目をつけた東京の出版社があったのだが、成果はまだ到底出版などできる段階ではないので、出版可能な状態になったとき改めて相談するということにした。

終戦時、敵産として中華民国に接収されたときは、新しく加えられた語いはあまり多くはなかったと思うが、井上辞典以外の辞典からも切貼りをしたのでカードは約十四万枚になっていった。接収に来た委員はその後ソ連へ出張の際飛行機事故で死んだ有名な文学者鄭振鐸氏であった。カードは二人で動かすには重すぎるほどの木箱三個に詰められていた。これを引渡すときにわたしは、「将来、もし事情が許すようになったら、われわれにこれを完成させてもらいたい」旨を要望しておいた。

これで見るとやはり引渡すのは惜しかったのだと思う。しかし、敗戦は絶対的のものだからあきらめ易かった。また、自分の責任ではなくてこの責任から放免されたわけで、心の奥ではほっとした気持ちもあった。

こうしてすっかり忘れていたのであったが、昭和二十八年頃、書院大学最後の学長、当時の愛知大学長本間喜一氏、元書院教授、当時愛知大学教授(後に学長在任中死亡)小岩井浄氏らの熱心な懇諭があり、辞典原稿カードの返還を願ひ出ることになった。わたしとしては接収という不可抗力によって免罪となっていたのであるが、もし万一このカードが返還された場合にはあたかも前科を追及されるような具合になり、改めて責任を負わされることになるのであった。しかし、このような話が出た以上、それを実施するのもまたわたしの責任であった。それで日中友好協会理事長であった内山完造氏を通じて中国科学院長郭沫若氏宛に辞典カードの返還を願出たのであった。同氏の御斡旋により、「日中文化交流のために改めて日本人民に贈る」という異例な取扱いで、昭和二十九年十二月引揚船興安丸托送で日中友好協会へ送り届けられた。同協会では元の関係者を招集して協議の上、この仕事を完成する熱意を有している愛知大学へ引渡して完成させるということに満場一

致で決定し、現物は三十年一月愛知大学へ届けられた。滬友会幹事会はこのことを「愛知大学の強盜的行為」であると全員一致で決議したのであった。その後、ある二名の同窓がこのカードを東京へ引取って完成したいと執拗に要請して来たが、それは完成の責任を負っている愛知大学として認められるはずもなかった。

この仕事の完成はもとより相当な経費を要することである。貧弱な愛知大学の財政から支出することに決定するのには、評議会説得には本間先生が苦勞されたことであろうが、結局、この辞典の編纂は愛知大学の事業としてやるということが承認された。

さてこの有意義ではあるが、また困難である事業は、いったいどれだけの人員で、何年かかるか、編纂費がどれだけのいかも見当がつかない。しかし先ず編集員を確保することが第一要件である。最先に招聘されたのは几帳面で誠実で、これ以上適任者はなかるうと思われる三十四期の内山雅夫君（前東亜同文書院大学予科教授）であった。次に中国人一名は元書院専門部講師歐陽可亮氏夫人張祿沢女士（北京・中国大学国文系卒業）を台湾から招聘し、さらに愛大文学部中文専攻卒業者今泉潤太郎君を加え、これらの人を専従者として昭和三十年四月一日を以って、中日大辞典編纂事業を発足した。その後、東北大学文学部中国文学科特別研究生終了の志村良治、愛大法経学部卒の杉本晃、書院十五期宗内鴻、十九期遠藤秀造の諸氏を迎えて編纂陣営を充実した。わたしと桑島信一君は兼務で、できるかぎり尽力することになった。

これらの人々は申訳ないような待遇で来てもらったものではあるが、兎に角人件費は必要なのであり、この外、資料費なども相当必要なので、相当額の予算が必要であった。

また、その時は中華人民共和国成立という大変革があり、この仕事には、その資料を取り入れるという仕事があるので、その完成期は全く見当がつかなかった。最初は先ず六年で完成するという見当をつけて見たが、その六年が経過しても完成期は漠として確定し難かった。

いよいよ印刷にかかったのは昭和四〇年四月であった。最初は一年くらいで一切を完了し得るだろうと思っていた、校正も専門家および部外者多数にお願いしたに拘わらず、一頁三千五百字、本文一、九四七頁、索引および附録一七六頁という分量なので、印刷のために二年十カ月を要した。辞典を一つ作ると、からだをこわすとか失明するとかよくあるものと驚かされていたが、幸にして大体無事にすんだ。

難航を極めた出版費の調達

しかし、苦勞は印刷業務に在るのではなく、出版費の調達であった。これについては本間先生が奔走して下さった。そのうち二つの大出版社は同様な計画を実施中だからということでもわられた。そのうちの社は前述の上海で交渉のあった出版社である。さらにもう一つの出版社は、いよいよ原稿のでき上った時点でまた相談しようという好意的なものであったが、原稿脱稿時にはその社長はすでに物故しており、その後継者はこの辞典の

4-3 e (2)

価値を理解しなかったか、あまり興味を示さなかったものでそれまでとなった。また、この数年前愛大教授のうちに、叔父がある財団に関係して居り、その財団はこのような文化事業には相当援助してくれると思うからとて、紹介して下さったので、わたしは本間先生といっしょにその方を訪問した。その方はい、へん好意を持って他の幹部を紹介して下さったのだが、充分な理解をいただけず、不成功に終わった。

さらに滬友関係では名古屋の磯部鎌一氏（十九期）はたいへん心配して下さって、この事業は何とか滬友の力で出版を実現させたいとの熱心な御配慮があり、多賀二夫氏（六期）は教育事業や文化事業には理解のある方だから、出版費を出して下さるようお願いしてみようというので、わたしは磯部氏に案内されて多賀氏にお目にかかった。多賀氏は好意を以って考慮して下さったのだが、印刷会社の見積書を見て、金額の桁がちがうので力が及ばないから悪しからずとのことであった。

愛知大学の内部でさえも、この辞典について認識が浅く、出版費の大学負担はたやすくは決定されなかった。そのうちに本間先生の方で偶然ある人を通じて日通福島社長からまとまった数量の予約をし、予約金を現金で渡すという話合いができた。さらに朝日、毎日両新聞社および中国貿易友好商社から予約してもらい、その部分は中国の駐日貿易弁事処を通じて中国へ寄贈することになり、これも予約金が入ることになったので出版に踏み切る事ができた。またこの時は恰かも愛知大学創立二十周年に当るので記念事業としてとり上げるといふことになり、出版費の半額を保障し、更に必要金額は貸与し立替払をするといふことになり最後の難関を突破することができた。わたしはいいものさえ作っておけば何とかなるといふ呑気な考えを持って居ったものの資金調達能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願いし、お骨折りを願っていたのであった。

かくして、兎に角「中日大辞典」はでき上った。幾多の欠点はあるが、また一定の評価も得ている。これで特別の取扱いで原稿を返してくれた中国、いろいろ御斡旋をいただいた日中友好協会、物心両面において何くれと御援助下さった多くの人人の御好意に対し、一応のおこたえができた、やや心に許すことができたのは幸であった。特に本間先生は書院最後の学長として書院大学に関係ある終戦処理の最後のものを完了したわけであり、愛知大学の責任者としては、愛知大学の事業としての辞典編纂を完成し、日本人の附託にこたえることができたわけで、この辞典の出版のためには老躯をいとわず奔走して下さったので、この辞典の出版を何人にもましてよろこんで下さった。そしてわたしも肩の荷をおろすことができた。

今後は「日進月異」の中国の進展に応じてどのように増改訂をするかが将来の苦勞といふことになる。

〔注〕滬友三二号 一九七二年十一月所載。

中日大辞典の編纂と思い出

第十五期 愛知大学名誉教授 鈴木木沢郎

一、中日大辞典編纂の発端

わたしの学生時代には、中国語学習でお世話になった書物は、華語萃編初集、官話指南、談論新編等教科書と岡本正文氏の支那声音字彙以外には何もなかった。西欧語を学ぶにはそれぞれ立派な辞書があるのが羨ましかった。ジャイルスの中国語辞書はあったはずだが、われわれの目には触れなかった、目に触れたとしても高嶺の花だったろう。

その後、わたしは母校に奉職し、翹望しながらついに得られなかった中国語辞典を編纂するのに可能な環境に置かれたのであった。わたしは大胆にも中国語辞典の編纂を提議して同僚諸君と、母校当局の賛成を得、支那研究部の事業として中国語辞典編纂を充足した。その時は昭和八年であったと思うが記憶ははっきりしない。編集の仕事が目途のつけられる程度まで進まないうちに、時局は不安を増し、日中戦争は泥沼に踏みこみ、編纂事務もほとんど停顿状態にあった。

昭和十五年頃だったろうか、三省堂上海支店からこの中日辞典の出版について話があったが、まだその可能な状態まで進んでいないので、時期到来したら相談するということにした。

二、敗戦による原稿カード接收とそれの日本人民への贈与

日本敗戦のとき、東亜同文書院大学のあらゆる財産は、公有私有を問わずすべて中華民国政府によって敵産として没収され、われわれの中日辞典原稿カードも勿論没収された。

この原稿カードを接收委員鄭振鐸氏（著名な中国文学者）に引渡したとき、「将来、もし事情が許すようになったら、われわれにこれを完成させてもらいたい」旨を要望しておいた。とはいうものの敗戦という絶対的理由によるものだから、返還などは考えられず、また自分の責任ではなくて辞典完成という責任から放棄されたわけで、心の奥ではほっとした気持ちもあった。

終戦後約十年、元東亜同文書院大学長、愛知大学長本間喜一氏の熱心なる懇意があり、同氏名義で、日中友好協会理事長内山完造氏に依頼し、中国科学院長郭沫若氏を通じて中華人民共和国政府へ原稿カードの返還を願い出た。目的のそのカードは幸いにして完全に保管されて居り、「中日文化交流のため改めて日本人民に贈与する」との主旨で、日中友好協会の窓口を通して日本人民へ実質上返還されて来た。日中友好協会は、この辞典の関係者のほぼ全員を招致し、処置が議せられた。協議は全会一致で「この辞典の完成に熱意と能力とのある愛知大学へ引渡して完成せしめる」ことに決定された。愛知

4-3 e (3)

大学はこの決定に基づいて昭和三十年四月から中日大辞典の編纂を発足した。

三、編纂業務の進行

さて有意義ではあるがまた困難であるこの事業は、いつたいどれだけだけの人員で何年かかるか、編纂費はどれほどいるのか、印刷費はどれほどかかるのか、まるで見当もつかなかった。また、大陸では中華人民共和国という新中国が生まれ、社会も経済も人の心までも大変革があり、文字改革が行なわれたことなどで、辞典の完成期は見当をつけ難かった。

愛知大学は創立後日なお浅く、困難な大学財政から編纂資料費の予算、専任教授、講師を除いた編纂専従者の人件費等の支出を要し、兼務者は無報酬、専従者に対しては失礼なほどの薄謝しか差上げられなかったのではあるが、辞典完成の昭和四十三年まで十三年間の編纂費の支出は、相当な額に上ったはずである。これに対して大学評議会や図書費の不足をかこつていた教授たちからは、われわれにとっては耳の痛い不協和音が発せられたようであった。本間先生はその間苦勞されたことと思われるが、その政治力であまりの騒音にはならなかった。

このような苦境を救ってくれたのは、朝日新聞社、中日新聞社、地元の実業家石原氏などからの応援であり、また貧者の一燈であると称して少額ながら二名の匿名の特志家からの心あたまる応援をいただいたことであった。

編纂業務は前述の兼務編纂員、専従編纂員によって進められたのであったが、もともと人員も少なく、中国文字改革の完全吸収などのこともあって、発足以来出版まで十三年の長期間を要したのであった。編纂に従事した人人の氏名は中日大辞典の「編者のことば」に詳述してあるのでここでは省略する。

編纂業務の進行は、前述のような中国の変革があったにかかわらず、それを知る資料の入手はかなり困難であり、そのために問題解決に時間を要したことたびたびであった。簡化漢字の母型二千余の製作も必要になった。これら予想外の労力と時間および費用を要した。

四、中日大辞典の出版

以上のようにして、この辞典は作業開始から十三年にしてはじめて「中日大辞典」として世に出た。後に、ある書物に「中日大辞典という小さい辞典にはかくかく」と好意的ではあるが皮肉な引用があった。われわれが敢て「大辞典」としたのは、他は「中日辞典」があるのでそれらとの区別のために敢て「大」字を用いたに過ぎない。

いよいよ印刷ということになっても、印刷所は中国文の印刷には慣れていない。中国語の簡化漢字が親字とされている場合には、旧繁体字、異体字までも併記し、さらに標音には新たに制完された「漢語拼音方案」によるローマ字を用い、ローマ字一音節ごとに声調符号をつける等、普通の日本語の印刷くらべ、たいへん面倒なものである。その

ため附録まで含めた二、二二一頁の印刷に一年十か月を要し、いよいよ出版されたのは編纂開始以来十三年後の昭和四十三年二月であった。

五、思い出

上海時代に作った辞典カードは未整理の粗資料であったが、実質的に返還されてわれわれの手にかえって来たということは、たいへんな励みになったが、「中日文化交流のため改めて日本人に贈与する」として贈られたことは、われわれの手でどうしても改めて立派にやりとげねばならない重い責任を負わされたことであり、あたかも改めて責任を追及されたような気の重いことでもあった。幸いなことは、編集スタッフに適材を得たことであった。

十三年といえど相当の長い時間で、「夜長夢多」といわれるとおり思い出は少なくない。編纂作業の最初の見当は六か年であったが大幅な見込みちがいだったので、「編纂の仕事が楽しいんだらう、いつまでつづくかわからんぞ」とか、事務局長からは「編纂室はいつかえしてくれるのか」と毎年の催促、こちらは「もう一年」という毎年の返事、局外者からはわれわれがのらりくらりとやっているように見えたのかも知れない。

編集も進んだ段階では、いちばんの重要問題は印刷費をいかに調達するかということであった。大学評議会はこの辞典を創立二十周年記念事業とするとしならが、いよいよという時に印刷費の三分の一あまりの支出しかしてくれなかった。わたしには金の調達能力などはゼロだったので、半分捨て鉢で、いい原稿を仕上げておけばそのうちに何とかなるさと思っていた。

ところが本間先生は平生は時々編纂室へ顔を出してわれわれを激励して下さったばかりではなく、書院大学最後の学長として、書院大学最後の未完事業である辞典編纂は、先生の書院大学に対する最後の責任であるとして居られ、印刷費調達にも早々から熱心に奔走して居られたのであった。最も望みをかけて居られたのは平凡社社長との話合いであったようだが、あたかも老社長の死去のため御破算になった。

本間先生は東京商大出身某氏の仲介で日通社長福島敏行氏に連絡ができ、その御好意で多数の予約を前金でいただき、前記の愛知大学からの援助金と合せて印刷着手金を得、印刷にとりかかることができた。その後、朝日新聞社、毎日新聞社からも多数の予約をいただき、この分は中国貿易友好商社からの予約二〇〇冊を加え、一、二〇〇冊として、中国のこの辞書に対して与えられた好意に報いる意味で中国の各大学へ一千冊、対外貿易機構へ二百冊を寄贈した。

印刷に関しては図書印刷株式会社に、印刷交渉、発売に関する一切は株式会社大安(現在の燎原書店、四十二期小林実弥君経営)に依託し、すべては大体順調に経過した。

この中日大辞典の完成は上海時代に手をかけて下さった人人の努力、日中両国の友好協会の御好意、愛知大学における長期にわたる関係者のご尽力、本間先生、小岩井先生の熱意、本間先生の周密なる御配慮の賜物であった。この辞典の編纂は、その目標を達

成して、日中兩國人民の附託にこたえることに在ったが、その目標に達し得たか否かは、要望の寛赦にもよるが、われわれは一応こたえ得たと思っている。

昭和四十八年六月われわれ辞典関係者四名が中国天津市南開大学から招待を受けて訪問し、この辞典に関する有益な批判を、三日間にわたって受けた。北京大学、上海復旦大学においても同様であった。中国人も日本語研究のため、この辞典を利用する人が少なくないとのことであった。

辞典の思い出にも美に遺憾な思い出もある。この編纂を開始して間もない頃であった。原稿カードを愛知大学へ持って行ったのは愛知大学の強盜的行為である、滬友会役員が全会一致で決議したことであった。この原稿カードはもともと愛知大学が正当な手続を経、関係者および日中友好協会の依託を受け、多大な困難を覚悟し、日中兩國民の附託に応えることを決心した上で引受けたものであった。当時の滬友会は、あたかも中国の「四人組」の跋扈の如き理事長の横暴を許していた。愛知大学は理不尽な漫罵に耳をふさぐことはできなかった。わたしは愛知大学およびわたしの名譽のために、雑誌「滬友」に投稿して理事長と論戦したが、理事長はついにわたしの文章の登載を拒否した。わたしは役員会決議に対する反駁と抗議のため、昭和三十一年十月わたし個人の見解でプリントを作り、滬友会役員会構成員へ送付して抗議し、同時に各支部へ五部づつ送って批判を仰いだ。これに対し数人の同窓からはわたしの主張を支持して下さる手紙もいただいたが、反対意見はなかった。滬友会役員会および役員からは何等の意思表示もなかった。

さらに同じころ、もうひとつ不愉快な思い出がある。それは原稿カードを東京へ持って行き、そちらで完成するという詭計を執拗にもちかけされたことである。この辞典を東京で編纂するということは、愛知大学は前述の附託に応えられず、責任を放棄することであって名譽にかけて許し得ないことであった。

六、将来への展望

星霜は移り、この辞典出版後すでに十二年を経過している。最初にこの辞典を編纂した時は中国の社会・文化は、革命前とはたいへんな変化であった、しかも、中国の資料は入手困難であり、訪中も容易ではなかった。現在は革命前と後とのような差はないが、文化大革命は意外に大きい変化をもたらした。かの地における中国語研究も進み、辞書・参考書の出版も少なくない。これらの変化や研究成果を取り入れ、この中日大辞典の内容を充実し、広さ・深さ・重さを、発展増大しつつある日中関係に適応し得るものとしなければならぬ。前述の南開大学など中国三大学における批判・研修なども、そのために利用しなければならない。わたしは昭和四十九年三月胃切除という応急処置で危機を脱し、数年余命をのびし得たので、本職を辞し、わずかに残された余命を以て、専心増改訂に当ることとしている。専従者はわたしと台湾の国立師範大学出身の有能な女性とだけであるが、教授・講師諸氏もよく協力下さっている。二名の中国人客員教授・

4-3 e (3)

講師は大新聞社で記者をされた経験があり、文学にも造詣深く、そのうちの一人は最近まで人民日報の記者をされた人で、お二人とも辞典増改訂には最適任の人で、立派な成果が期待できる。ただ、さらに多数の人材を聘し得ないのが残念である。増改訂の一応の完了予定は昭和五十六年である。

〔注〕遺稿。一九七八年前後、「滬友」への投稿予定原稿。

4-3 e (4)

大中国語辞典を出版する愛知大学華日辞典編さん所長、教授

すず き たく ろう
鈴 木 扱 郎

三十二年間をかけた二千万、十三万語の「大中国語辞典」が出版される。現在出ている一番大きな辞典が七万語というから、ざっと二倍。鈴木教授が半生を費やした努力の跡が十三万語の一語々に刻みこまれている。

「昭和三十一年、中国新政府が行なった文字の改革にはとまどいました。なにしろ簡化文字や表音文字がぞくぞくつくられるし、異読語は大整理されるし……」と苦勞を語るが、口調はあくまでひかえめ。根っからの学者なのだろう。このため昭和三十三年、中共の国語学者に新しい文字の知識を教えてもらいにかけて。

「北京大学聴講生のころ、『阿Q正伝』で有名な魯迅の講演がさっぱりわからなかったことが中国語研究に一生をささげるきっかけになった」という。辞典の編さんを手がけたのは昭和八年、上海の東亜同文書院教授のころ。終戦直後まで同書院の日本人教授六人、中国語講師五人でせっせと単語カードの作成をつづけ、十四万枚できたところで敗戦、押収された。このときはガックリきたそうだ。

さいわい昭和二十九年、中共の保衛世界和平委員会の好意で全カードがかえり、今回の大辞典表現の運びとなったわけだ。

教え子の今泉潤太郎同大学助教授らと最後の索引カードを整理中だが「来年六月出版しても増補改訂に一生追いまくられるでしょう」と辞典完成のむずかしさをのぞかせた。明治三十一年、栃木県生まれ、六十七才。（松本伸夫）

〔注〕毎日新聞「談話室」 昭和四十年四月二六日所載。

中日大辞典編集終る

中日大辞典出版の報告とお願い

愛知大学 鈴木扶郎

この中国語辞典は昭和二十九年十月中国から贈られた原稿をもとにして編纂されたものであります。その原稿は三十数年前から東亜同文書院で手にかけて来たものが、敗戦の際中国政府へ接収されたのでした。その当時の責任者であり、後の愛知大学学長本間喜一氏の熱意、故内山完造氏の斡旋、中国科学院長郭沫若氏の好意により、この原稿カード約十四万枚は「中日文化交流のため、之を日本人民に贈られる」こととなり現品は昭和二十九年十二月日中友好協会を通じて愛知大学へ引渡され、そこで完成されることになったのであります。愛知大学はその事業としてこの辞典の編纂にとりかかることとなりもと東亜同文書院大学においてこの辞典の発起者であり推進者であったわたしを編纂委員長として元東亜同文書院大学予科教授内山雅夫氏、北京の中国大学国文科卒業の張祿沢女士および老練な専門家数名を聘して専従編集員として昭和三十年四月発足し、四十年三月一応脱稿ということになりました。この間まるまる十一年の日子を費やしたのであるが、それはこの事業の質、量ともに簡単なものではなかったのに専従者の数が少なかったことが主な理由であり、また一方には中国の社会変革による言語の変化に順応すべくできるかぎり意を用いねばならず、また雄大な国語政策としてつきつぎにあらわれた改革や整理を完全に吸収するなど多くの手数を費やさねばならなかったこともひとつの理由であります。かくして、いま原稿は一応脱稿するまでになり、B6版(岩波基本六法と同型)二千ないし二千三百頁、収録語数十三万語(現在ある他の類書の二倍以上)、注釈は懇切にし、例文を多くして理解しやすくし、中国の文字改革を完全に取り入れてあり、印刷には約一年を要し、出版は四十一年六月頃の予定です。この辞典は「日中文化交流」にいささか寄興することができ、日中人士の期待にまずまずこたえることができようかと思つて居ります。

この種辞典は印刷費が高くつき、出版には多額の費用がかかるので、容易に出版に踏み切れず、本間先生は非常に頭を悩まされたようでしたが、このほどある方面からある程度の資金の援助を得られ、さらに愛知大学の援助により着手金の調達をおわり、出版に踏みきることができました。今後は納本と同時に支払われるべき一十余万円を如何にして調達するかが問題であります。愛知大学は勿論十分な配慮はして下さるが大学にこれ以上迷惑をかけずにこの出版を完遂しなければならぬと思つて居ります。それにはなるべく多くの予約を獲得することだと思つるのでこの方面で同窓諸君のご援助を願えれば幸に存じます。また、本間先生が熱心に考えて居られることであるが、それはこの辞典の千部乃至二千部くらいを中国へ贈りこの辞典の完成を報告し、原稿カードを贈

4-3 e (5)

つて下さった中国に対してその好意を謝したい、というのであります。その資金は特志家にお願しなければならぬことであろうが、また一般人士の好意の結果も意義深いものがあると思います。

(四〇・六・七)

わが同窓会の会長伊藤公氏は中国の招待を受けて国際法律家協会のメンバーとして、八月十五日出發される。一行は一箇月の予定で各地を歴訪する。ことその他、中国と関係が深い愛知大学ゆえ、氏に対する注文も多く、中日大辞典の話やら、交換留学生実現の下交渉などその準備に多忙を極めている。

また、同窓会でも激励の歓迎会を盛大に開くべく副会長が発起人となって準備をすゝめている。

会員多数の参加をお願いします。

記

日時 八月十一日午後六時

場所 名古屋校舎新館地下ホール

会費 五〇〇円

〔注〕愛知大学同窓会会報第十一号（昭和四十年八月一日）所載。

4-3 e (6)

鈴木沢郎先生の栄誉 叙勲祝賀会開催

本間名誉学長も激賞、不朽の労作、中日大辞典の編纂

愛知大学名誉教授鈴木沢郎先生の勲三等瑞宝章叙勲祝賀会は、十一月十九日豊橋グラ
ンドホテルで先生ご夫妻出席のもと、愛知大学主催の形で、百余名の参集を得て盛大に
開かれた。滙友会からは田中会長の代理として上野事務局長が出席した。本間愛知大学
名誉学長は、祝詞の中で、鈴木先生が、上海からの引揚げにあたって、自分の物をもち
帰るのも割いて、大きなトランク三ツ位に入った学籍簿・成績表を持ち帰られたご苦心
についての披露があった。鈴木先生の最大の業績は中日大辞典の編纂であるが、これは
永く歴史に残るもので、日中の友好と文化交流の為に果す役割はいかに高く評価しても
し過ぎるものではない。参会者一同改めて、先生のご苦心を思い、祝賀会の雰囲気は一
層盛り上った。

〔注〕こゆうニュース 第四三号（一九七七年十二月）所載。

4-3 e (7)

愛犬太郎とバンザイ電報

越知 専

もう一つ面白い話があるんですが、昭和四〇（一九六五）年、本間先生は勲二等の勲章をいただいた。

しかし「おれは要らんよ」って犬にくれちゃった。これは大変国に対して失礼なのかもしれないけれども、本間先生には他の先生が頂いていないのに、という気持ちがあった。

愛知大学はゼロから始まって寄付や市の援助でできた大学でしたのでお金がありませんでした。そのため経営が不安定で、給与も出なかったりしました。そこで先生方の中には、言い方が悪いかもしれませんが、国立大学の方が給料の取り損ないがないとか、そういう理由で愛知大学から国立大学に行った人がいました。そして一〇年たち、二〇年たつと、そういった先生方は業績や年数を評価され国から勲章をいただける。その場合、どうしても国立へ行った先生の方が先にもらってしまうわけです。

愛知大学には『中日大辞典』を完成させた鈴木擇郎先生がいます。

鈴木先生は上海から引き揚げるときに、長い年月をかけて作ってきた辞典の原稿カードを没収されてしまいました。そのような中で自分の身の回りよりも東亜同文書院の学籍簿や成績簿、そういうものをご家族とともに手分けして持ってきたばかりか、豊橋に新しい大学を創るんだという本間先生の心意気に惚れて頑張ってきた。

本間先生は、『中日大辞典』の原稿のカード十四万枚が、中国で保管されていることを気にかけておられ、「中日大辞典をつくりたいので、ぜひ愛知大学に返してください」と中国側に要望します。昭和二十九（一九五四）年に両国の友好のためにと返還され、再び編纂事業を始める事ができます。鈴木先生を中心とする編纂グループは、返還されてから更に十三年の年月をかけ、昭和四十三（一九六八）年、ついに中日大辞典を完成させます。毎日新聞はこの辞書の出版によって「日本は中国に関して世界の学会に誇りうる金字塔を建てた」と賛辞を送ります。

昭和五十二（一九七七）年、鈴木擇郎先生が勲章をもらえることが発表されると、鈴木先生の元に本間先生から電報がとどきます。これがその電報文です。

「バンザイ・キガセイセイシタ ホンマイ」

これしか書いていません。

「万歳 気がせいせいした 本間。」

一応お祝いの電報として鶴と亀の絵がつけてありますが、なんだか怒っているようにも思える。配達の人も、これはお祝い電報か何か、文がわからない。わからないけど、まあ、一応お祝いの電報にしておくと鶴亀の電報にできたそうなんです。

4-3 e (7)

鈴木擇郎先生は、私がいつも頭を刈っておりましたのでお店に来て言うわけです。「越知君、本間先生からの電報が、よく意味がわからん。勲章をもらったからお祝いだと思うけど、万歳、気がせいせいした、とはどういうことだろうか、僕は直接聞けんから、君、今度頭を刈りに来たら本間先生に聞いてくれ」というものですか、私が聞いたわけです。

そしたら、本間先生曰く「同文書院や京城帝大から帰国した先生方が愛知大学へ一旦来た。ところが新制大学など愛知大学以外に大学がたくさんできると国立へ移ってしまつた。その人たちはもう五年も一〇年も前から勲章をもらっている」。

だから本間先生は、遅い、遅すぎると。国家は何だ。私立大学を低くみておるのかといつもやきもきしていた。それで、『中日大辞典』というような立派な書物を発行した鈴木先生に対して勲章を發行するのが遅すぎると。だから、「よかつたな、万歳、これで僕も気がせいせいした」という同僚思い、部下思いの心情がこもつた本間先生の言葉であつたと分つたわけです。

〔注〕『本間イズムと愛知大学実例編』（愛知大学東亜同文書院記念センター
二〇〇九・七）所載。

内山雅夫君（三四期）は正義・責任感の強い人だった

日本敗戦後間もない頃のある日、上海で旧制一高のつつましやかな同窓会が開かれた。集まった人は二十人ほどであった。そのうちに東亜同文書院大学長本間喜一氏もいたし、応召の若い士官もいた。本間氏は「日本兵のように横暴なことばかりしていたのでは、中国で人心を得ることはできない。」といったら一人の青年将校は次のような抗弁をし、日本兵にもこういう人が居ると誇らかに次のような話をした。

「南京で、ある部隊が中国の旅館に宿営することになった。その部隊のある二等兵は中国語も堪能であったが、部隊と旅館側との間に十分な意思疎通をはかり、誠心誠意旅館を保護した。旅館の主人はこの二等兵の誠実に感動し、是非媚になつてもらいたいと懇望した。この二等兵は日本に親も妻子もある身なので、それはできないと断つた。この人は上海で復員したのだが、そのときは親戚一同が集まって盛大な送別宴を開いた。いよいよ上海を引揚げたときには、わざわざ上海まで出て来て見送つたとのことである。」

本間学長は大学へ帰つてこの話をしたら、その二等兵は内山君であるということを知らされた。この話は中日大辞典出版記念講演会の時本間氏の口から公開発表された。以上の談話が真実であることは、わたしからじかに内山君にたずねて確認することができた。

これはまた中日大辞典の話になるが、内山君の同期のある人は「内山君が加わるなら必ずいいものができるだろう」といったとのことである。

以上のことから見ても内山君の誠実と正義感・責任感の強いことがわかる。師友間に敬愛されていたのもゆえあるかなである。

内山君は一にも二にも、教師たることを天職と信じ、これに全力を傾注することがその人生のすべてであるという信念を持っていたと思われる。その生涯を通じて、やむを得ずして過した数年以外は、若くして上海日本居留民団立商業学校教諭をふり出して、東亜同文書院大学予科教授・愛知大学教養部教授として、ほとんど全生涯を教師として終始された。

強い正義感・責任感を以て世に処すれば、憤りを感じることは必ずであるが、君は憤りを内におさえて言動に発することなく、責任はいささかなりとも尽さざるところあらんことをこれ恐れていた。かくして君は己れを持することきわめて厳であった。これが君の健康によくない影響をもたらしたことも否み得ないように思われる。君が入院したのはわずかに二十日間にして不帰の客となつた。まことに痛恨にたえない。愛知大学としては、中国語主任教授として一層の活動を期待していた。君の他界は大なる損失であり打撃である。また滬友会としては円熟した中国語学者としての会員を失つたことであり痛惜にたえない次第である。謹んで冥福を祈る。

〔注〕こゆうニュース 第三五号（昭和五十年十月）所載。

昭和五十年八月五日
愛知大学名誉教授 十五期 鈴木 沢郎

生涯かけた「中日大辞典」

鈴木沢郎愛大名誉教授を悼む

愛知大学は、かけがえのない人を失った。『中日大辞典』の編さん者・鈴木沢郎名誉教授が、寒波厳しい六日朝、不帰の客となった。毎年、鈴木教授からいただく賀状には流麗な文字で中国の吉祥句がしたためられていたが、この新年には賀状が見当たらなかつたので「もしや、健康がすぐれないのでは」と不安を抱いていたところへの訃報（ふほう）だった。

四十三年二月のある日、鈴木教授から「できましたよ」と知らせを受けた。はずんだ声だった。訪れた研究室では、出版社から届いたばかりの『中日大辞典』第一号を胸に抱くようにして教授が待っていた。生まれた赤子を慈しむように一ページ、一ページとめくり、中国語を知らない私に簡化字のこと、辞典のひき方や特色などを丁寧に教えてくださった。辞去するころ外はとっぶり日が暮れていた。

鈴木教授が八十二歳の全生涯をかけたこの辞典は、数奇な運命をたどって世に出た。辞典づくりは昭和八年、東亜同文書院（上海）で日中両国人の共同研究で着手されたが戦争で中断、約十四万枚の資料カードは中国側に接収された。が、資料カードは郭沫若氏の計らいで二十九年、引き揚げ船「興安丸」に託されて愛大に寄贈された。翌年から辞典づくりが再開された。

編さんが進められていた当時の日中関係は、現在の日中友好ムードからみると信じられないほど疎遠だった。中国国内では文化大革命が進行して新造語が次々と生まれ、中国語自体が大揺れだった。内外ともに険しい環境にあったが、鈴木教授は「日中友好の日は必ず来る」と信じて辞典編さんに励んだ。

愛大学長室には郭沫若氏の「激濁揚清」の額が掲げられている。郭氏が愛大の辞典編さんを励ますために贈った墨跡であり、鈴木教授はこの墨跡に心酔していた。その郭氏も、東亜同文書院時代からの協力者だった内山雅夫氏も、すでになく、いま、鈴木教授も世を去った。鈴木教授は「辞典に完成品はない」の信念を持って、初版いらい充実に努めてきたが、中日大辞典の偉業は不滅であるし、愛大建学の精神が生きているかぎり、鈴木教授の遺志をついで改訂作業が続けられていくに違いない。

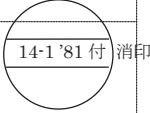
（加藤 龍明記者）

〔注〕 中日新聞 昭和五十六年一月九日（金）所載。

楊石先南開大学長の弔電

TELEGRAM

NIPPON TELEGRAPH AND TELEPHONE PUBLIC CORPORATION

R.No.	Out	Office No.	Sent
446		40	
TRB439 CJA428 OPF0070 XBS507 X2019 JPJX CO			
CNTJ 050 TIANJIN 50 14 1800			
愛知大学 久曾神昇 大学長			
TOYOHASHI			
驚悉鈴木擇郎教授不幸逝世，深表哀悼拜向其家屬至以誠摯的慰問南開大学校長			
楊石先			

received 2115 20

中日大辞典編纂の大事業

加藤 勝美

東亜同文書院と愛知大学とを結び付け、愛大において後世まで語り伝えられる文化事業として『中日大辞典』があり、その歴史は鈴木擇郎の存在を抜きにしては考えられない。鈴木は明治三二年（一八九二）、栃木県芳賀郡清原村の農家の生まれ、小岩井の一つ下になる。書院の商務科を卒業したのが大正七年（一九一八）、これはロシア革命の翌年、米騒動の年に当たる。

「中日大辞典はいつ頃、どうして完成し出版するかというはつきりした見通しはなく、ただ、できるだけのことやっておきさえすれば、必ずなんとかなる、という漠とした自信だけであった」（『中日大辞典の思い出』『滬友』昭和四七年一月号）。着手したのが昭和八年（一九三三）頃だが、「時局は日中戦争の泥沼へ踏みこんだところで、日合作に基盤を置いたこの仕事は大影響を受け」、長い間「断続・停顿」した。注目すべきなのは、鈴木が「日中合作に基盤を置いた」としている点である。日本の敗戦によって、それまでに作られた「華日辞典カード」約一四万枚（七〇八万語）が国民政府に接収された。その引き渡しに際して鈴木は、「将来、事情が許すようになったら、われわれに完成させてもらいたい」と要望したが、他方で、辞典の責任から放免されて、ほっとした気持ちもまたあった。

鈴木は愛大設立と同時に予科教授、昭和二四年（一九四九）には教授となったが、辞典のことはすっかり忘れていた。しかし、この年一〇月、中華人民共和国が誕生すると、学長の本間は「原稿カードがもし残っていたら愛知大学の手で完成させて日中友好に役立てたいという考えを鈴木先生や小岩井先生に相談されました」（今泉潤太郎『中日大辞典と私』愛大現代中国学会『中国 21』VOL.18）。本間や小岩井の熱心な勧めがあった、敗戦で接収されたカードの返還を中国に願い出ることになった。これが昭和二八年頃のことだが、先の接収委員鄭振鐸は新中国の文化部副大臣となっていた。この鄭に手紙を出したいと思っても新中国とは国交がなく、手紙を出す手だてがない。ただ、中華人民共和国が成立した九日後の二四年一〇月一〇日、東京で日本中国友好協会準備会が発足、一年後の五〇年一〇月一日に日中友好協会が設立され本間も理事の一人になっていた（大阪支部設立は二七年一〇月）。

興味深いのは、愛大創立の翌年に小岩井の提唱で学内に作られた国際問題研究所は実質的には中国問題研究所であり、しかもその中に日中友好協会豊橋支部が出来ていて、支部長は小岩井だった。しかも、協会発足四カ月前の六月に朝鮮戦争が始まり、一〇月二五日には抗美援朝の中国人民義勇軍が参戦していて、occupied Japan 日本にあつては協会はアメリカの「敵対的、敵性的な団体」（今泉前掲「八一ページ」）だったが、「日中間に

正式の国交のない間、唯一の民間外交を担った組織として中国側にも認知されていた」(『五十年史』二八七ページ)。さらに昭和二十七年一月に新華社が中国在留日本人の帰国援助方針を發表、翌二十八年一月に日本赤十字社、平和連絡会とともに訪中した日中友好協会理事長内山完造からじかに、中国科学院院長郭沫若に愛人の意向が伝えられ、中国側から、『人民中国』編集部宛て要望書を出すよう助言があり、同年七月、本間学長名で原稿カード返還要望書が郭沫若、鄭振鐸の二人宛に内山を経て提出された。

こうして、翌昭和二十九年四月一日、中国人民保衛世界和平委員会秘書長の劉貫一の名で内山理事長宛に手紙が届いた。この辞典カードは敵産として没収したものであり、本来ならば、おかえしできないものでありますが(略)文化交流の賜物として日本の方々へ我が会からお送りするものです(『五十年史』二八八)。カードは鄭振鐸のものであり、引揚げ船興安丸を利用してこの年の九月下旬、日本に届いた。これ以前昭和二十九年(一九五四)七月に、旧東亜同文書院大学学長、愛知大学学長の肩書で本間が書いた「華語辞典編纂顛末」と題されたコクヨ便箋二枚が〇七年一月に殿岡辰子宅で見つかった。これには書院時代の辞典編纂の意図から始まってカードが返還されるまでの経緯が簡潔に記されている。以下はその全文。

東亜同文書院華語担任教授等は優良な華日辞典の出版されないことを憂いていたが、いよいよ自らの手で之を完成せん事を期し、東亜同文書院華語担任教授、助教、華人講師全員(時期により不同であったが、大体十一、二名)で之に当ることとし、資料の蒐集にとりかかった。

実施方針は、東亜同文書院において華語を担当する教授、助教、講師はすべて、華日辞典編纂に従事すべきことを申合わせた。学校当局よりは、この事業のため特に専属日本人事務員一名を与えられ、研究室の提供を受け、カード、カード整理箱、文具等の消耗品の供給を受けた。

資料は先ず日支両国の華語に関する辞典に材料をとり、更に動、植、鉱物辞典、百科事典、新聞雑誌、文芸作品、華語教科書等にわたって取材した。昭和十五、六年頃時局緊張のため一時工作が停頓したこともあるが、十八、九年頃出版に関して種々の意見が現れ、結局、この種のものには性質上完全を期することは不可能であるから、現有のうちでは最良のものであるとの自信を持てる以上、この辺で一応整理出版すべしとのことに落ちつき、一部のものには整理にかかり、一部のものには更に蒐集をつづけ、昭和二十一年頃までには全部整理を終る予定であった。昭和二十年終戦時において、原稿カードは約十四万枚であったが、一語でカード一枚にわたるものもあり、また同一語が一枚にわたって重複しているものもあるので、実際の語数は十萬語余りであろうと推定される。

終戦時、このカードを引渡した時、将来可能な時機が来たらわれわれに完成させてもらいたい旨を接収委員鄭振鐸氏に申し出ておいたので、今回日中友好協会を通じて返還を申し出たところ、贈与という名目で返還されることになった。

こうして昭和三〇年四月、華日辞典編集委員会が作られて、学内の建物の一つに「華日辞典編纂処」の看板がかけられて、委員長に鈴木擇郎が就任、同年七月、華日辞典刊行会が設立された。しかし、愛大はゼロから出発してようやく十年目の貧乏大学、金はあるか？鈴木の本「思い出」には、「貧弱な愛大の財政から支出することに決定するのに、評議会説得に本間先生が苦勞されたことであろう」、「いいものさえ作っておけば何とかなるという呑気な考えをもって居たものの資金調達能力はゼロなので、資金調達は一切本間先生にお願いし」とあって、本間の存在の重さがこども感じられる。編纂処発足と同時に編纂処専任者の一人となった今泉潤太郎（当時愛大嘱託、昭和七年生まれ）によると、この刊行会は日中文化交流のため辞典を発行する、そのために学外から財政的援助をせよというもので、中国関係の著名人、書院出身者を顧問、評議員とし、学外に開かれた組織として立ち上げられたという。

この刊行会が資金の大半を学外から募り、その実績をもとに大学が印刷費の不足分を負担する形で刊行を後押した。「出版に関してそれを支えたのは本間先生といていいと思います」（今泉前掲一七九）。

しかし、編集作業は順調には進まなかった。苦心の末返還してもらったカードを点検すると、「このまま使用できるものは皆無に近」く、「二十七年の歳月は中国語をとりまく環境を変えなければかりか、中国語そのものも一変させてしまっていた」（『五十年史』二九三）。例えば、「階級」という言葉はかつてはアカの用語であったし、「儲かりますか」という日常語もない。帝国主義、搾取、解放軍は共和国成立後には必須である。辞典は現代中国を多面的に深く理解するための参考書と位置づけ、可能な限り一次資料から語を採用し、中国小百科事典の性格をもたせることとした。

この極めて良心的な方針によって編集期間は予定の二倍になり、大学財政の逼迫も加わって、経費節減のため編集部員は半減し、鈴木、内山、張、今泉の四人のみとなった。今泉たちは「編纂の仕事をしていない時が授業」（今泉前掲一八二）というやり方で編纂の仕事そのものは無給だった。「事務局からは辞典編纂処の建物の明け渡し、完成時期の明示を求められるなど、編集開始以来ずっと夏休み・冬休み返上で努力してきた編集メンバーにとって気の重い時期もあった。本間氏はすでに名誉学長になっていたが、来学時には必ず編集メンバーを励まし、辞典の進捗に関心を持った」（『五十年史』二九五）。昭和四〇年（一九六五）、一応脱稿した。この間の事情は今泉によると、スタッフ数と勤務時間の制約がある一方、現代中国の学術研究の成果を反映させようとしたため、新しい成果が出てきりがなく、字体も簡化字の採用とそれに付随したものが出てくると、それら全部を取り入れる。それで基礎作業だけで十年かかった。さらに、校正の段階では同時並行で最後のページの原稿を送り込むことになるが、その間、新たな資料が中国側で次々に出る（今泉前掲一八三）。印刷に当たっても簡化字の字母を作らねばならぬ。活版印刷だから鉛で母型を作るのだが、職人が和紙に掌程の大きさの字体を書いて、

それを写真に撮って機械で彫る。その数六、七千字、そのコストを図書印刷会社が「日中友好のため大サービス」をして負担してくれた（今泉前掲一八六）。こうした表面に現れない苦労は効率重視の「事務当局」には見えないものだ。

印刷を開始して二年一〇ヵ月後の昭和四三年（一九六八）二月一日に出版、初版一萬冊が大安（総販売元）から発売された。この間に小岩井が亡くなり、薬師遭難（後述）と本間の学長辞任があり、愛大事件第二審の審理がつづいていた。辞典は、当時としては最大の規模になると予想され、あえて『中日大辞典』と命名した（『五十年史』二九五）。初版の鈴木による「編者のことば」には書院で語彙蒐集に当たった者一人（鈴木、熊野正平、野崎駿平、坂本一郎、影山魏、岩尾正利、内山雅夫、山口左熊、木田彌三旺、金丸一夫、尾坂徳司、ほかに中国講師八名）の名を挙げて「労を謝」し、本間の「熱意によつてはじまり、御配慮によつて完成したものと述べ、最後に小岩井が「窮屈な財政の中から編纂費を支出」し、終始編纂員を激励した尽力に謝意を表している。世評は高かった。発刊翌月の『朝日ジャーナル』三月一七日号で実藤恵秀・早大教授が「かねて予告を知っていた読者からいえば『千呼万喚はじめて出で来れり！』というところであろう」と、丁寧かつ好意的な書評を書いた。実藤（明治二九・一八九六年生まれ）は大正以後の七冊の辞書と比較をし、語数が、最大と思われる旺文社の『華日大辞典』（一九五〇年）が八万未満に対し『中日大辞典』は十三万余りだ、そのような大きな差が出る理由について、「三大規律」など政治用語が新中国でつきつぎに出て、それを念入りに集めていること、数詞は、一枚の紙を「一紙紙」、一つの爆弾を「一枚（または一顆、炸弾）」などと表記し、日本語と違う数詞が多く、名詞にはその語に付く量詞を示す親切が初めてなされているからだ、と説明している。

また、一九八九年九月刊『言語学大辞典』（三省堂）第二巻では、橋本萬太郎が、中国人以外が編んだ中国語の二言語対照辞典で「今日の用にたえる」ものとして『マッシュンズ中英辞典』（一九三二、上海）と『中日大辞典』を挙げている。「これまで日本語で出たもつとも広範な辞典。語彙の選択には少し首を傾げるようなところもあるが、原資料から採録しているので、他人の辞典をひきうつしにいた辞典にない確かさをもっている」（九〇五ページ）。傍点（引用者）部分は鈴木たちの仕事に対するもつとも確かである評価である。

刊行五年後の昭和四八年（一九七三）五月、当時の学長、久曾神昇宛て、中国の南開大学から電報が届いた。それは国務院科教組から南開、北京、復旦の三大学へ愛大代表団を受け入れたという招聘状であり、学術訪中団として教授の鈴木擇郎（団長）、助教今泉（秘書長）、教授の池上貞一、助教授の中島敏夫四人の派遣が決まり、愛大の本格的国際交流の嚆矢となった（『五十年史』三〇二）。

この国際交流のふもとで言えば、華日辞典編纂処開設の年、一九五五年一二月、中山大副学長の馮乃超が豊橋にやってきた。この時期、日本学術会議の招きで郭沫若中国科学院長を団長とする中国初の訪日学術代表团が来ることになった。国交未回復の時期

の民間外交だったが、郭が辞典カード返還の恩人なので、日中友好協会を通じて愛大への招聘を計画した。しかし全国各地で引つ張りだこの郭に、その時間的余裕がなく、代わって馮が来学することになった(彼は旧制八高、今の名古屋大学で学んだ)。これが愛大にとって最初の国際交流事業となり(略)豊橋駅前で市民の歓迎集会が開催され(略)思いがけない展開」となったという(今泉前掲一八四)。

なお、郭沫若たちに通訳として随行した劉徳有は後に、「郭沫若・日本の旅」(村山亨訳、サイマル出版会)を執筆したが、各所の歓迎会の参加者のなかに細迫兼光、川上貫一、杉山元次郎(六六ページ)や実藤恵秀、愛大教授林要(八五ページ)の名があり、また代表団が日本に到着する前日、一月三〇日に大山郁夫が亡くなり、二月二日、郭沫若は新宿戸塚の大山宅を吊問している(八八)。郭は一八九二年生まれ、本間喜一の一つ下になる。

豊橋市長を務めたことがある河合陸郎の『河合陸郎伝』(昭和五七年)には、本間の口述筆記による「想い出」(五一―八ページ)があり、それによると、辞典編纂室に掛かっている郭沫若の揮毫「激濁揚清」は、市長時代の河合が全国市長有志団体団長として訪中したとき、北京で多忙な時間を割いて郭沫若を訪問し、辞典編纂の経過を詳しく説明すると、このほか喜んで、この揮毫をし、河合に託したと語っている。

ところで、今泉は二〇〇三年三月に退官しているが、それまでは『中日大辞典』編集委員長であり、第一版の仕事に若手研究者として携わってから実に四〇年余も辞典ともあった。退官後も第三版の編集主幹の立場にあるが、本書執筆中の〇八年七月、豊橋校舎で第一版編纂時の話を聞いたとき、編集主任だった内山雅夫の存在の重要性を語ってくれた。内山は書院三四期生(一九三四年入学)で東亜同文書院の中国語教授で、辞典編纂業務ではマネジメントの中軸となった。今泉が豊橋校舎の「書院研究センター」の棚にある『滬友ニュース』の綴りから探し出してくれた三五号(昭和五〇年一〇月)には鈴木擇郎が執筆した内山の追悼文がある。

鈴木によると、昭和二〇年(一九四五)八月、敗戦の直後、上海で本間をふくむ旧制一高卒業生二〇人ほどの同窓会が開かれた。その時、本間が「日本兵のように横暴なことばかりしていたのでは、中国で人心を得ることは出来ない」と話すと、同席していた一人の青年将校が、次のように「抗弁」した。「南京である部隊が旅館に宿営し、中国語に堪能な二等兵は部隊と旅館の意思疎通を図り、誠心誠意旅館を保護した。主人はそれに感動し、娘婿になることを懇望した。彼は妻子があるので、それは断った。彼が復員するとき、その旅館の親戚一同が集まって盛大な送別の宴を開き、わざわざ上海まで出向いて見送った」。本間がその後、愛大でその話をしたところ、その二等兵は内山であると知らされた。本間は『中日大辞典』出版記念講演会でその話をし、鈴木が内山からそれが事実であることを確認した(内山は大正五・一九一六年生まれだから、敗戦時は二九歳前後になる)。辞典との関わりで言えば、彼の同期の人間は「彼が加わるならば必ずいいものが出来るだろう」と話したという。

本書四五ページに記されている日本の編集者二人のうち、熊野、野崎、坂本の三人は内山が編集業務に当たるといふことで辞典編集を了承したほどだった（今泉談）。鈴木は内山の人となりについて書いている。「強い正義感・責任感をもって世を処すれば、憤りを感じることは必至であるが、君は憤りを内におさえて言動に発することなく、責任はいささかなりとも尽くさざるところあらんことを、これ恐れていた。かくして君は己れを持つこと極めて敵であった。これが君の健康によくない影響をもたらしたことも否み得ないように思われる」。入院後わずか二〇日間での死であった。こうした内山は、その生き方や気質において、小岩井との類似性を思わせ、しかも同じ脾臓癌であり、小岩井が六二歳、内山は五九歳直前だった。愛大史の栄光の背後には、内山のような、あまり語られることのない死が数多くあるはずである。

このように内山の死を悼む鈴木がその二年後の昭和五二年（一九七七）秋、辞典編纂の功績によって勲三等瑞宝章を受け、鈴木のもとへ東京の本間から電報が届いた。「バンザイキガセイセイシタ」。国立大学の鈴木の同世代の多くが既に叙勲していることが、本間にはかなくてから腹立たしいことだった。

その叙勲祝賀会が一月一九日に行われ、参加者百余名、名誉学長の本間が「敗戦による同文書院廃校、引き揚げの混乱時に、何物にもかえて学籍簿、成績簿を持ち帰った献身的な行為を称賛されとともに、しづ江夫人の内助の功を称え」た（今泉記、昭和五年一月一日『愛大通信』一四号）。会場は西ドイツのポツダム大学の張祿澤教授（愛大の前中国語教授）から送られた花束で彩られ、滬友会会長の祝辞、在北京同窓生の祝電などが披露された。

〔注〕『愛大を創った男たち』第五章「再度の学長就任から辞任まで」（二〇〇一年三月愛知大学発行）より抜粋。